

---

地域文化施設におけるアウトリーチ・ワークショップの  
成果や効果に関する調査研究  
報告書

令和5年3月

一般財団法人地域創造



## ごあいさつ

一般財団法人地域創造では、文化・芸術の振興による創造性豊かな地域づくりを目的として、地方公共団体との緊密な連携の下に、地域における文化・芸術活動を担う人材の育成、公立文化施設の活性化支援、情報提供、調査研究などの事業に取り組んでいます。

こうした事業の一環として令和4年度は「地域文化施設におけるアウトリーチ・ワークショップの成果や効果の検証と評価」をテーマに調査研究を実施しました。この報告書は、その成果をとりまとめたものです。

地域創造では平成10年度からオーディションで選んだクラシック音楽の演奏家を地域に派遣し、公立文化施設とともに学校などへのアウトリーチとコンサートを行う「公共ホール音楽活性化事業（おんかつ）」を実施してきました。以降、クラシック音楽だけではなく演劇や、現代ダンス、邦楽へと分野を広げ、全国各地の公立文化施設とともにアウトリーチやワークショップに積極的に取り組んできました。また調査研究事業でも、アウトリーチをテーマに、その効果やあり方について調査研究・提言を行ってきました。（平成12年度「アウトリーチ活動のすすめ（地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究）」、平成20・21年度「新[アウトリーチのすすめ]～文化・芸術が地域に活力をもたらすために～（文化・芸術による地域政策に関する調査研究）」）

現在では、アウトリーチが認知され、広く実施されるようになってきましたが、平成20・21年度に実施した先の調査から10年以上が経過し、これまで地方公共団体や公立文化施設が実施してきたアウトリーチやワークショップが参加者の意識や生活に、また公立文化施設の運営にどのように影響を与えてきたのかを改めて調査し、その成果や効果を検証し、今後の展開方法や方向性について検討するために本年度調査のテーマを定めました。

調査にあたっては、全国の公立文化施設の中で、アウトリーチやワークショップを継続実施し、先進的な取り組みを行っている6つの施設に協力をいただき、アンケート調査やグループインタビューを実施しました。また、調査研究委員会を立ち上げ、有識者の方々と意見交換や助言もいただきながら、報告書を取りまとめました。

この報告書は令和4年度の調査結果をとりまとめたものですが、令和5年度もアーティスト等を対象とした調査を行うなど、引き続き本テーマに関する調査を継続し、公立文化施設におけるアウトリーチ・ワークショップの今後の展開方法や方向性を検討してまいります。

この成果が、地方公共団体や公立文化施設の職員の方々をはじめ、各地域で文化・芸術に携わるの方々の参考となり、文化・芸術による創造的な地域づくりに活用されれば幸いです。

実施にあたり、多くの方々にご協力をいただきました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

令和5年3月  
一般財団法人 地域創造  
理事長 山本 信一郎



# 目次

序 調査の実施概要.....	i
第1章 調査協力館のアウトリーチ等の実施概要.....	1
I. アウトリーチの実施概要.....	3
II. 各館の特徴的な取り組みのポイント.....	7
第2章 学校向けアウトリーチの実績と成果、効果 （アンケート調査・インタビュー調査の結果から）.....	9
I. アンケート調査の対象の属性.....	11
II. 子どもにとっての成果や効果.....	16
III. 教員や学校にとっての成果や効果.....	22
IV. 文化施設にとっての成果や効果.....	32
第3章 各館の特徴的な取り組みと成果（インタビュー調査の結果から）.....	37
I. 北上市文化交流センター さくらホール いわての演奏家とつくる音楽会・Music Program IWATE 4館巡りプロジェクト.....	39
II. いわき芸術文化交流館 アリオス キッズルーム・プログラム.....	43
III. りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館 視覚障がい者のための Noism からだワークショップ.....	46
IV. 上田市交流文化芸術センター サントミュージゼ 実験的演劇工房.....	49
V. 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT ワークショップファシリテーター養成講座.....	52
VI. 北九州芸術劇場 ひとまち+アーツ協働事業「若者応援芸術プログラム」.....	55
資料編 調査協力館のアウトリーチ等の主な内容と補足資料.....	59



# 序

## 調査研究の 実施概要

### 1. 調査の目的

平成10（1998）年度の「公共ホール音楽活性化事業」の開始から25年が経過し、「公共ホール演劇ネットワーク事業」「公共ホール現代ダンス活性化事業」など、（一財）地域創造が公立文化施設とともに取り組んできたアウトリーチやワークショップなどの事業は各地に広がり、多様な形で展開されるようになってきた。地域の文化的な環境づくりには、劇場・ホールの施設内だけでなく、施設外においても、長期的、継続的に、文化芸術との出会いの場を生み出すことがこれまで以上に求められている。

そこで本調査研究では、地方公共団体や公立文化施設が地域における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを進める上で参考となる資料を提供するため、公立文化施設が実施してきたアウトリーチやワークショップが参加者の意識や生活、市民の文化的環境、公立文化施設の運営にどのような影響を与えてきたのか、成果や効果の検証と考察を行った。

### 2. 調査の前提と6館への協力依頼

本調査研究では、財団法人地域創造が2010年3月にまとめた「文化・芸術による地域政策に関する調査研究」<sup>1</sup>を「前回調査」と位置づけて、その後12年の間にアウトリーチやワークショップに長期的、継続的に取り組むことでどのような成果や効果が生まれているか、前回調査との比較も含めて、把握、検証することとした。なお、「アウトリーチ」という用語は、前回調査で次のように解説されており、本調査研究でも同様に捉えることとする。

アウトリーチ (outreach) という英語は、もともと①手を伸ばすこと、手を伸ばした距離、到達距離、②（地域社会への）奉仕〔援助、福祉〕活動、（公的機関や奉仕団体）の出張出前サービス、という意味である。公立文化施設等においては、1990年代後半から、日頃、文化・芸術に触れることの少ない住民に対して文化・芸術を体験できる機会を提供する事業の名前として定着してきた。

また、同報告書では、アウトリーチの概念を整理するため便宜的にアウトリーチの位置づけや内容を4つのアプローチとして類型化している（図1）。

前回調査から12年が経過した今回の調査では、劇場やホールが長期的、継続的に取り組んできたアウトリーチやワークショップの成果や効果を把握するため、全国の公共劇場・ホールの中からそれらの事業を積極的に実施している6つの館に調査への協力を依頼した（具体的な調査協力館は p.iv 参照）。そのため、アンケート調査では図2のように調査の対象や内容について前回調査とは異なる点があり、アンケートの調査結果の前回調査との比較・分析については、「調査対象の傾向」も含め、両者の相違点に留意する必要がある。

<sup>1</sup> 財団法人地域創造「文化・芸術による地域政策に関する調査研究—新 [アウトリーチのすすめ]」（平成22年3月）

**図1 アウトリーチの4つのアプローチ（前回調査）**

	目的	戦略
A. 劇場・ホール内での鑑賞・体験サポート	子どもたちや高齢者、障がい者、社会的弱者等の劇場やホールにおける鑑賞活動の促進	学校におけるアウトリーチと劇場・ホールでの鑑賞事業を連携したプログラムの開発 ハード、ソフト両面からのバリアフリー化、スタッフの「心のバリアフリー」の実現
B. 派遣型アウトリーチ①（単発・集中型）	文化・芸術に触れる機会の少ない、あるいは困難な住民や地域に対して、文化・芸術を体験する機会を提供	アーティストを学校や福祉施設などに派遣し、ワークショップやミニコンサートなどを実施
C. 派遣型アウトリーチ②（継続・長期型）	文化・芸術を教育や福祉現場の日常的な活動として位置づけ	アウトリーチを長期的、継続的なプログラムとして展開
D. 連携・協働型アウトリーチ（文化以外の政策分野と連携して企画・実施）	文化・芸術を通じた地域の課題（教育、福祉等）への取り組み	教育や福祉など、文化以外の政策領域、施設や団体との協働プログラムの展開

**図2 前回と今回のアンケート調査の違い**

	前回調査	今回調査
調査名称	文化・芸術による地域政策に関する調査研究—新 [アウトリーチのすすめ]（2010年3月）	地域文化施設におけるアウトリーチ・ワークショップの成果や効果に関する調査研究（2023年3月）
調査対象	地域創造が実施した公共ホール音楽活性化事業（以下「おんかつ」）、公共ホール現代ダンス活性化事業（以下「ダン活」）、公共ホール演劇ネットワーク事業に参加した小・中学校の児童・生徒、教員、及び福祉施設の職員	「おんかつ」や「ダン活」等の地域創造の事業にも参加経験があり、長期的、継続的に地域の小・中学校へのアウトリーチに取り組んできた調査協力館6館（次頁参照）が実施したアウトリーチに参加した小・中学校の児童・生徒、教員
調査対象の傾向	公共ホールがコーディネートする小・中学校で、アウトリーチの4つのアプローチ（図1）のうち「B. 派遣型アウトリーチ①（単発・集中型）」が中心	公共ホールが長期的、継続的に実施してきたアウトリーチが対象で、アウトリーチの4つのアプローチ（図1）のうち、児童・生徒にとっては「B. 派遣型アウトリーチ①（単発・集中型）」、公共ホールや学校（教員）にとっては「C. 派遣型アウトリーチ②（継続・長期型）」による成果、効果の把握が目的
芸術分野	芸術分野は音楽・ダンス・演劇がほぼ同じ割合となるよう実施	新型コロナの影響や各館で力を入れる分野の違いなどから、芸術分野は結果的に音楽59.5%、ダンス24.5%、演劇16.0%となった（p.11 図1参照）。
調査実施期間	2008年12月15日～2009年12月18日（およそ1年間）	2022年9月9日～12月2日（およそ3カ月）
回収状況	児童・生徒対象調査・・・2,555件 教員対象調査・・・229件	児童・生徒対象調査・・・1,590件 教員対象調査・・・157件



---

### 3. 調査の実施内容

#### (1) 意見交換会の実施

本調査への協力を依頼した6館の担当職員に出席してもらい、調査研究の概要を説明した上で、調査への協力の依頼、各館が実施しているアウトリーチ、ワークショップの紹介、調査の方法（アンケート調査、事例調査）について意見交換を行った。

[調査協力館]（括弧内は、報告書の中で用いた略称）

北上市文化交流センター さくらホール（北上さくらホール）

いわき芸術文化交流館 アリオス（いわきアリオス）

りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館（新潟りゅーとぴあ）

上田市交流文化芸術センター サントミュージゼ（上田サントミュージゼ）

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT（とよはし PLAT）

北九州芸術劇場

[実施日]

2022年5月11日

#### (2) 調査研究委員会の開催

調査研究の内容に精通した有識者からなる調査研究委員会を設置し、調査の内容や方法、分析結果や報告書の取りまとめなどについて助言を得ながら検討し、アウトリーチやワークショップのあるべき姿や方向性について意見交換を行った。

[調査研究委員]

上野 正道 上智大学 総合人間科学部 教育学科 教授

神前 沙織 NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク チーフ・コーディネーター

田中 真実 認定NPO 法人STスポット横浜 事務局長／横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局長

田中 玲子 認定NPO 法人トリトン・アーツ・ネットワーク エグゼクティブプロデューサー／理事

千田 祥子 公益財団法人音楽の力による復興センター・東北 シニア・コーディネーター

源 由理子 明治大学公共政策大学院ガバナンス研究科 教授／明治大学 副学長（社会連携担当）  
／明治大学社会連携機構長

---

## [開催概要]

第1回：2022年6月7日

- 令和4年度調査研究の概要
- アウトリーチ・ワークショップについて意見交換
- アンケート調査、事例調査について

第2回：2023年1月10日

- アンケート調査の中間報告
- インタビュー調査の中間報告
- (中間報告を踏まえた) 意見交換

第3回：2023年3月7日

- アンケート調査結果の報告
- インタビュー調査結果の報告
- 報告書のとりまとめについて

### (3) アンケート調査

6つの調査協力館が実施する、小学校、中学校（特別支援学校・学級を含む）でのアウトリーチに参加した児童・生徒及び参加校の教員へのアンケート調査を実施し、アウトリーチの実施状況や成果、効果を把握・分析した。

#### [調査対象]

- 下記の調査協力館が行う小・中学校等へのアウトリーチに参加した児童・生徒、及び学校教員。
  - 北上市文化交流センター さくらホール
  - いわき芸術文化交流館 アリオス
  - りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館
  - 上田市交流文化芸術センター サントミュージゼ
  - 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT
  - 北九州芸術劇場

#### [調査方法]

- 調査票の配布：地域創造から調査協力館の担当職員に配布予定枚数の調査票を郵送し、担当職員からアウトリーチの受入れ校の教員に必要部数を手渡し、教員から参加した児童・生徒、学校管理職や見学した教員に調査票を直接配布した。
- 調査票の回収：アウトリーチの受入れ校の教員が回収、後日、調査協力館の担当職員が調査票を回収し、取りまとめて地域創造に返送した。

---

[調査実施期間]

2022年9月9日～12月2日（前回調査は2008年12月15日～2009年12月18日）

[回収状況]

- 児童・生徒対象調査・・・1,590件（前回調査は2,555件）
- 教員対象調査・・・157件（前回調査は229件）

[調査内容]

- アウトリーチの受け入れ担当の学校教員に、プログラムの実施学年、芸術分野、参加児童・生徒数、プログラムの実施時間などの回答を依頼し、児童・生徒や教員が参加したプログラムの分析軸となるデータを収集した。
- 児童・生徒対象と教員対象の2種類の調査票の設問項目は、次のとおり。基本的に前回調査（2008～2009年）と共通の設問文と選択肢とし、一部新規の設問（※印）を設けた。

◎児童・生徒対象の調査項目

- 学年、学校にいるとき楽しいと思う時間、習い事やクラブ等でやっていること、過去のアウトリーチの参加経験※
- プログラム実施前の期待の度合い、参加後の満足の度合い、プログラムの継続の要望、プログラムに参加したことによる具体的な効果、プログラムに参加した感想・印象
- プログラムの継続によって期待される自分自身の変化、文化・芸術との関わり方の変化、学校生活への影響、普段の授業態度への影響※
- 文化施設における文化・芸術の鑑賞や創造の経験※、文化施設の来訪頻度、文化施設のインリーチ※
- 今回のプログラムに対する感想や思い出に残ること（自由記述）、文化施設に対する要望、感じていること（自由記述）

◎教員対象の調査項目

- 学校での立場と今回の授業の関わり方、過去のアウトリーチによる授業の担当経験※、プログラム実施のきっかけ、プログラムの目的
- プログラム実施前の期待の度合い、実施後の効果の度合い、実施したことによる具体的な効果、継続した場合に期待できる効果
- 教員自身が受けた効果や影響、子どもたちのどのような能力に効果があるか、プログラムを実施する上で感じた課題、継続の意向、継続しやすくするための課題
- 継続した場合に期待できる地域社会への効果※、改訂学習指導要領における効果※

- 
- 地域の文化施設や文化団体・芸術系NPO 等と学校との連携の必要性、連携に必要となる機会やしくみ
  - 参加した児童・生徒の顕著な変化や効果が現れたエピソードや様子（自由記述）、授業に対する感想、意見、地域の文化施設や文化団体・芸術系NPO 等への要望（自由記述）

#### (4) インタビュー調査

前回調査では行わなかったが、今回の調査では6つの調査協力館が行うアウトリーチやワークショップ等の事業担当の職員、アウトリーチを実施した学校教員、各館が取り組む特徴的なアウトリーチやワークショップの参加者や関係者を対象に、アウトリーチ・ワークショップを実施した成果や効果、現状の問題や課題、今後の展望に関し、インタビュー調査を行った。

##### [調査実施期間]

2022年11月9日～11月23日

##### [調査対象]

- アウトリーチやワークショップ等の事業担当者・・・24名
  - 6館が行うアウトリーチを実施した教員・・・22名
  - 6館が行う特徴的な取組の参加者や関係者・・・22名
- 合計・・・68名

##### [調査内容]

###### ◎事業担当

- アウトリーチ・ワークショップのこれまでの実績（実施回数、対象、参加者数、内容）
- アウトリーチ・ワークショップ参加者にとっての成果・効果
- ホール・劇場にとっての成果・効果
- 問題点・課題と今後の方向性

###### ◎学校教員

- アウトリーチ実施の教科、目的や期待
- アウトリーチ実施の成果・効果（子どもたちにとって）
- アウトリーチ実施の成果・効果（学校、教員にとって）
- 問題点・課題、ホール・劇場への要望、期待

###### ◎任意設定

- 各施設が実施する特徴的なアウトリーチやワークショップの内容やインタビュー対象者に応じて設問を設定

---

#### 4. 報告書の構成

本報告書では、まず「第1章 調査協力館のアウトリーチ等の実施概要」で各館のアウトリーチの趣旨・目的、対象、芸術分野、アーティスト、募集方法などの実施概要、各館が取り組む特徴的なアウトリーチ関連事業やワークショップのポイントを整理した。

その上で、「第2章 学校向けアウトリーチの実績と成果、効果」では、アンケート調査、インタビュー調査の結果を横断的に分析、整理し、調査対象の属性、子どもにとっての成果や効果、教員や学校にとっての成果や効果、文化施設にとっての成果や効果などの視点から、継続的、長期的に実施してきた学校向けアウトリーチの成果や効果を把握し、「第3章 各館の特徴的な取り組みの概要と成果」では、主にインタビュー調査の結果から、各館の特徴的な取り組みの概要や成果、効果を分析、整理した。

最後に「資料編 調査協力館のアウトリーチ等の主な内容と補足資料」として、6つの調査協力館のアウトリーチの概要を共通する7つの項目で整理し、特徴的な取り組みについては概要の説明と補足的な資料を掲載することとした。

#### 5. 調査期間

2022年4月12日～2023年3月31日

#### 6. 調査の実施体制

本調査は株式会社ニッセイ基礎研究所に委託して実施した。

吉本光宏（ニッセイ基礎研究所 研究理事・芸術文化プロジェクト室長）

大澤寅雄（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室 主任研究員）

太田真奈美（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室 研究アシスタント）



# 第 1 章 調査協力館のアウトリーチ等の実施概要





# アウトリーチの実施概要

ここでは、本調査研究に協力いただいた6つの調査協力館のアウトリーチについて、趣旨・目的、対象、芸術分野、アーティスト、募集方法などの実施概要を整理した。（各館の事業の詳細は資料編 p.59 を参照）

## 1. アウトリーチの趣旨・目的

### (1) 学校向け

6つの調査協力館は、いずれも学校向けのアウトリーチに積極的に取り組んでいる。その趣旨や目的は館ごとに異なっているが、感性やコミュニケーション能力、想像力や表現力など、子どもたちの幅広い能力を育成することを目的に掲げているほか、アーティストとの出会いを重視したり、新しい学びの可能性を探る館もある。

#### [子どもたちの育成]

- 子どもたちのしなやかな感性や、未来に向けて力強く生きていく力を育む（いわきアリオス）
- 児童の感性や想像力を育む／夢を信じ、明確な目標を立てて努力することの大切さと魅力を知る／児童同士が互いの感じ方の違いを知る／人間性やコミュニケーション能力を育む（上田サントミュージゼ）
- 創造性や子どもたち同士のコミュニケーション能力を育むとともに、豊かな情操を養う機会の拡大を目指す（とよはし PLAT）
- 子どもたちの想像力や表現力、他者と協働しながら新しい価値を創造する力を育み、創造性や個性を伸ばす手助けとなる。身体を動かす楽しさや表現する豊かさ、他者とのふれあいやコミュニケーション力を育てる（北九州芸術劇場）

#### [アーティストとの出会い]

- 子どもたちとアーティストが間近な距離でコミュニケーションを交わす（いわきアリオス）
- 普段身近に接する機会の少ないアーティストとの交流（とよはし PLAT）
- 多様な価値観を持つアーティストや芸術との出会いを体験する（北九州芸術劇場）

#### [新しい学びの可能性]

- 学校と劇場が連携・協働することで、アートを活用した新しい学びの可能性を探る（とよはし PLAT）

### (2) 一般市民向け

6館とも学校だけでなく一般市民向けのアウトリーチも実施しているが、北上さくらホールといわきアリオスは、その目的にホールや館に足を運びづらい市民を対象にアウトリーチを実施することを明示している。

- 様々な理由でホールに足を運びづらい人や、文化芸術に興味がないと思っている人に演奏会やワークショップを届け、アーティストとの双方向の交流により文化芸術による感動をもたらす（北上さくらホール）
- 地理的な事情やその他の理由で館に足を運ぶことが難しい方々を対象に、公民館や地域のコミュニティ施設などにおいて、コンサートやワークショップを開催する（いわきアリオス）
- りゅーとぴあが持っている音楽・演劇・舞踊の専門性を生かし、舞台芸術の魅力を広く市民に伝えて、舞台芸術を生きる喜びとして感じる市民が増えていく（新潟りゅーとぴあ）



いわきアリオス：おでかけアリオス☆  
ワンコインコンサート② 神永大輔  
(尺八) & 中村大史 (ギター) ライブ  
(2023年3月)

北上さくらホール：特別支援学級コ  
ンサート 金管五重奏団 Buzz Five  
(2020年11月)



## 2. アウトリーチの対象

### (1) 学校及び子ども・青少年向け

アウトリーチの受け取り方は、年齢や学年によって異なるため、対象をどのように設定するかは重要なポイントである。

北上さくらホールは「教育（幼稚園、小・中学校）」「保育（保育園、学童保育所）」という枠組みを設定し、中学校は主に特別支援学級を対象にしたアウトリーチに加え、子どもたちを対象にした舞台芸術体験事業「キッザート」も実施している。いわきアリオスは小・中学生、新潟りゅーとぴあは小学4年生と5年生を対象としている。

上田サントミュージーゼは市内の小学校全25校の5年生全員（約1,500名）が毎年「クラスコンサート」を体験できるようにしているほか、中学校や高校、専門学校等でも「地域交流アクティビティ」を実施している。

とよはしPLATは、小・中学生（特別支援学校・学級を含む）を対象に、①新年度のクラスづくりワークショップ、②演劇・ダンス・音楽による表現体験ワークショップ、③授業の成果を演劇形式で学び直すワークショップ、④同一学年による継続的な表現ワークショップ、⑤学芸会・学習発表会に向けたワークショップ、⑥特別支援学校・学級の児童・生徒対象の表現体験ワークショップの6種類の基本のプログラムを設けており、学校側のニーズに合わせてアウトリーチを展開している。

北九州芸術劇場は小学3～6年生（演劇・ダンス）、中学1～3年生（演劇）、特別支援学校（小学部・中学部）（ダンス）というように、対象によって演劇、ダンスを使い分けている。教員との打合せを丁寧に行うのが特徴で、実施決定後に担当者が学校を訪問し最初の打合せ、その後アーティストと担当者が下見と打合せをしてから本番を迎える。教員の要望を踏まえ、1日ではなく2日間のプログラムを企画、実施し、1日目、2日目とも振り返りの時間を設けている。また北九州芸術劇場は、劇場の4つのコンセプトのひとつ「育つ」に対応する事業として、「夏休み！子どもの劇場体験」「高校生のための演劇塾」「大学演劇ラボ」などのほか、留学生や大学生、未就学児親子向けのダンスワークショップなども実施している。

### (2) 一般市民向け

一般市民向けアウトリーチの対象としてユニークな設定をしているのは、北上さくらホールである。障がい（障がい者福祉施設）、地域（教会・温泉・ショッピングセンター等、赤ちゃんと家族）、高齢者（高齢者福祉施設）、医療（県立中部病院／緩和ケア）、企業という枠組みを設け、学校に比べると件数は少ないものの、ホールに足を運ぶことが難しい人々に幅広く文化芸術を届けようとしている。

いわきアリオスは、小・中学校向けと並行して開館時から「コミュニティ型」のアウトリーチを実施しており、公民館や地域のコミュニティ施設でコンサートやワークショップを開催している。新潟りゅーとぴあは市内の病院のほか、市外の図書館や文化会館でもアウトリーチを実施しており、専属舞踊団 Noism のメンバーは視覚障がい者を対象にしたワークショップに取り組んでいる（詳細は後述）。

上田サントミュージーゼは高齢者施設等で無料のコンサートやワークショップを行う「地域交流アクティビティ」に加え、「地域ふれあいコンサート」として公民館などを会場にワンコインコンサート（入場料500円、高校生以下は無料）も実施している。これらの活動を行うアーティストには、自身で楽曲や作曲家についてお話しをする「アナリーゼワークショップ」やホールでのリサイタルを依頼しており、「レジデント・アーティスト」

新潟りゅーとぴあ：東響アウトリーチ  
森岡ゆりあ (Vn)、斉藤晴海 (2022年  
6月)



として、アウトリーチをベースに多様なプログラムを展開しているのも上田サントミュージゼの特徴である。

とよはし PLAT は、演出家や劇作家、ダンサーや振付家によるワークショップ、公演に関する「トーク&レクチャー」や映像の上映会「戯曲創作講座」や「アートマネジメント講座」といった各種講座などを実施している。また、ワークショップを進行する人材（ファシリテーター・進行役、コーディネーター）を長期的・継続的な視点で育成する連続講座『ワークショップファシリテーター養成講座』に取り組んでいる（詳細は後述）。

北九州芸術劇場は、「育つ」というコンセプトに対応する形で、一般市民を対象に、劇場や事業への知識を深めたり、本番のサポートを行う「劇場文化サポート事業」、舞台芸術の専門家による公開講座、経験者を対象にした演劇やダンスのワークショップなども実施している。

### 3. アウトリーチの芸術分野

アウトリーチの芸術分野は、公演など他の事業で力を注いでいる分野との関連性も含め、各館の特性が表れている。

北上さくらホールはクラシック音楽とダンスのアウトリーチを実施している。いわきアリオスはクラシック音楽、邦楽、演劇、身体表現と幅広い分野で実施しているが、クラシック音楽と邦楽が約8割を占めている。開館当初はワールドミュージックやシンガーソングライターによるコミュニティ事業も実施していた。

新潟りゅーとぴあは定期公演を行う東京交響楽団の楽団員によるクラシック音楽が中心となっているが、能楽や演劇、舞踊のプログラムもある。上田サントミュージゼもクラシック音楽による芸術家ふれあい事業を中心としているが、演劇やダンス分野のワークショップも展開している。

とよはし PLAT は、演劇、ダンス、音楽をバランス良く実施している。北九州芸術劇場は劇場の専門性に合わせて演劇、ダンス分野で実施し、音楽分野のアウトリーチやワークショップは劇場と同じ（公財）北九州市芸術文化振興財団が運営する「響ホール」が実施している。

## 4. アーティスト

### (1) 招へいアーティスト

6つの協力館はいずれも地域創造の公共ホール音楽活性化事業（おんかつ）や現代ダンス活性化事業（ダン活）の実施館であり、北上さくらホールやいわきアリオス、上田サントミュージゼ、北九州芸術劇場などでは、おんかつ、ダン活の登録アーティストが館独自のアウトリーチでも活躍している。

また、6館とも公演事業で関係があるアーティストや国内外で活躍するアーティストを招へいしてアウトリーチを実施している。

新潟りゅーとぴあは、実施回数では東京交響楽団の楽団員の音楽アウトリーチが中心で、同楽団の子ども向け演奏会に興味を持ってもらうことを目的としているため、プログラムは定型で、楽団員、伴奏者、財団スタッフの3名が一組となって訪問する形となっている。

とよはし PLAT は、演劇では柏木陽やすずきこーた、ダンスでは城俊彦など、専門分野とファシリテーターの両方で活動するアーティストに依頼することが多く、音楽は棚川寛子や野村誠など、作曲家を起用している。

### (2) 地元アーティスト





北九州芸術劇場：キタQアーティスト  
ふれあいプログラム 有門正太郎  
飛幡中学校（2019年）

地元のアーティストを起用しているのは、北上さくらホール、いわきアリオス、新潟りゅーとぴあ、北九州芸術劇場である。北上さくらホールは2014年から始めた「いわての演奏家とつくる音楽会（いわ音）」で、外部専門家によるオーディションで選定した岩手県内の演奏家にもアウトリーチを依頼している。

いわきアリオスは、市外から招へいするアーティストに加え、開館の2年後（2010年）から「おでかけアリオス研究会」を立ち上げ、いわき出身・在住のアーティストとオリジナルのプログラムづくりに取り組んでいる。この研究会は1期3年で、1年目はアウトリーチの基礎を学んでプログラム作りに取り組み、アウトリーチにデビューする。2年目は1年目を振り返ってプログラムを膨らませ、3年目は研究会メンバーでペアをつくって新たなプログラムに取り組む。

これまでの3期で、12組のアーティストが育っているが、第3期の4組の内いわき在住は1組で、あとの3組はいわき市にゆかりはあるが、首都圏が活動拠点となっている。

新潟りゅーとぴあは、2012年に地域創造の「公共ホール音楽活性化政令指定都市モデル事業」として地元の登録アーティストによる「りゅーとぴあ音楽アウトリーチ事業」をスタートさせた。登録期間は1期2年、現在の第4期は2組が登録し、それぞれ1年に約10校の小学4年生を対象にアウトリーチを行う。登録アーティストはプログラムづくりに時間をかけ、2年目の最後にはスタジオA（130席）で約2時間のリサイタルを行う。

新潟りゅーとぴあは国内の公共劇場・ホールでは唯一の専属舞踊団 Noism Company Niigata（以下 Noism）による事業を展開している。国際的にも高い評価を受ける同舞踊団のダンサーは、後述する視覚障がい者のためのワークショップだけでなく、市内の小学校で舞踊アウトリーチ事業に取り組んでおり、2022年度には22校で2,000名を超える児童が参加した。

北九州芸術劇場は国内外で活躍するアーティストに加え、有門正太郎、守田慎之介など地元の演劇人も積極的にアウトリーチに起用している。

## 5. 募集方法（学校向けアウトリーチ）

市内の全小学校の5年生全員を対象にクラスコンサートを実施している上田サントミュージーゼを除き、ほかの5館はいずれもアウトリーチの実施校を募集している。

北上さくらホールは、当該年度の5月に小学校等に募集案内を配布して希望を募り、調整して実施先を決定している。ただし、中学校の特別支援学級は全校を対象に隔年で実施するため、募集ではなく学級の有無を確認する形となっている。いわきアリオスは、前年度末に翌年度実施予定のプログラムの案内を作成し、小中学校に配布して、アンケートで希望を募り、協議・調整によって実施校を決定する。

新潟りゅーとぴあは市の教育委員会を通じて市内小・中学校に募集をかけ、学校側の希望と過去の開催実績を勘案して、できるだけ多くの学校に訪問できるよう調整して実施校を決定している。とよはし PLAT の芸術文化体験普及事業は、劇場が豊橋市から委託を受けて実施しており、市の教育委員会が前年度の11月に第1次の、2月に第2次の参加希望校調査を行い、4月に実施校を決定している。

北九州芸術劇場は年度初めに募集を行い、5月中旬から下旬に調整、6月上旬に決定する。応募多数の場合は抽選となっている。



## 各館の特徴的な取り組み

本調査研究では、学校や市民を対象にしたアウトリーチに加えて、各館が取り組む特徴的な関連事業やワークショップの実施状況とその成果や効果も調査した。各館ごとに取り上げた事業の概要と成果、効果は「第3章 各館の特徴的な取り組みの概要と成果」及び資料編「調査協力館のアウトリーチ等の概要」に記載したとおりであるが、ここでは、ポイントを絞ってそれぞれの概要を整理した。

### 1. 県内ホールと連携した展開（北上さくらホール）

北上さくらホールでは、2011年に北上、前沢（奥州市）、大船渡の3地域で実施した地域創造の「おんかつ市町村連携モデル事業」をきっかけに、3地域との絆が深まり、2014年から地域の演奏家を育てる「いわての演奏家とつくる音楽会（いわ音）」スタートさせた。2021年に釜石、大船渡で3名のおんかつアーティストによるトリオの演奏会とアウトリーチを開催、2022年には「いわ音」の地元アーティスト2名が加わって、コンサートやアウトリーチ、地域の演奏家との共演などを行う「Music Program IWATE 4館巡りプロジェクト」を実施した。

厳格な協定を結ばない「ゆるふわ連携」、各館の経験を共有する「現場協力」を重視しており、さくらホールで力を入れてきたアウトリーチから、県内ホールの連携事業としてアウトリーチや演奏会に発展した取り組みは、公共ホールの連携事業として参考になる。

### 2. 公共劇場ならではの子育て支援（いわきアリオス）

いわきアリオスでは、東日本大震災後の2011年8月から「あそび工房」と題し、市民と協働で子ども向けプログラムや子育て世代の支援に取り組んできた。同年10月から館の広報誌「アリオスペーパー」のこども版として「キッズ☆アリペ」を発行し、「あそび工房」の開催案内や子どもや子育て世代に向けたイベントやお役立ち情報の提供を行っている。

そうした活動を通して連携を深めていた市内の子育て支援の団体等の要望も踏まえ、2021年4月から市内の複数のNPO法人等と協働でキッズルーム・プログラムをスタートさせた。妊婦や0歳児のいる親子、生後1ヶ月～未就学児のいる親子などを対象に、身体を動かしたり、絵本や折り紙を使って親子で楽しんだり、子育てに関する心配や困りごとの相談などに応じている。

従来のアウトリーチとは異なるが、子育て期の親子を対象にした文化的なプログラムの実践例として特徴的な取り組みと言える。

### 3. 世界トップレベルの専属舞踊団ならではのワークショップ（新潟りゅーとぴあ）

新潟りゅーとぴあでは、2019年からNoismによる「視覚障がい者のためのからだワークショップ」を開始した。プロの舞踊家の身体に触れたり、音楽に合わせて一緒に動いたりしているうちに、視覚障がい者も一緒に踊っているようになる。参加者の一人はその体験を「舞踊家に身を任せて陶酔の中に一緒に入っていくみたいな感じ」と語る。

その方は、ワークショップで体験した作品を本番で最前列で鑑賞したことについて「ワークショップで自分の中に素晴らしいダンスのイメージが広がっていたので十分に鑑賞できた」と述べている。2018年の「障害者文化芸術推進法」をきっかけに、障がい者による文化芸術活動の取り組みは徐々に広がりつつあるが、ホールの専属舞踊団としてプロフェッショナルな舞踊家がいることで実現できる取り組みといえる。



上田サントミュージゼ:実験的演劇工房  
2rd「どくりつこどもの国」作・演出・  
監修 岩崎正裕 (2015年12月)



とよはしPLAT:ワークショップファシリテーター養成講座2017前期「ワークショップ緑日」

#### 4. 進路を左右するような演劇体験（上田サントミュージゼ）

上田サントミュージゼでは、市内の高等学校演劇班（現在4校）を対象に、2週間程度の間ワークショップや作品制作に取り組み、最終日に成果を発表する「実験的演劇工房」という事業を実施している。日本を代表する劇作家・演出家をレジデンス・アーティストに迎えて、演出や監修、指導を依頼。同世代の高校生が学校を超えて一堂に会して実験的な作品制作に取り組み、「悩み」「考え」「生み出す」過程を一緒に経験することによって、表現の可能性を考え、新たな創作回路を育成することを目指している。

活動の過程で技術スタッフをはじめ、劇場を支える人たちの仕事を知り、経験することで、将来の文化芸術を支える人材の育成も視野に入れており、実際、卒業後に地元の舞台技術の会社に就職したり、舞台美術家や役者を目指して大学に進学した参加者もいる。

#### 5. ファシリテーターの養成（とよはしPLAT）

とよはしPLATでは、市内小・中学校に出向いて行うワークショップの進行役を務める人材の育成を目的に2014年から「ワークショップファシリテーター養成講座」を実施している。演劇ワークショップの体験や進行プランの立案と実践に取り組む「前期」、まち歩きや取材をとおして演劇づくりと発表を行う「後期」の2期で構成されている。

講師陣と同じレベルでファシリテーターを務められるまでには至っていないが、これまでに、アウトリーチのコーディネーターやアシスタントを劇場から委託されるようになった修了生がいるほか、講座での経験を通して、演劇やアウトリーチ、ワークショップの可能性を発見したり、演劇は日常の中に存在していると感じ取ったりするなど、演劇や劇場の意味、役割を深く理解し、それを広めたい、という人材が生まれている。

#### 6. 市内の団体とのパートナーシップから生まれる可能性（北九州芸術劇場）

北九州芸術劇場では、開館10周年（2013年）の頃から地域のさまざまな団体や機関などとパートナーシップを組み、“人と人”“人とまち”をつなぐ「ひとまち+アーツ協働事業」を展開し、舞台芸術の持つ力を地域の課題解決や多様性のある社会の実現に活かそうとしている。

これまで、障がい者福祉団体と協働して、障がいの有無にかかわらずダンスを楽しみ表現する「レインボードロップス」という事業、子ども・若者応援センターと協働して、若者たちとさまざまな「芸術体験」に取り組む「若者応援芸術プログラム」などを実施してきた。

いずれも、7年以上にわたる継続的、長期的な取り組みで、障がいや生きにくさを抱えた人たちに、ダンスや演劇のワークショップや公演の機会を提供することで、参加者の創造性、自己表現力や自己肯定感を高めることに寄与する事業となっている。

## 第2章 学校向けアウトリーチの実績と成果、効果 (アンケート調査・インタビュー調査の結果から)





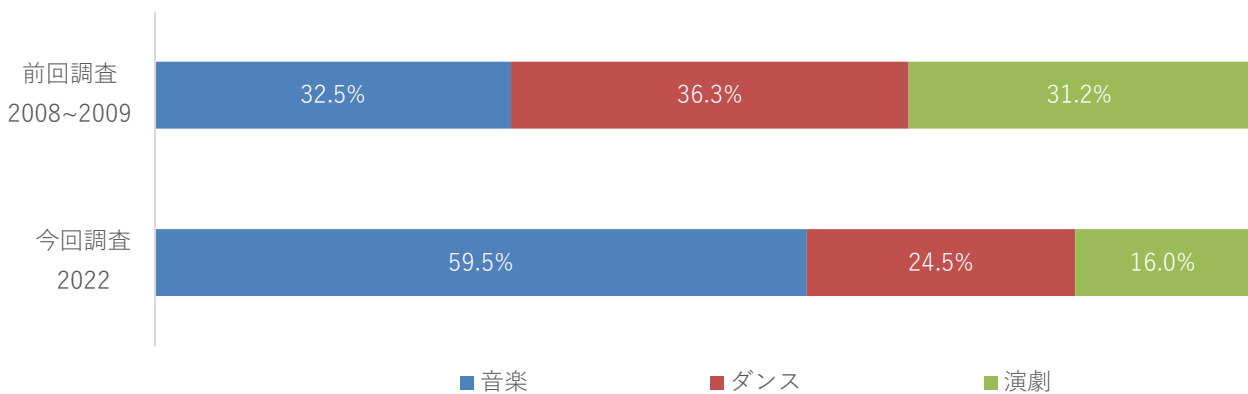
# アンケート調査対象の属性

ここでは、今回のアンケート調査の対象となった児童・生徒や教員の属性について、前回調査（平成 21～22 年）の調査対象の属性との違いが大きかったポイントを整理した。次頁以降、「II. 子どもにとっての成果や効果」「III. 教員や学校にとっての成果や効果」「IV. 文化施設にとっての成果や効果」において、前回調査との比較・分析を行った項目については、アンケート調査対象の属性、特に「芸術分野」「学年」が大きく異なっていることに留意する必要がある。

## ◎ 音楽でのアウトリーチが 6 割、半数近くの回答者は小学 5 年生

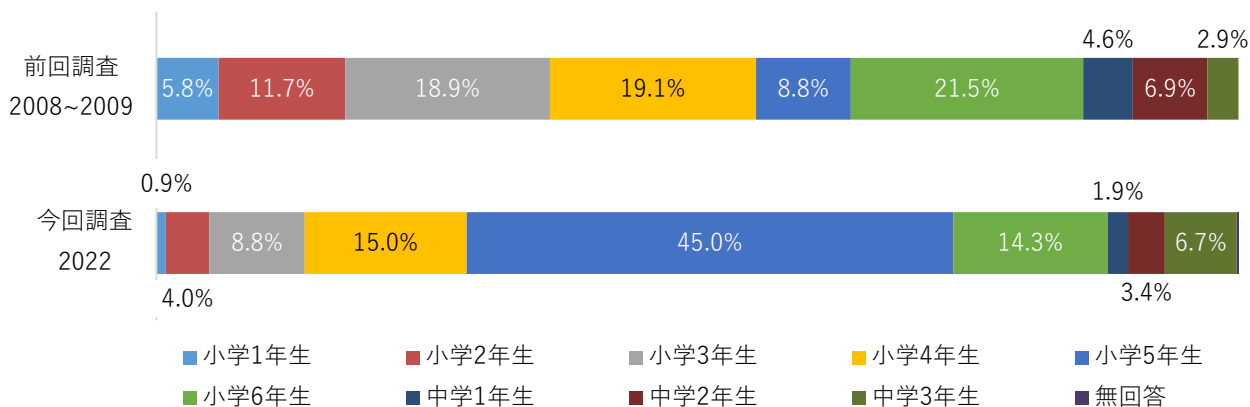
- アンケート調査に回答した児童生徒が参加したアウトリーチの芸術分野は、音楽が 59.5%、ダンスが 24.5%、演劇が 16.0% で、音楽が約 6 割、ダンスと演劇が合わせて約 4 割となっており、前回調査に比べて音楽の回答割合がほぼ 2 倍となっている（→図 1）。
- アンケート調査を実施した 2022 年 9 月から 12 月にかけては、全国的な新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、ダンスや演劇など身体的距離の確保しにくい身体表現のアウトリーチの実施が困難だったことも、音楽の割合が高くなった要因だと考えられる。

図 1（児童生徒）回答者が参加したプログラムの芸術分野



- アウトリーチを行った学年は多い順に小学 5 年生（回答者の 45.0%）、小学 4 年生（15.0%）、小学 6 年生（14.3%）となっており（→図 2）、小学校の高学年（小学 4 年生～6 年生）が 74.2% と、4 人のうち 3 人程度の割合となっている。前回調査と今回調査を比べると、小学 5 年生の割合が大きく増加し（8.8%→45.0%）、小学校低学年（小学 1 年生～3 年生）までの割合が減少している。
- 事業担当者へのインタビュー調査では、アウトリーチを継続する中で小学 5 年生での効果に手応えを感じる意見が聞かれた他、上田のように市内の全小学校の 5 年生全員を対象にアウトリーチを実施している館もある。
- ちなみに、上田サントミュージゼからの回答は全体の 20.1% を占めており、小学 5 年生の回答 715 件のうち上田の回答が 320 件（44.8%）となっている。そのことも回答した児童に 5 年生の割合が高くなった要因だったと考えられる。

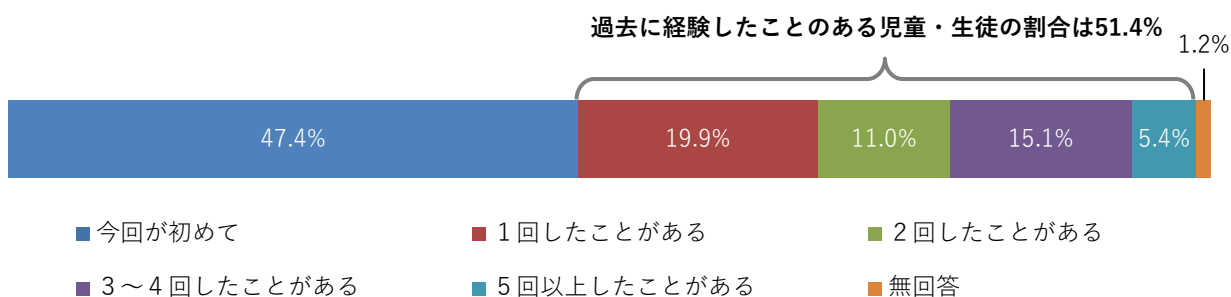
図2 (児童生徒) 回答者の学年



◎ 児童生徒の過半数は、以前にアウトリーチの参加経験がある

- アンケートに回答した児童生徒の過去のアウトリーチ授業の経験は、「今回が初めて」が47.4%、「1回」が19.9%、「3～4回」が15.1%、「2回」が11.0%、「5回以上」が5.4%となっており、過去に経験したことのある割合は51.4%となっている（→図3）。
- 長年アウトリーチに取り組んできた調査協力館6施設では、地域内の同一の小・中学校に通い続けている事例も少なくないため、地域内の学校で進級・進学する中で、アウトリーチの機会を複数回受けている児童や生徒が、初めて受ける児童や生徒を上回り、過半となっていると推測できる。

図3 (児童生徒) 過去のアウトリーチの参加経験

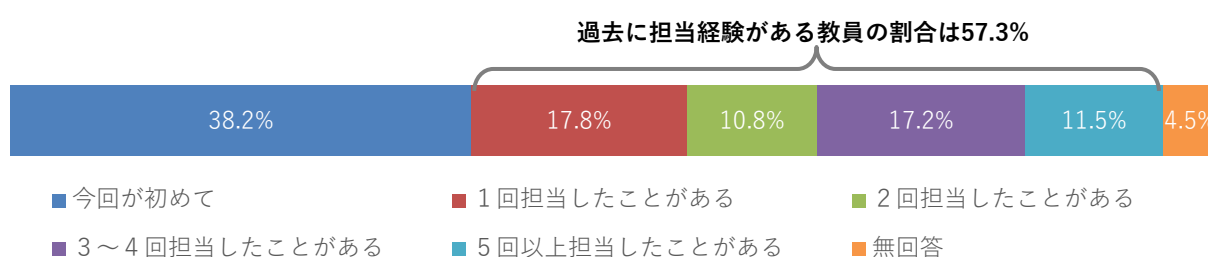


\*1 「総合的な学習の時間」は、小学校で2002年4月に施行された学習指導要領により創設され、小学校3・4年生は年間105単位時間、5・6年生は110単位時間が設定された。2011年4月から改定された学習指導要領では小学校3年生から6年生まで70単位時間となった。  
 中学校では2003年4月に施行された学習指導要領により創設され、時間数は1年生70～100単位時間、2年生70～105単位時間、3年生70～130単位時間だったが、2012年4月からは、1年生50単位時間、2年生・3年生70単位時間となっている。

## ◎ 教員の6割は、以前にアウトリーチの担当経験がある

- アンケート調査に回答した教員の過去のアウトリーチ授業の担当経験は、「今回が初めて」が38.2%、「1回」が17.8%、「3～4回」が17.2%、「5回以上」が11.5%、「2回」が10.8%となっており、過去に担当した経験のある割合は57.3%となっている（→図4）。

図4（教員）過去のアウトリーチによる授業の担当経験

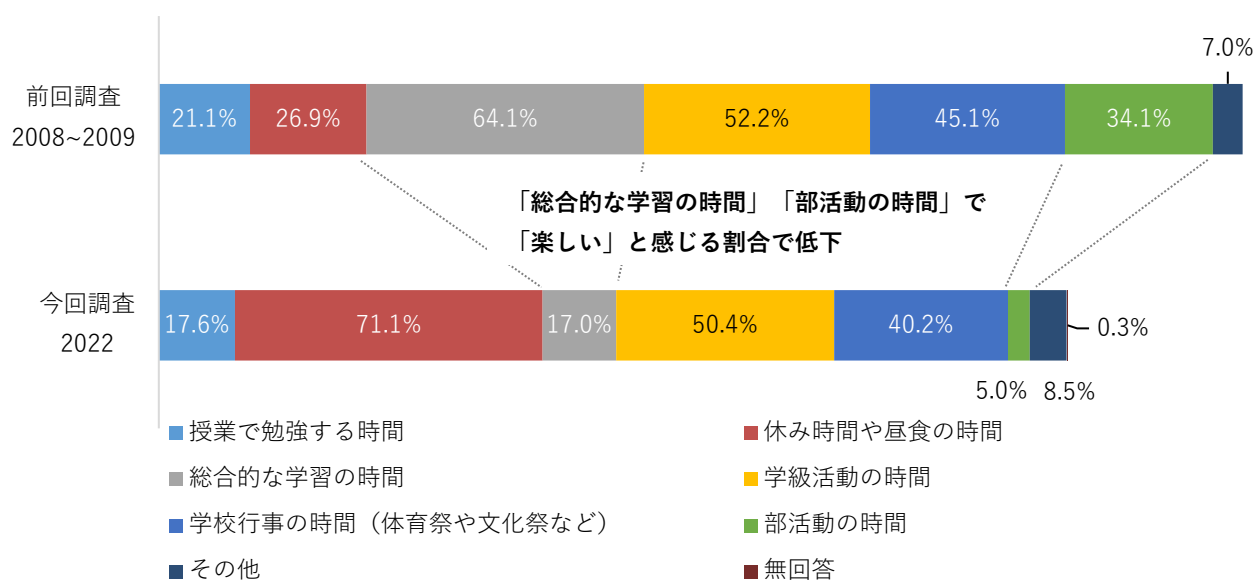


- 回答教員の立場別に見ると、「学校管理職」では、過去に経験したことがある割合が74.2%となっており、「今回が初めて」と回答した割合（19.4%）を大きく上回る結果となった。調査協力館6施設が長年アウトリーチに取り組むことで、繰り返し受け入れたり、プログラムのひとつとして実施したりする小・中学校が増え、アウトリーチの担当経験のある教員が6割近くに達しているものと考えられる。

## ◎ 新型コロナ禍での学校生活の変化や文化活動への影響

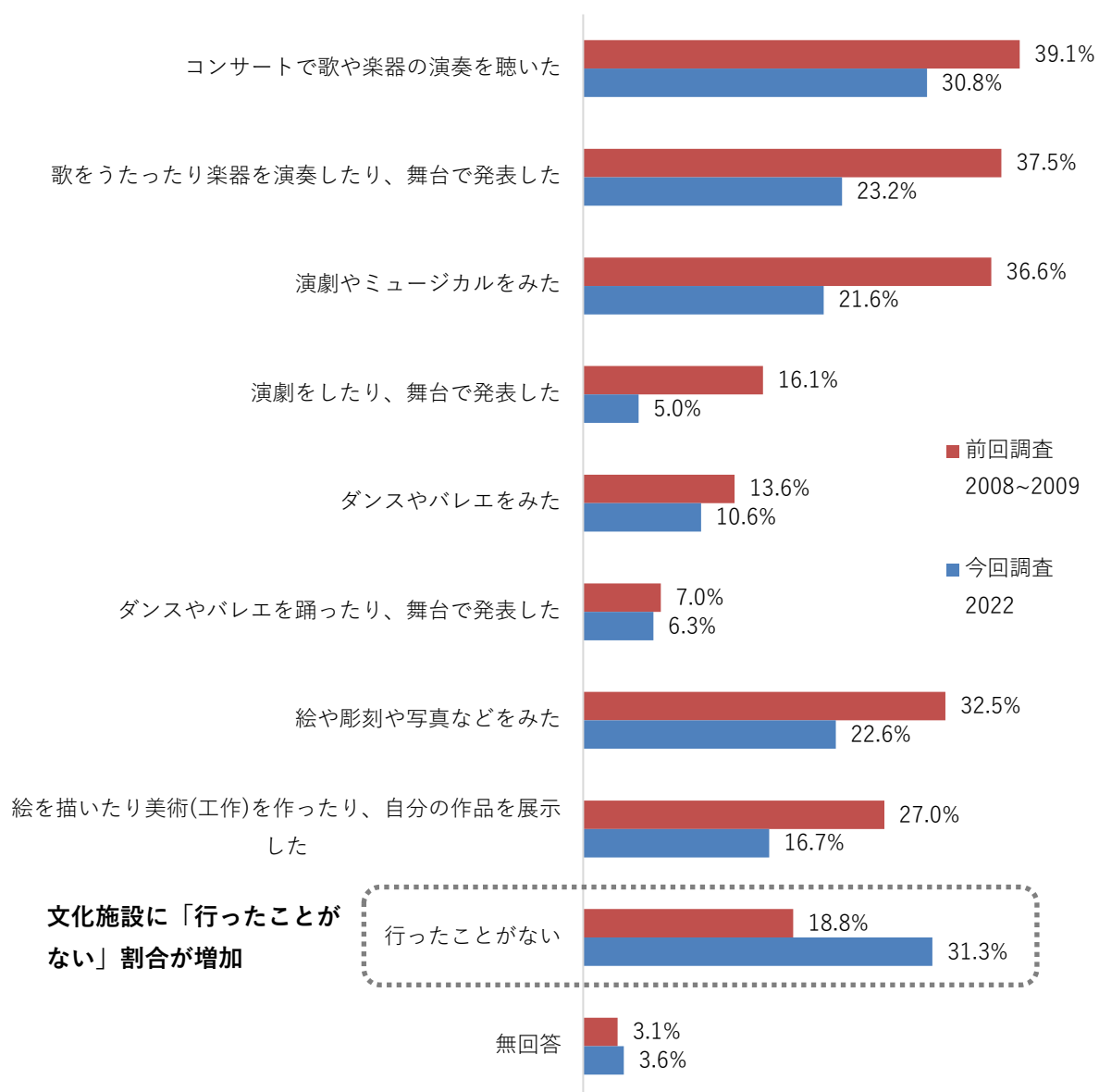
- 今回の調査期間が新型コロナ禍に重なっていたことも、調査対象の児童・生徒の学校生活や文化活動に影響していると考えられる結果がいくつか見られた。
- 学校にいるときに「楽しい」と感じる時間について尋ねたところ、今回の調査で最も多いのは「休み時間や給食の時間」で71.1%、「学級活動の時間」が50.4%、「学校行事の時間（体育祭や文化祭など）」が40.2%となっている。前回調査と比べると割合が大きく減少したのが「総合的な学習の時間」（64.1%→17.0%）、「部活動の時間」（34.1%→5.0%）となっている（→図5）。
- 学校にいるときに「楽しい」と感じる時間で「総合的な学習の時間」の割合が減少している。減少した要因として、前回調査を実施した平成20・21（2008・2009）年と今回調査を実施した令和4（2022）年では、学習指導要領に設定された単位時間が減少したことも背景になっていると推察される（\*1）。
- 文化施設での鑑賞や実演の経験について尋ねたところ、「行ったことがない」が31.3%で最も高く、「コンサートで歌や楽器の演奏を聴いた」（30.8%）、「歌を歌ったり楽器を演奏したり、舞台上で発表した」（23.2%）となっている。前回調査と比べると、「行ったことがない」の割合が大きく増加（18.8%→31.3%）し、それ以外の無回答を除く項目はいずれも減少している（→図6）。

図5 (児童生徒) 学校にいるとき「楽しい」と感じる時間



※本設問では複数回答を回答者数で割合を算出しているため、割合の総数は100%を超えている。  
また、前回調査と今回調査では割合の総数が異なるため、横棒グラフの長さも異なっている。

図6 (児童生徒) 文化施設における文化芸術の鑑賞や創造の経験



# 子どもにとっての成果や効果

ここからはアンケート調査とインタビュー調査の結果から、学校等でのアウトリーチの子どもたちにとっての成果や効果を整理した。

## 1. 参加の満足度と授業の継続の要望

### ◎ 事前の「楽しみにしていた」割合を事後の「満足した」割合が上回る

- 「今回の時間を、前から楽しみにしていましたか」という質問に対し、「楽しみにしていた」という回答は80.4%、「楽しみじゃなかった」は3.0%、「どちらともいえない」が16.4%となった。8割の回答者がアウトリーチの授業を楽しみに期待していた（→図7）。
- 「今回の時間に参加してみて、どう感じましたか」という質問に、「満足した」という回答は91.6%、「満足しなかった」は1.2%、「どちらともいえない」は6.5%となった。9割以上の回答者は授業に参加して満足したことが分かった（→図8）。
- 事前に「楽しみにしていた」という回答は8割で、事前に期待していた割合よりも、参加後に満足した割合が増えたことが分かる。

図7（児童生徒）プログラム実施前の期待の度合い

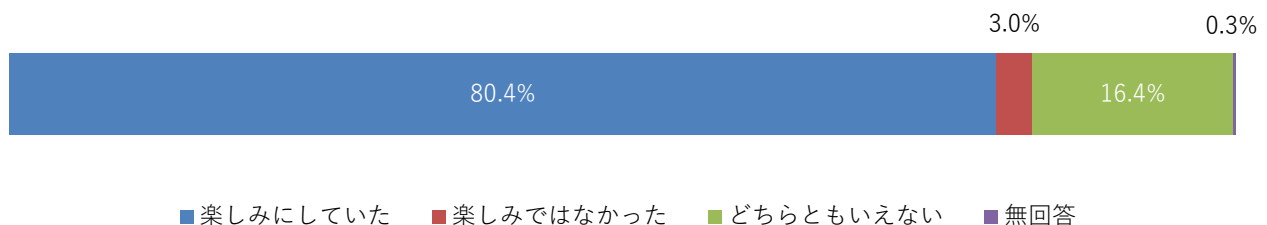
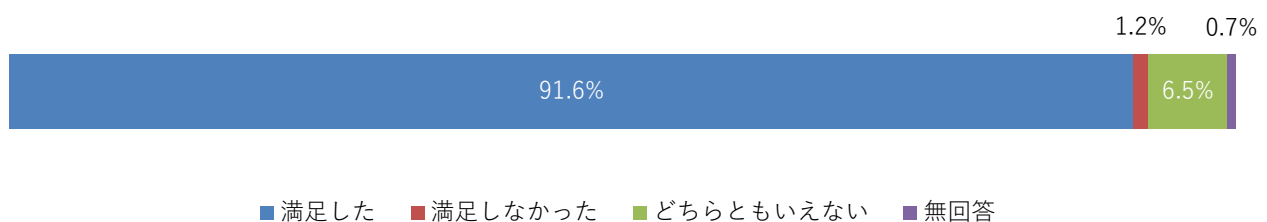


図8（児童生徒）プログラム参加後の満足の度合い



### ◎ 「今回のような時間をこれからも受けてみたい」回答者が84%

- 「今回のような時間を、これからも受けてみたいと思いますか」という質問に対し、「受けてみたい」という回答は84.4%、「受けたくない」は2.0%、「どちらともいえない」が12.9%となった（→図9）。
- 事前の期待と事後の満足度では、前回調査と今回調査で大きな変化は見られないが、今後の継続の要望に関しては、「受けてみたい」の割合が前回調査に比べるとやや減少（89.1%→84.4%）している。

図9 (児童生徒) プログラムの継続の要望



◎ 子どもたちの感想は「すごい」「楽しい」「面白い」などの単語の出現頻度が高い

- 「今回の時間で、あなたが感じたことや、思い出に残ることがあれば、自由に書いてください」と自由記述で尋ねたところ、全回答者の90.0% (1,590件のうち1,429件) から回答があった。このことから、児童や生徒にとってアウトリーチは、感じたこと、考えたことを書きたい、伝えたいと思える経験になっていることがわかる。
- イラストを含め様々な内容の記述がある中で、テキストマイニング（文章を文字列として扱い、単語や文節で区切って出現の頻度等を解析する手法）で、頻出する単語を分析した（→図10）。
- 形容詞（または副詞）では「すごい」「楽しい」「良い」「面白い」「うれしい」が出現回数の上位5位となっている。例えば「ピアノの音がすごくきれいだった」「心が楽しくなりました」「アウトリーチは、すごく面白かったです」といった記述である。
- 動詞では「できる」「くれる」「聞く」「知る」「おどる」の出現回数が上位5位となっている。例えば「体で波の表現ができていてすごいなと思った」「来てくれてありがとうございました」「聞いてみて、また聞きたいと思いました」といった記述で、素直な感動や驚きを表現する感想が多い。

図10 (児童生徒) 自由記述（感じたこと、思い出に残ること）での頻出単語

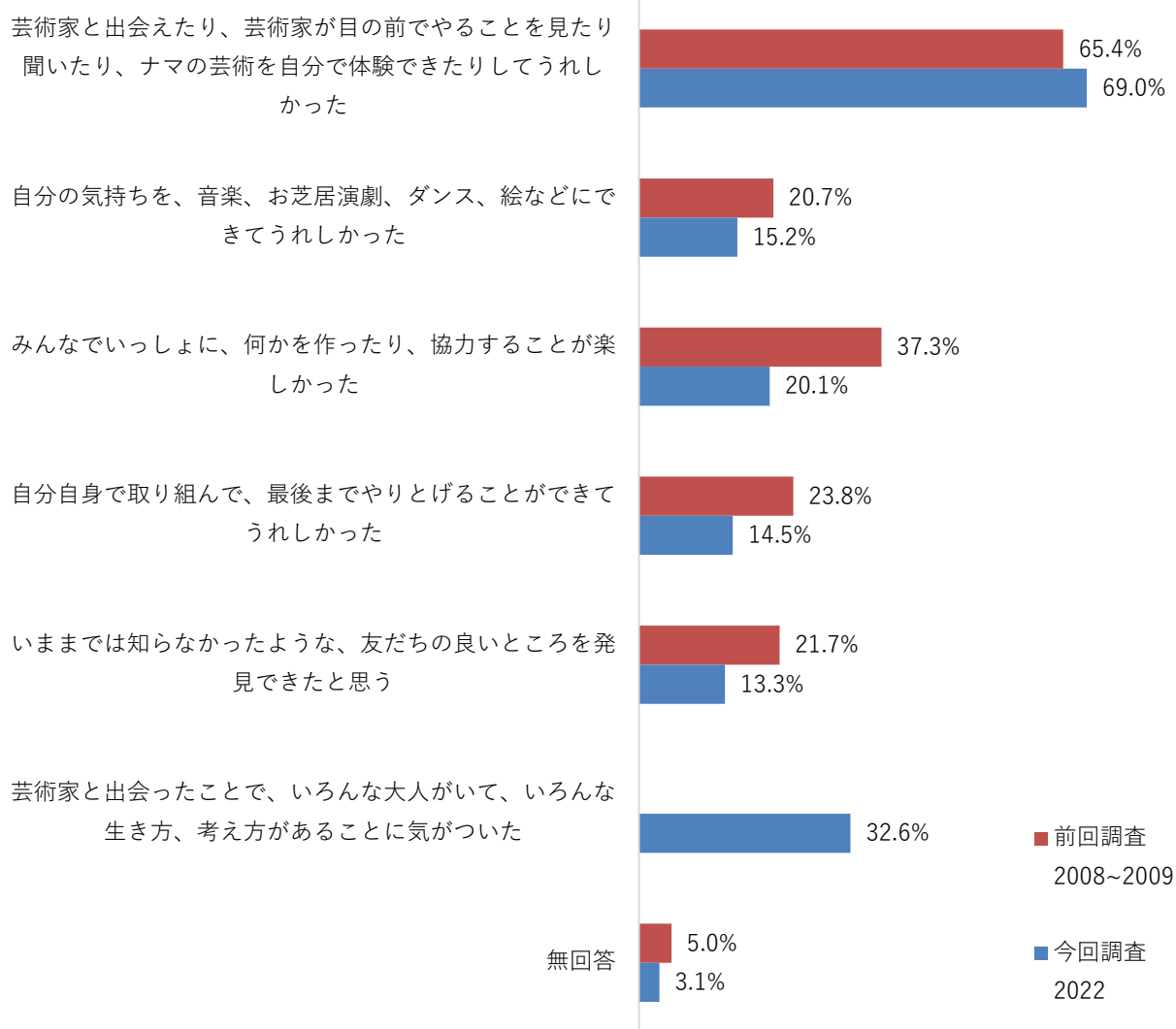
形容詞	出現頻度	動詞	出現頻度
すごい	568	できる	288
楽しい	481	くれる	152
良い	227	聞く	127
面白い	163	知る	108
うれしい	108	おどる	90

### 3. 生き生きとした反応、豊かな感受性、表現力、想像力

#### ◎ 子どもたちへの効果大きい「感受性」「表現力」「想像力」

- 児童生徒へのアンケートで「今回の時間を受けてみて、どのように感じましたか」と尋ねたところ、「芸術家と出会えたり、芸術家が目の前でやるのを見たり聞いたり、ナマの芸術を自分で体験できたりしてうれしかった」が69.0%、次いで「芸術家と出会ったことで、いろんな大人がいて、いろんな生き方、考え方があることに気がついた」が32.6%となっている（⇒図11）。

図 11（児童生徒）プログラムに参加した感想・印象

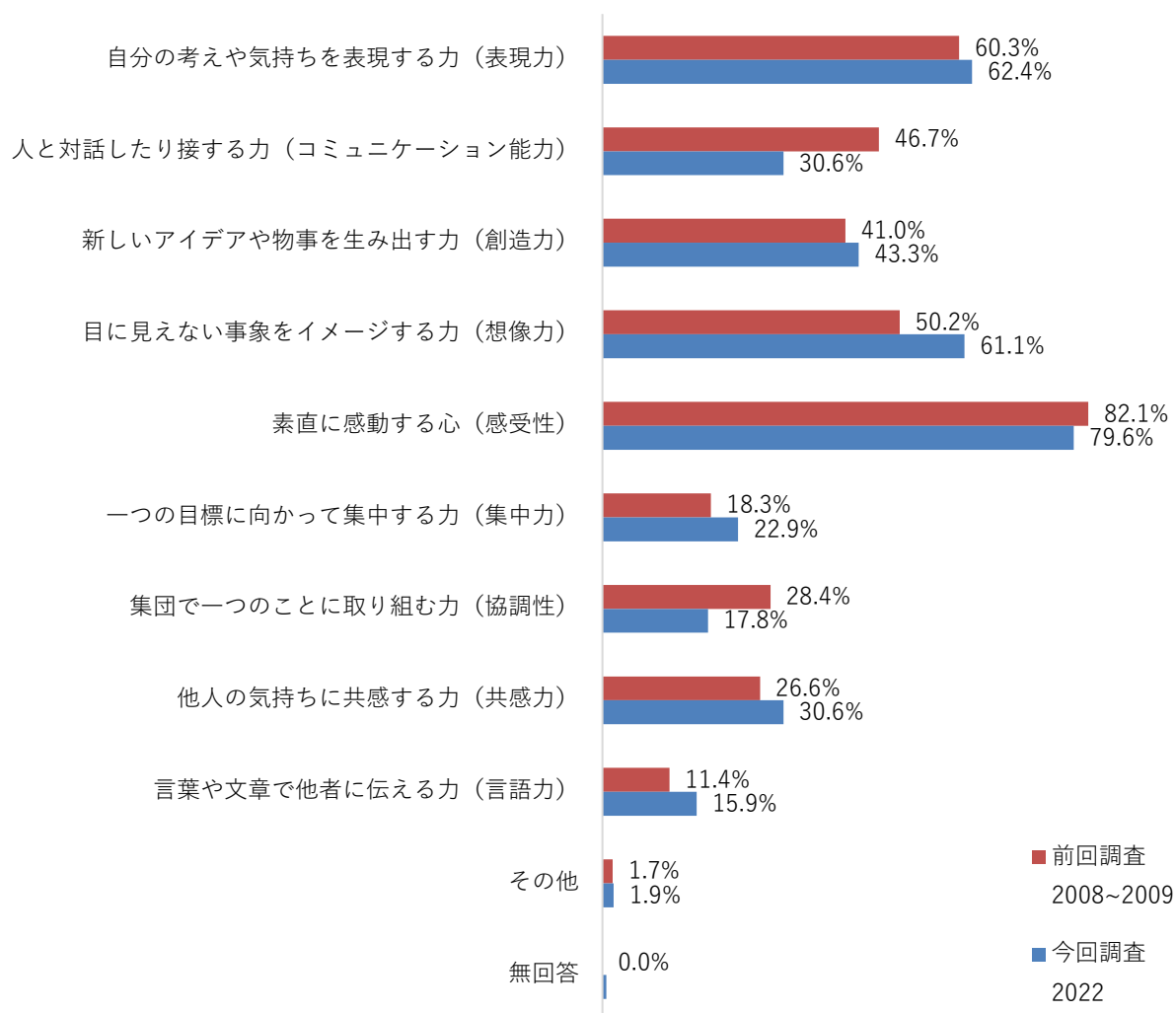


※「芸術家と出会ったことで、いろんな大人がいて、いろんな生き方、考え方があることに気がついた」は、今回調査で追加した選択肢のため、前回調査との比較はできない。



- 教員へのアンケートで「今回のようにアーティストが学校に出向いて行うような授業は、特に子どもたちのどのような能力や心を育むことに効果があると思われますか」と尋ねたところ、5人に4人の回答者が「素直に感動する心（感受性）」（79.6%）を挙げた。次いで、「自分の考えや気持ちを表現する力（表現力）」62.4%、「目に見えない事象をイメージする力（想像力）」61.1%、「新しいアイデアや物事を生み出す力（創造力）」43.3%となっている（→図12）。
- 図12での前回調査と今回調査を比べると、「目に見えない事象をイメージする力（想像力）」の割合が増加（50.2%→61.1%）している。ジャンル別で見ると、「音楽」で最も高いのは「素直に感動する心（感受性）」（91.1%）であるのに対し、「ダンス」と「演劇」では「自分の考えや気持ちを表現する力（表現力）」（ダンス79.4%、演劇72.7%）が最も高い。

**図12 （教員）子どもたちのどのような能力に効果があるか**



### ◎ 教員や事業担当者が語る子どもたちの変化への驚き

- 教員へのインタビュー調査で、子どもたちにとってのアウトリーチの成果や効果として多く聞かれた意見は、教員が見たこともないような子どもたちの反応に驚く声や、溢れる感情や強烈な感動など、豊かな感受性が印象に残ったという声だった。
- 普段は感情が表情に出ないような子どもが、気持ちが盛り上がって涙を流してアーティストに感想を伝えたり、授業中にはあまり手を挙げないような子どもが、アーティストに手を挙げて質問をしたり、生徒指導では難しさを感じる子どもが、周囲の子どもたちと一緒に表現活動に取り組んでいた場面など、普段の様子を知っている教員が驚くような子どもたちの変化が数多くの発言で聞かれた。
- 事業担当者へのインタビュー調査では、子どもの生き生きとした反応や態度の変化が印象に残るという意見が多い。例えば音楽のアウトリーチで、クラスの中でも一歩引いた感じの子どもが、演奏が進むごとに反応がよくなり、最後の感想コーナーで、言葉がまとまらないけれども何とか感想を言おうとする様子や、教員から「普段は全く発言をしない」と聞いていた子どもから感想や質問の時間に驚くほど積極的な発言が出てくるという場면을、事業担当者は必ずと言ってよいほど目の当たりにしている。

### ◎ 新型コロナの影響と見られる「コミュニケーション能力」「協調性」の回答の減少

- 教員に子どもたちの能力への効果について尋ねた設問（p.19、図12）で、前回調査から回答割合の減少が目立つのは「人と対話したり接する力（コミュニケーション能力）」（46.7%→30.6%）、「集団で一つのことに取り組む力（協調性）」（28.4%→17.8%）の2項目となっている。この結果は、新型コロナ禍で子どもたち同士の身体的距離を確保する必要があり、アウトリーチでは対話や協働作業などに取り組みにくい状況だったことが、影響していると考えられる。
- 児童生徒にプログラムに参加した印象・感想を尋ねた設問（p.18、図11）で、前回調査から回答割合が減少したのは、「みんなでいっしょに、何かを作ったり、協力することが楽しかった」（37.3%→20.1%）、「いままでは知らなかったような、友だちの良いところを発見できたと思う」（21.7%→13.3%）の3項目で、これも、協働作業や対話に取り組みにくかった新型コロナの影響と考えられる。
- 教員へのインタビュー調査では、新型コロナの影響で、学習発表会や文化祭で取り組んできた合唱や演劇の発表などができなかった学校や、修学旅行での観劇機会が失われた学校もあり、その面でもアウトリーチは新型コロナ禍の貴重な機会だという意見が聞かれた。
- 事業担当者へのインタビュー調査では、子どもたちのコミュニケーション能力や協調性への効果を実感している意見も多い。例えば、外国籍の子どもたちのいるクラスでの演劇のアウトリーチでは、子ども同士で話し合いながら演劇づくりをすることで関係が良好になり、演劇の発表をしたあとに「どうすればより良い作品ができるか」という意見交換をすることで、相手にとってポジティブになる意見の出し方を学んでいる様子を聞くことができた。

#### 4. 自己表現、自己肯定感、貴重な出会い

##### ◎ アウトリーチをきっかけとした子どもたちの多様な表現欲求

- アウトリーチで、プロのアーティストによる表現が子どもたちの表現欲求を刺激したと見受けられるエピソードが、教員へのインタビューから数多く聞かれた。
- 例えば、体育会系の部活動をしていた中学生が音楽のアウトリーチを経験したことで「吹奏楽をやりたい」と言った話や、特別支援学級の子どもがアウトリーチでピアノの演奏に触れたことで、親にキーボードを購入してもらって家庭でも学校でも練習しているという話を聞くことができた。
- また、勉強が少し苦手な子どもが、音楽のアウトリーチを体験したあと、自分なりの独特な表現方法で絵を描き始めて、教員たちもその才能や感性に驚いているというエピソードもある。
- プロのアーティストの表現に触れた子どもたちは、アウトリーチのジャンルやプログラムの内容に直接的な影響を受けるだけではなく、アーティストの根底にある表現や創造への強い欲求に刺激を受けて、子ども自身も内発的な表現欲求に突き動かされることが垣間見える意見も少なくなかった。

##### ◎ 「正解はない、感じたままを話す」ことで育まれる自己肯定感

- 教員へのインタビューでは、普段の学校生活で、「間違ったことを言うのが怖い」「周囲から自分は変だと思われているのではないか」と思っている子どもたちが少なくないという声が聞かれた。
- そうした中で、例えば音楽のアウトリーチで、子どもたちが、演奏が終わったあとの感想や、音楽から想像することを話すシーンで、アーティストから「正解はないから、感じたままを話していいよ」と声をかけられて、子どもたちが安心して意見を言える状況が作られている。
- アウトリーチのあとですぐに変化や効果が表れるものではないものの、子どもたちにとって、人と違うことに対する抵抗感、恐怖感、不安感を持たなくてもいい場面を経験することが、子どもたちの自信や自己肯定感を育むのではないかという教員たちの期待は高い。

##### ◎ プロのアーティストとの出会いは「一生ないかもしれない」貴重な出会い

- 児童・生徒へのアンケート調査では、文化施設における文化芸術の鑑賞や創造の経験（p.15、図6）について、文化施設に「行ったことがない」割合が31.3%となっている。今回の調査協力館は、アウトリーチ以外にも施設内での鑑賞型の公演事業を充実させているホールや劇場であることを踏まえると、文化施設に行ったことがない子どもの存在は無視することはできない。
- 教員へのインタビュー調査で、子どもたちの家庭環境や日常生活を考えると、ホールや劇場で生の音楽や舞台芸術に接する機会が「一生ないかもしれない」と話す教員は一人や二人ではなかった。だからこそ、家庭環境に左右されずに子どもたちと公平に接することのできる学校現場で、プロのアーティストに出会い、芸術に触れたり、体験したりできる機会は、子どもたちにとって非常に大きな意味があるという声も聞かれた。

# III.

## 教員や学校にとっての成果や効果

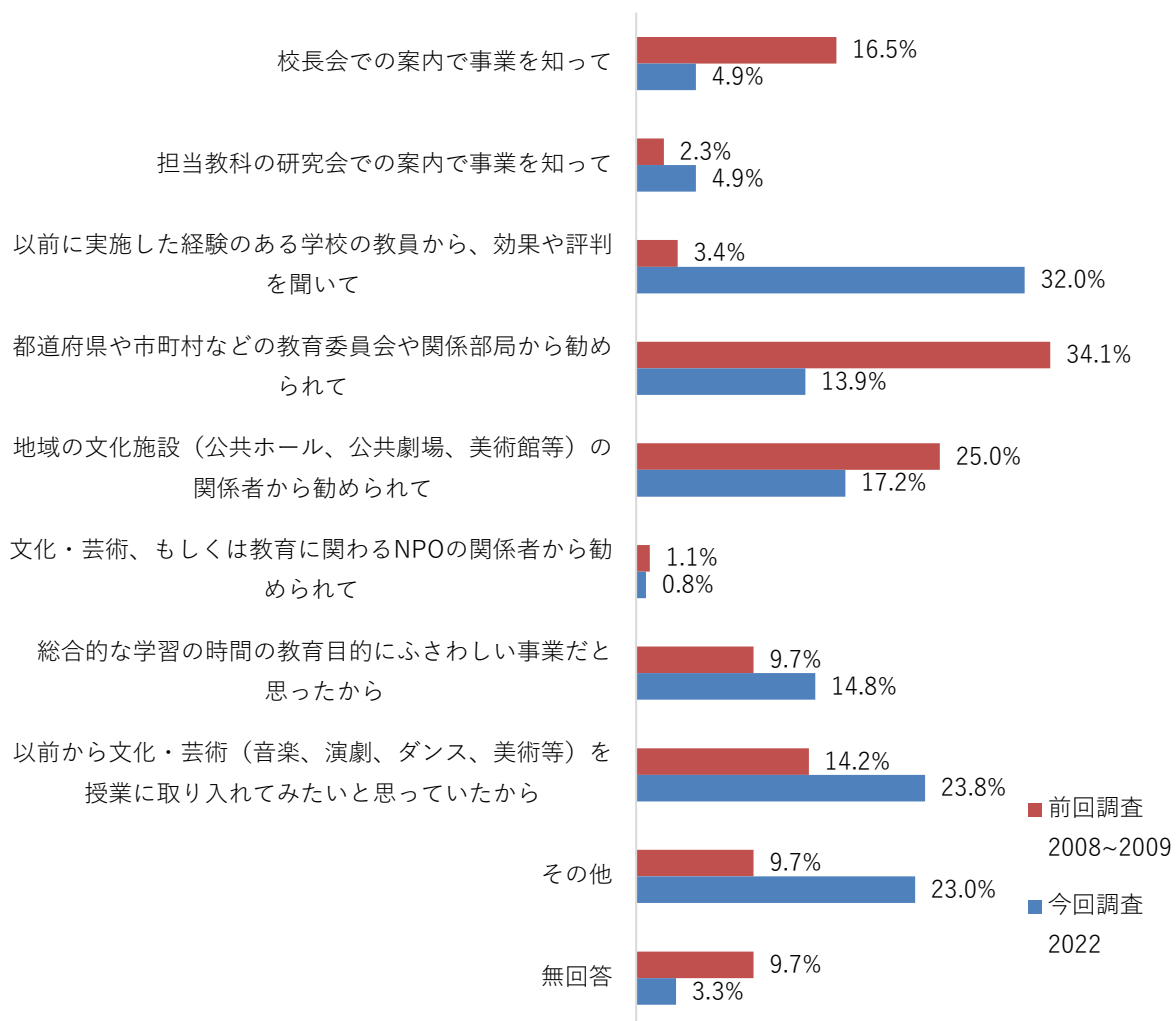
次に、アンケート調査とインタビュー調査の結果から、学校等でのアウトリーチが教員や学校にとってどのような成果や効果を生んでいるのかを整理した。

### 1. 実施前の信頼と継続の意向が大きく向上

#### ◎ 教員から教員へとアウトリーチの評判が伝播している

- 今回、アウトリーチを授業に取り入れて実施したきっかけの回答は「以前に実施した経験のある学校の教員から、効果や評判を聞いて」が32.0%で約3分の1となった。次いで「以前から文化・芸術（音楽、演劇、ダンス、美術等）を授業に取り入れてみたいと思っていたから」が23.8%、「その他」が23.0%となっている。「その他」の具体的な記述では、「前年度担当者による申込による」、「教科担当者から聞いて実施」、「以前体験して良かったので」といった回答が複数見られる。（→図13）。

図13（教員）プログラム実施のきっかけ



- 
- 前回調査と今回調査を比べると、「以前に実施した経験のある学校の教員から、効果や評判を聞いて」の割合が大幅に増加（3.4%→32.0%）し、「都道府県や市町村などの教育委員会や関係部局から勧められて」の割合が大幅に減少（34.1%→13.9%）している。
  - これは、前回調査が地域創造の全般にわたるアウトリーチを調査対象としたのに対し、今回調査はアウトリーチを長期的、継続的に実施している調査協力館のアウトリーチが対象となっていることも要因だと考えられる。
  - 教員へのインタビュー調査でも、初めてアウトリーチを受け入れる教員が、学校として以前から取り組んでいるという理由だけでなく、他の教員たちから高い評判を聞いたことがきっかけであったり、教科外の教員から「前に別の学校でやってよかったから、ここでもぜひやってはどうか」と背中を押してくれたりするという話が数多く聞かれた。

### ◎ 実施前の信頼、実施後の効果、継続の意向の3項目ともに積極的な肯定意見が増加

- 「このプログラムを実施する前に、その効果について信頼していましたか」という質問に対し、「とても信頼していた」という回答は62.3%、「ある程度信頼していた」が36.9%となっており、信頼していた回答者が99.2%だった（→p.24、図14）。
- 今回の授業を実施したことで、期待した効果があったと思えますか」という質問に対し、「とても効果があった」は70.5%、「ある程度効果があった」が22.1%と、効果を認める回答は92.6%だった。実施前に効果を「とても信頼していた」のは62.3%だったことから、実施前の積極的な信頼の割合よりも、実施後の効果を積極的に認める割合の方が高い（→p.24、図15）。
- 「今回実施したような授業を、今後も継続してみたいと思えますか」という質問に対し、「ぜひ継続したい」が72.0%、「できれば継続したい」が27.4%で、継続の意向を示した回答は99.4%となっている。授業の継続を積極的に求める割合も実施前の積極的な信頼の割合より高い（→p.24、図16）。
- 前回調査と今回調査を比べると、実施前の信頼、実施後の効果、継続の意向の3項目ともに、積極的な肯定意見が前回調査の割合を上回っている。

図 14 (教員) プログラム実施前の信頼の度合い

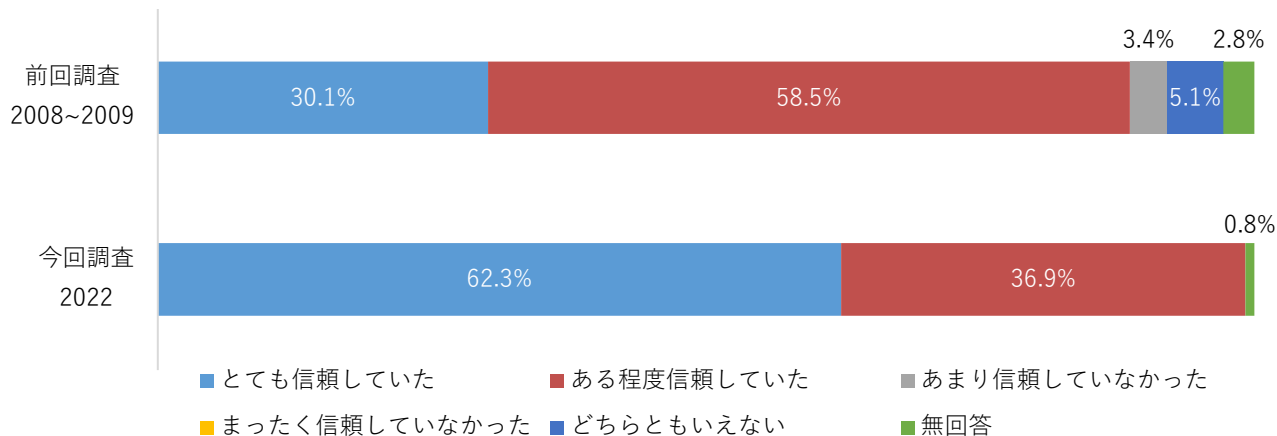


図 15 (教員) プログラム参加後の満足度の度合い

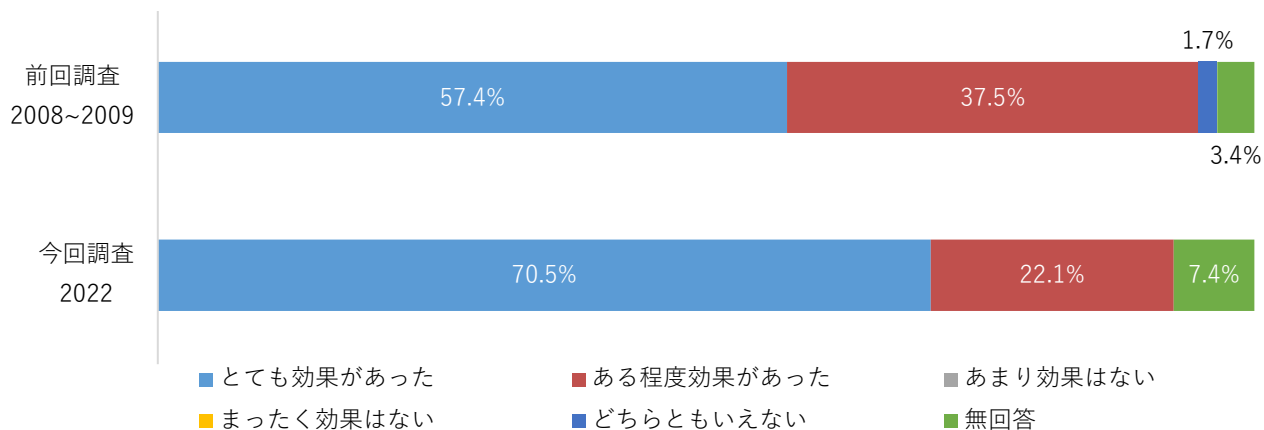
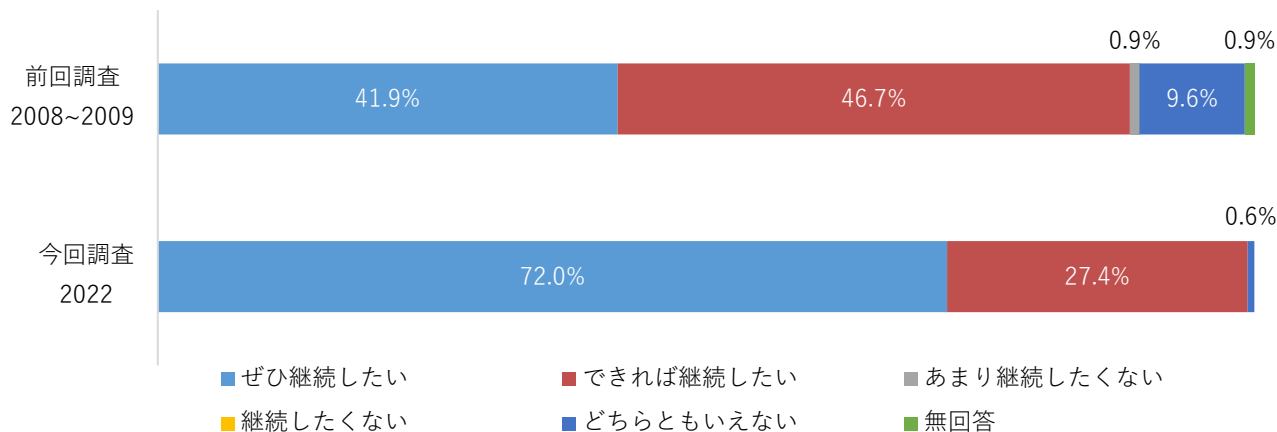


図 16 (教員) プログラムの継続の要望



## 2. アウトリーチを経験した教員自身の変化、教員と子どもたちの関係の変化

### ◎ 初めて取り組む教員のアウトリーチに対する印象が実施の前後で大きく変化

- 教員へのインタビューで、とくに初めてアウトリーチを受け入れた教員にとって、アウトリーチは、ホール・劇場で行うコンサートや舞台公演のように、子どもたちは受動的に鑑賞するものだと想像していたという声も多かった。実際に取り組んでみたところ、子どもたちとアーティストの距離の近さや双方向のコミュニケーションが多いことに、教員が驚くことも少なくない。
- アウトリーチを初めて受け入れた教員の変化を最も感じているのは、アウトリーチを担当する事業担当者だ。調査協力館の多くの事業担当者が、実施前の打ち合わせでは、アウトリーチの受入れには消極的な姿勢に見受けられた教員が、実施すると子どもたちの反応に驚き、実施後にはアウトリーチの効果を積極的に認める教員も少なくないという。事業担当者にとって、こうした教員の変化の方が子どもたちの変化よりも大きいと感じるという意見もある。
- 教員へのアンケート調査で「アウトリーチ実施前の信頼の度合い」について、回答者全体で62.3%が「とても信頼していた」と回答している（p.24、図14）が、回答者の過去のアウトリーチの受入れ経験でクロス集計したところ、アウトリーチの受入れが「今回が初めて」の場合は「とても信頼していた」の割合（47.7%）よりも「ある程度信頼していた」の割合（52.3%）が高く、過去に1回以上経験していた回答者（「とても信頼していた」の割合の方が高い）とは傾向が異なっている。
- 事業担当者からは、教員にとってアウトリーチがどのような授業になるのかイメージできないということは、自分自身が分からないものを子どもに教えることになるため、初めての場合は抵抗感があるだろうという意見もあり、特に、音楽に比べて演劇やダンスの方が、教員にとってイメージすることが難しいという感触を持つ事業担当者もいた。

### ◎ 子どもとの接し方の気づき、子どもに対する見方や関係性の変化

- 教員にとっては、アーティストが授業を進める状況を、普段の教壇からとは違う立ち位置、例えば教室の後方から子どもの背中越しに見ることで、様々な発見がある。特に、演劇やダンスのアウトリーチでは、アーティストの子どもとの接し方について教員に気づきをもたらしていることが多い。
- 例えば、友だちの輪に入りにくい子ども、集中力が途切れがちな子どもなどに対する声の掛け方や、緊張して固くなっている子どもたちを「乗せる」方法など、演劇やダンスなどの身体表現のアーティストが培ってきたコミュニケーションの技術は、教員の授業の進め方だけでなく、学級運営という観点でも刺激になっている。
- アウトリーチの事業担当者も、教員の子どもに対する見方や関係性が、アウトリーチをきっかけに変化している様子を見ている。事前の打ち合わせで教員から聞いていた普段の学校生活での子どもたちの様子と、アウトリーチでの子どもたちの様子は大きく違っており、そこで、教員が特定の子どもに対して持っていた印象が変化すること、教員と子どもとの関わり方が変化することが、教員自身よりも第三者の目線で見ると事業担当者からの方が見えやすいようだ。

## ◎ 継続による教員の受け入れ態勢の柔軟性、積極性の高まり

- 調査協力館では、アウトリーチを長期的、継続的に行ってきたことで、教員の受け入れ態勢が初めて取り組んだときよりも格段に柔軟になり、積極性が高まったという意見が多い。そのような手応えを事業担当者が感じるタイミングは、「アウトリーチに取り組み始めてから3年目くらいから」という声が複数聞かれた。
- アウトリーチを開始してから短くて約10年、最長で約25年の調査協力館では、開始当初に受け入れを担当した教員が、現在は教頭や校長などの管理職となって推進しているケースや、以前の教員が教育委員会に異動して地域全体の学校でのアウトリーチの展開に協力しているなどの例もある。
- 教員へのアンケート調査で「アーティストによる授業の継続の意向」について、回答者全体で72.0%が「ぜひ継続したい」と回答しているが（p.24、図16）、アウトリーチに関与した立場でクロス集計したところ、「学校管理職」の場合は「ぜひ継続したい」の割合が83.9%と、担当教員（70.3%）や授業を見学した教員（65.7%）に比べて、学校管理職の積極的な継続の要望が際立っている。
- 教員へのインタビュー調査では、アウトリーチを継続するためには校長などの管理職の理解が必要だという意見もあった。また、事業担当者へのインタビューでは、他校への異動になる教員から「後任の先生にも引き継いでおきます」といった連絡を受けるなど、学校内部でのアウトリーチに関する理解の継承や情報の共有が重要となっている。

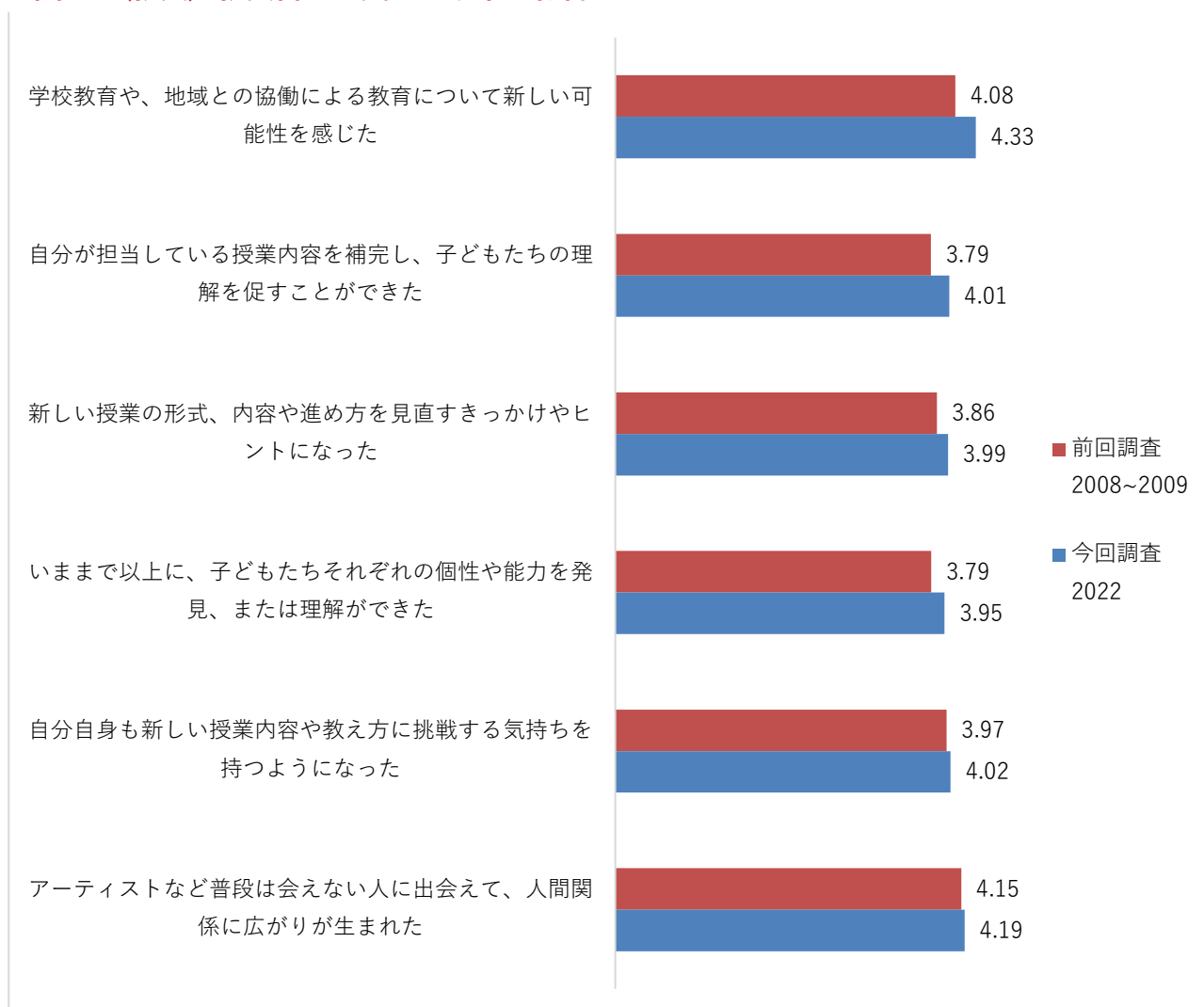


### 3. 地域との協働や外部の専門家の活用

#### ◎ 「地域との協働による教育について新しい可能性を感じた」が教員にとって最も高い効果

- 今回の授業によって教員自身が受けた効果や影響を、「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」まで5段階評価で尋ね、5～1点に配点して平均値を算出した。最も高いのは「学校教育や、地域との協働による教育について新しい可能性を感じた」で4.33、次いで「アーティストなど普段は会えない人に出会えて、人間関係に広がり生まれた」が4.19となった（→図17）。
- 前回調査と今回調査を比べると、前回では「アーティストなど普段は会えない人に出会えて、人間関係に広がり生まれた」の平均値が最も高かったが、今回は「学校教育や、地域との協働による教育について新しい可能性を感じた」に入れ替わっている。

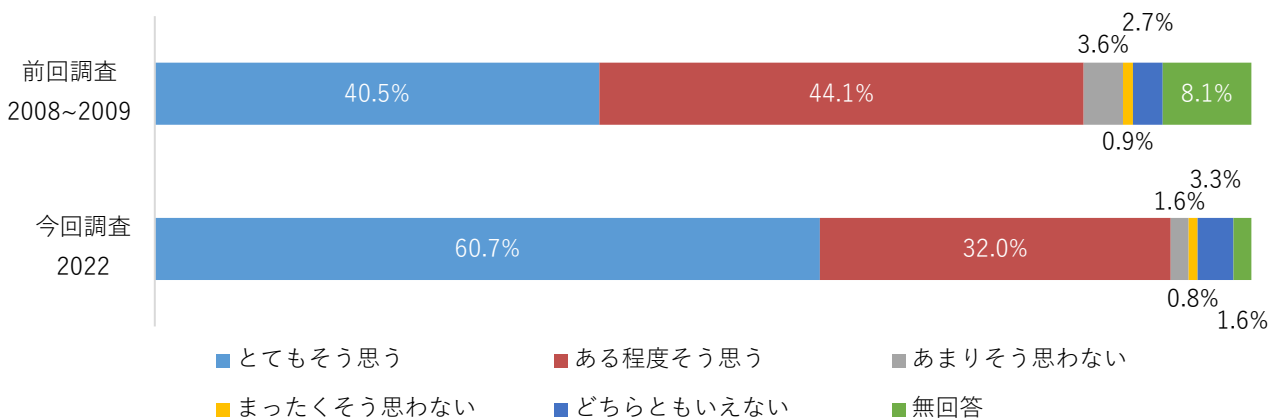
図17（教員）教員自身が受けた効果や影響



### ◎ 地域の文化施設や文化団体・芸術系 NPO との連携の必要性を感じる教員が9割以上

- 「今回のような授業を実施する上で、地域の文化施設や文化団体・芸術系 NPO などと学校との連携が必要だと思われますか」という質問に対し、「とてもそう思う」が60.7%、「ある程度そう思う」が32.0%と、連携の必要性を感じる回答者は92.7%となっている。前回調査と今回調査を比べると、「とてもそう思う」の割合が増加し（40.5%→60.7%）、「ある程度そう思う」の割合が減少（44.1%→32.0%）している（→図18）。
- 教員へのインタビュー調査でも、例えば音楽のアウトリーチを受け入れた教員から「プロの方を呼ぶことで自分にはできないものを子どもに提供することも大切」、「同じ先生が、同じ口調で、同じ説明の仕方ですら授業をするのではなく、外部からのゲストを招いて授業をしてもらい、先生が授業を伴走するような変化が子どもにも必要」という意見が聞かれた。

図 18（教員）地域の文化施設や文化団体・NPO と学校との連携の必要性



### ◎ 中長期で継続した場合には「心豊かに生活する市民の増加が期待できる」

- アウトリーチによる授業の機会を中長期で継続した場合に期待できる地域社会への効果を、「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」まで5段階評価で尋ね、5～1点に配点して平均値を算出した。最も平均値が高いのは、「文化・芸術活動を通じて心豊かに生活する市民の増加が期待できる」が4.60で、次いで「アーティストとの出会いを通じて多様な価値観を受け容れる地域づくりが期待できる」が4.54となっている（→図19）。
- アウトリーチによる授業の機会を中長期で継続した場合に改訂学習指導要領で示された「子供たちに必要な力」の3つの柱を育むことが期待できるか、同様の5段階評価の平均値を算出したところ、最も平均値が高いのは「学んだことを人生や社会に生かそうとする、学びに向かう力、人間性など」が4.28で、次いで「未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力など」が4.10となっている。（→図20）

図 19 (教員) 継続した場合に期待できる地域社会への効果

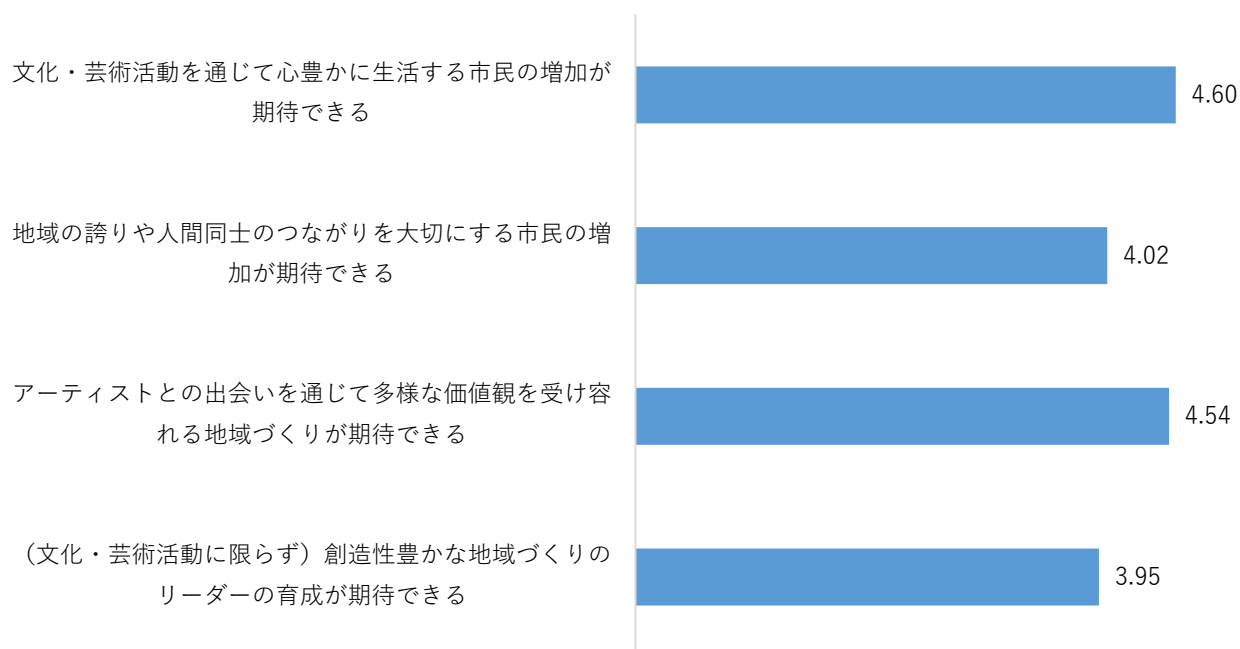
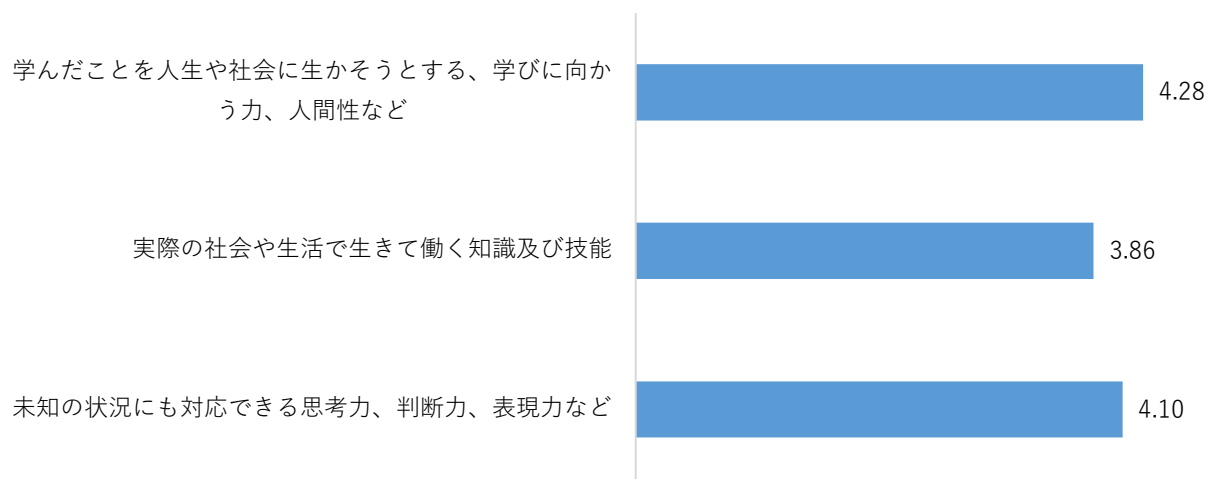


図 20 (教員) 継続した場合に期待できる改訂学習指導要領における効果



#### 4. 特別支援学校・学級での成果

今回調査での調査協力館のうち、北上さくらホールと北九州芸術劇場では、特別支援学校・学級の担当教員を中心に話を伺うことができた。障がいの種別や程度が様々な子どもたちがいる特別支援学校・学級では、アウトリーチがどのような成果を生んでいるのかを整理しておきたい。

ただし、児童生徒や教員へのアンケート調査では、授業を実施した学校や学級が、特別支援学校（特別支援学級）か通常校（通常学級）かの区別を設定しておらず、また、回答者の障がいに関わる質問を設定していなかったため、定量的な比較は難しいことから、ここでは教員と事業担当者へのインタビュー調査をもとにした定性的な考察としておく。

##### ◎ 特別支援学校・学級での教員と子どもたちの関係性

- 特別支援学校・学級では、通常学級に比べて日頃から少人数での授業となっており、複数の教員が子どもたちに寄り添って授業を行う場合もある。また、一人ひとりの障がいの特性や個性の違いを理解しているため、教員の子どもたちに対する見方は、通常学級に比べて細やかな変化に気づくことが多いように見受けられた。

##### ◎ 未体験の世界に触れる機会を学校が提供することの意味

- 教員へのインタビュー調査では、難聴の子どもが音楽のアウトリーチに触れて、とても喜んで家族にその経験を話したところ、家族が「ぜひホールのコンサートに行ってみよう」と、その難聴の子どもを誘って、一緒にホールで生の音楽を楽しむことになったというエピソードが聞かれた。
- 難聴の子どもが、生の音楽に触れる最初のきっかけは、子ども自身の自由な意志や選択ではなく、学校が用意したものだった。アウトリーチというきっかけがなければ、音楽を楽しむ可能性は閉ざされたままだったかもしれない。
- 特別支援学校・学級の子どもたちにとって、自分自身から「見たい、聴きたい、やってみよう」ということで文化芸術に触れることのできる機会は、相当限られている。「だからこそ、子どもの知らない未体験の世界に触れる機会を学校が提供し、経験することには大きな意味がある」と特別支援の担当教員が強調する。

##### ◎ 子どもとのコミュニケーションや視覚支援などの技術、「待つ姿勢」の再確認

- 医療的なケアが必要な重度の障がいのある子どもが、ダンスのアウトリーチに参加した際に、ダンサーと、目や口の動き、動かせる範囲での小さな手の動きなどで、お互いに表現し合うことができたという話があった。教員も「自分でちゃんと表現できていた」「本人の小さな表現にクローズアップすることも芸術であり、ダンスだということに立ち返った」と、自身の気づきを語ってくれた。
- 同じダンスのアウトリーチで、視覚支援（情報を図絵などの見える形にして、状況を理解しやすくする

---

こと)を用いてダンサーが授業を進行する様子を見た教員が、児童自身が視覚支援によってスムーズに参加している場面を見ることができて、改めてその重要性を実感していた。

- また、ダンサーが子どもたちの反応を「待つ姿勢」を多く取り入れていたことに教員が感心を示した。特別支援は子どもたちを「待つ」ことが基本であることや、その子の表現を読み取って返すことなど、改めて特別支援教育に求められる姿勢をダンサーの進行を通じて再確認したと言う。

# IV.

## 文化施設にとっての成果や効果

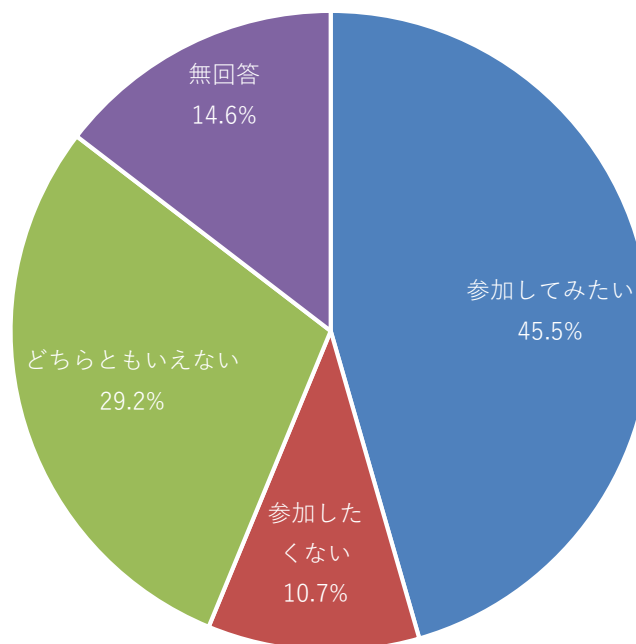
アンケート調査とインタビュー調査の結果から、学校でのアウトリーチが文化施設にとってどのような成果や効果を生んでいるのかを整理した。

### 1. 文化施設への興味の喚起、他の事業への波及効果

#### ◎ 学校への「アウトリーチ」と文化施設への「インリーチ」での参加意向の違い

- 児童生徒へのアンケート調査で、「今回のような時間を、学校ではなく、市民会館やホール、劇場、美術館などですることがあれば、参加してみたいと思いますか」と質問したところ、「参加してみたい」という回答は45.5%、「参加したくない」は10.7%、「どちらともいえない」が29.2%となった（図21）。

図 21 市民会館やホール、劇場、美術館等のインリーチ



- アンケートでは「アーティストによる授業の継続の要望」も尋ねているが（⇒p.17、図9）、今後も学校でのアウトリーチを「受けてみたい」という回答が84.4%であるのに対して、学校ではなく文化施設ですることがあれば「参加してみたい」という回答は45.5%と、同じ活動でも学校と文化施設という場所によって参加意向の割合に差があり、ある意味では文化施設の「敷居の高さ」がこの結果に表れていると言えよう。
- このアンケート調査の結果に沿うように、事業担当者へのインタビュー調査では、アウトリーチを経験した子どもが、その後すぐにコンサートの観客として来場してくれることは期待することが難しく、短期的にホールや劇場の集客につながっているわけではないという意見も多く聞かれた。

## ◎ 文化施設の認知や関心の向上、「顔が見える関係づくり」の手応え

- アウトリーチが直接的に集客につながるわけではないものの、調査協力館がアウトリーチに長期的、継続的に取り組んで見えてきた成果として、子どもたちや教員を通じて地域の文化施設への認知や関心が向上していることや、地域住民と顔が見える関係づくりが広がっていることが挙げられる。
- 北上さくらホールでは、ホールで行う「子どもの舞台芸術体験事業キッズアート」という子どもたちのための参加型事業で、ホールから遠い地区の小学校からも必ず参加者がいる。その小学校では毎年アウトリーチを受け入れており、事業担当者は、キッズアートに参加する子どもが通う学校とアウトリーチの受け入れ回数が多い学校の相関関係を実感している。
- いわきアリオスでは、自主的にアウトリーチに参加した子どもへのアンケートを行っているが、自由記述欄には「実際にアリオスに行きたくなかった」という意見を書く子がとても多く、興味を持つきっかけにはなっていると実感している。
- とよはしPLATでは、夏休み後半に開催する「ワークショップ縁日」という企画のチラシを近隣の学校に配布しており、アウトリーチ先の学校に通う近所の子どもたちも遊びに来てくれて、「あっ！学校に来てたでしょう！」と声をかけてくれる子もいる。子どもたちにとって敷居が下がっているのではないかと事業担当者は話す。

## ◎ 子どもを介して家族や地域へのアウトリーチの波及効果を広げる努力

- 学校のアウトリーチでの子どもとの出会いや交流は、子どもを介して家族や地域に広げるチャンスでもある。いくつかの調査協力館の事業担当者からは、そうしたチャンスを捉える努力や工夫を紹介していただいた。
- 新潟りゅーとぴあでは、音楽のアウトリーチを行う際に、保護者にも届くようにA4サイズの用紙にアウトリーチで演奏したアーティストのプロフィール、写真、演奏プログラム、コラムを書いたパンフレットを配布し、子どもたちに「親御さんにも見せて、今日どんな音楽を聴いたか伝えてね」とお願いして、保護者に認識してもらおうように努めている。
- 上田サントミュージゼでは、小学校でのアウトリーチだけで終わらず、同じアーティストで地域の方々に向けた公民館でのアウトリーチを行っており、子どもが親を連れて来ることはよくある。学校で子どもが心を動かされたことで、子どもが親を公民館に引っ張って行く状況が生まれている。
- 北九州芸術劇場では、スタッフのアイデアで、アウトリーチに参加した子どもたちに「あなたはこのプログラムを受けました」という、かわいいデザインの「体験証」カードを一人ひとりに渡している。何か手元に残すことで、少しでも体験した記憶を思い出してもらいたいという狙いがある。

## 2. アウトリーチの地域における担い手の発掘、育成、活動機会の提供

### ◎ アウトリーチを受けた子どもたちの「その後」の進路や人生への影響

- 学校でのアウトリーチを経験した子どもたちの「その後」の変化については、教員や事業担当者へのインタビュー調査でも「アウトリーチを受けたことで子どもがどのように変化したかを追いかけることは難しい」という見方がほとんどだった。
- しかし中には、事業担当者の個人的なつながりや調査協力館の事業の関わりで、アーティストとして活動する人や劇場のスタッフとして働く人の中に、子どものころにアウトリーチを受けていた人がいるという話も数多く聞くことができた。アウトリーチが、その後の進路や人生を変えて文化芸術の担い手となる可能性は、十分に考えられる。
- 例えばいわきアリオスでは、アウトリーチの数年後に、教員や保護者を通じて「あの時ダンスのワークショップを受けた子が、その後、ダンス教室に通い始めたんです」ということを聞くこともあるという。また、現在のアリオスのスタッフにも、中学や高校の頃に演劇やダンスのワークショップに参加していた人が勤めている。
- また上田サントミュージゼの「実験的演劇工房」では、地元の舞台技術の会社に就職したり、大学で舞台美術や俳優を学ぶ道を選んだ参加者もいる。

### ◎ アウトリーチの担い手となる地元のアーティストの発掘と育成

- 調査協力館の中で、北上さくらホール、いわきアリオス、新潟りゅーとぴあ、北九州芸術劇場では、アウトリーチの担い手を、地域外からの招へいアーティストだけではなく、地元アーティストの発掘と育成にも取り組んでいる。地元アーティストを起用することには、旅費に掛かるコストの軽減といった経済的な理由も聞かれるが、大規模災害の発生や感染症の拡大といった事態でも、アウトリーチを継続できる状況を整えるためには、地元はその担い手がいることが大きい。
- それと同時に、アウトリーチという機会を与えることが、若いアーティストにとって、鍛錬を積むことにつながるという意見もある。例えば、学校現場で「音楽を聴きたい」「ダンスを踊りたい」「演劇をしたい」とは思っていない子どもたちを目の前にしたアーティストが、どのようにして子どもとの関係や良い時間を作っていくのかは、経験値が問われることになる。
- いわきアリオスでは、東京で活躍しているいわき出身のアーティストや、現在、音楽大学に通っている人材のために、アウトリーチを通して地元で活動ができる機会を作り、地元出身だからこそアーティストを受け入れてくれるような成長の場を作りたいと考えている。
- 新潟りゅーとぴあでは、登録アーティストと呼ぶ地元アーティストのアウトリーチは、人材の養成や育成の方が、意味合いが強くなっていると事業担当者は語る。「子どもたちに生のいい音楽を伝え、音楽の楽しさを伝えることも大事なことだが、まずは、いいアーティスト、いいプログラムがないと、子どもたちに、いい音楽とのいい出会いを提供できないから、そこは本当に大事だ」と強調する。



## ◎ 地元の人材によるコーディネーターの育成、組織の外部の協力者の開拓

- 事業担当者へのインタビュー調査では、学校へのアウトリーチの実績や経験は担当者に蓄積され、担当者のスキルは高まり、人的なネットワークは広がって、学校からのニーズも高まっていることがわかった。その一方で、組織としては限られた人員体制、限られた予算で事業を維持、継続しているという現実的な面があることは、どの調査協力館も同じである。
- アウトリーチは企画制作から当日運営の細やかな対応や連絡調整などの手間を要し、担当する人材には、自分自身がアウトリーチやワークショップなどを受けた経験があることや、企画に対する情熱のような「熱量」が重要だという意見も複数聞かれた。
- そうした人材を、施設の管理運営を行う組織内部だけに求めるのではなく、地域に広げる考え方に転換しているのが、とよはし PLAT、いわきアリオスの2施設である。とよはし PLAT では、「ワークショップファシリテーター養成講座」を継続的に行っており、修了生は学校のアウトリーチにも派遣している。関心のある市民が経験を積み、様々な現場で培った経験を自分の仕事や生活に生かしており、またとよはし PLAT にも様々な人の関わりをもたらしたり、他の事業とのつながりを生み出したりしている。
- いわきアリオスでは、アウトリーチの現場に必要な地元人材のコーディネーターの育成が課題だとして、少しずつ「アリオスがやること、地元の人でできること」を分けることで、文化芸術に触れる市民を増やせないかと考えている。

### 3. 行政や民間企業からの理解、賛同、支援

#### ◎ 自治体の条例や計画への位置づけ

- 6つの調査協力館が長期的、継続的にアウトリーチに取り組むことができたのは、組織内部だけでなく、施設の設置自治体である行政も、アウトリーチの意義、成果、効果について一定の理解をしていることのも表れでもある。北上さくらホール、とよはし PLAT の2施設では、施設の設置自治体の条例、指針、計画などにアウトリーチが位置付けられている。
- 北上市では、北上市文化芸術基本条例と北上市文化芸術推進基本計画が策定されており、基本計画には「アウトリーチを進めていく」ことが随所に記載されている。豊橋市では豊橋市文化振興指針のアクションプランにアウトリーチが位置付けられており、その所轄が教育委員会となっている。とよはし PLAT では、教育委員会という後ろ盾があることが大きいと感じている。

#### ◎ 地元の民間企業からの賛同、協力、支援

- 調査協力館のうち、いわきアリオスと上田サントミュージゼでは、地元の民間企業に対して学校へのアウトリーチの財源の支援を呼び掛けており、賛同や協力、支援の輪の広がりを実感している。
- いわきアリオスでは、アウトリーチに必要な財源を、市の予算だけではなく、一般企業からの外部資金なども含めて予算の中に取り入れられるようなシステムを作っていこうとしている。企業の人たちも学校へのアウトリーチや地域でのワークショップには興味を持っているようで、資金面や場所の活用などで企業と協働する形を模索している。
- 上田サントミュージゼでは、「サントミュージゼパートナーズ」という、主に地元の企業から協賛をいただくシステムを作っている。地元企業が協賛しようという気持ちになる理由の一つに、育成事業の「人・まち・文化を一緒に育みませんか」という趣旨への理解や、協力したい、貢献したいという気持ちが強くなっていることがあり、寄付の継続企業が増えている。

### 第3章 各館が取り組む特徴的な取り組みの概要と成果 (インタビュー調査の結果から)



# I.

## 北上市文化交流センター さくらホール いわての演奏家とつくる音楽会・Music Program IWATE 4 館巡りプロジェクト

北上市文化交流センターさくらホール（以下「北上さくらホール」）では、2011年に北上、前沢（奥州市）、大船渡の3地域で実施した地域創造の「おんかつ市町村連携モデル事業」をきっかけに、2014年から地域の演奏家を育てる「いわての演奏家とつくる音楽会」をスタートさせ、2022年にはおんかつアーティスト3名と地元アーティスト2名によるコンサートやアウトリーチなどを行う「Music Program IWATE 4 館巡りプロジェクト」を実施した。

### 1. インタビュー調査協力者

大内友規、吉田和哉（前沢ふれあいセンター）、中村仁彦（釜石市民ホール TETTO 市民ホール）、谷川徹也（大船渡市民文化会館）、千葉真弓、安藤綾乃（北上さくらホール）

### 2. 調査から見てきたこの事業のポイント

#### ◎ 地域創造のおんかつアーティストと地元アーティストとの協働企画

- アウトリーチの実績と経験が豊富な地域創造のおんかつアーティスト3名と、岩手県内の演奏家からオーディションで選定した地元のアーティスト2名による協働の企画。
- 協働の中核となった打楽器奏者の野尻小矢佳さんと北上さくらホールの千葉さん、前沢ふれあいセンターの大内さん、吉田さんには、東日本大震災をきっかけとした絆があり、各館のアウトリーチの担当者との水平な関係性があって企画が実現した。

#### ◎ 岩手県内の4つの施設が無理せずにつながる「ゆるふわ」連携

- 協働する県内の4つの施設は、施設、事業、組織の規模も内容も異なっており、運営主体の法人格も違うなど、厳格な協定やルールを設定するとすると、連携に無理が生じてしまう。
- 4つの施設が無理なく連携できるように、それぞれの活動に応じた経費案分と、必要に応じて相談しながら進めていく、ゆるくてふわっとした連携（ゆるふわ連携）をモットーとしている。

#### ◎ 他館との連携がもたらすコストの圧縮、行政や組織内部の評価

- 参加する施設はいずれも厳しい予算と組織体制で運営しているため、収入を生み出しにくいアウトリーチを持続させていくためには、コストを圧縮する努力が求められる。
- 館の組織だけでなく行政からも、コストの圧縮につながる他館との連携の取組には理解があり、高く評価されている。他館との連携が、アウトリーチの意義を理解してもらう鍵となっている。

#### ◎ 「現場協力」がもたらすホール職員同士の顔の見えるネットワーク

- 「4館巡りプロジェクトで」連携している4館の担当者は、企画制作やテクニカルなど専門の経験が異なっており、この事業で現場に必要な役割を、組織を越えて補い合っている。
- 各担当者が持っているノウハウを共有し合うだけでなく、お互いの悩みを共有し合い、相談できるようなネットワークにもなっている。



4館巡りプロジェクト 野尻小矢佳（打楽器）、加藤直明（トロンボーン）、新崎誠実（ピアノ）、牧野詩織（フルート）、木戸口夏海（クラリネット）（2022年9月）

### 3 取り組みの概要と成果

岩手県内の演奏家を外部の専門家によるオーディションで選定する「いわての演奏家とつくる音楽会（以下「いわ音」）」が2014年からスタートし、2022年に「Music Program IWATE 4館巡りプロジェクト」へと展開。地域創造のおんかつアーティストで打楽器奏者の野尻小矢佳さん、トロンボーン奏者の加藤直明さん、ピアニストの新崎誠実さんと、岩手県内の4館が協力し、地域に滞在して、いわ音の2名のアーティストとともにホールでの公演、もしくはアウトリーチ、ワークショップ、クリニックなどを、それぞれの館の希望に合わせてやっていただくプログラムとなっている。

#### (1) 取り組みの主体

Music Program IWATE 4館巡りプロジェクトには、下記の岩手県内の4館が参加しており、それぞれでアウトリーチの実績がある。

- ・北上さくらホールは、館によるアウトリーチを2006年から始めて毎年取り組み、2022年まで17年続けてきた。実施先を7分野（教育、保育、障がい、地域、高齢者、医療、企業）に設定し、毎年4分野以上のアウトリーチを実施している。
- ・大船渡市民文化会館では東日本大震災のあとからアウトリーチを始めて、地域創造の「おんかつ」を活用して平均して毎年2本から3本行ってきた。これまでの対象は小学校が多い。
- ・釜石市民ホール TETTO は、開館しておよそ5年。アウトリーチのほかにアート系ワークショップにも力を入れていて、平均すると大体6～7事業で12～13回ぐらい実施してきた。対象は、一般市民や小中学生などだが、まだ試行錯誤の段階である。
- ・奥州市・前沢ふれあいセンターは、2009年からアウトリーチに取り組んできた。奥州市内に文化会館が4つあるが、市町村合併前の市町村単位で、1つの地区にはホールがないところがあるため、そこにもアウトリーチに行くようになった。

4施設それぞれが、運営主体の法人格が違い、北上さくらホールは財団法人による指定管理、大船渡市民文化会館は市直営、釜石市民ホール TETTO は株式会社による指定管理、奥州市・前沢ふれあいセンターは商工会による指定管理となっているが、一緒に協力して連携している。

#### (2) 経緯

最初のきっかけは、2011年に地域創造からの声掛けで、おんかつの市町村連携モデル事業を、北上、前沢、大船渡が担当して実施したことである。この年に市町村が連携をしてモデル事業をしたことに大きな意味があった。モデル事業では、北上さくらホールの千葉さんが地域コーディネーターを担当し、各館と一緒に連携しておんかつの地域版を展開する事業だった。これをきっかけにして、野尻小矢佳さんが震災で被災した幼稚園や保育園への楽器のプレゼントや修理、演奏などの協力をしたことで、絆が深まっていった。

2014年から北上、前沢、大船渡の連携を生かして、地域の演奏家を育てようという音楽家育成プロジェクト「いわ音」を開始した。音楽大学を卒業、あるいは大学の教育学部などの教育課程の音楽コースを終えてい



4館巡りプロジェクト  
ランスルー&プログラム  
研修会(2022年9月)

ること、岩手県に在住または通学していることを参加条件として、オーディションを行っている。1期2名で3期目を迎えた現在は6名の登録アーティストがいる。

各ホールがアウトリーチの経験とアーティストとの関係性を深めていき、2021年に釜石、大船渡で、野尻小矢佳(打楽器)、加藤直明(トロンボーン)、新崎誠実(ピアノ)のトリオの演奏会とアウトリーチが開催された。そこに北上の千葉さんが訪れて、その場で「来年は4館(北上、前沢、大船渡、釜石)でやろう」という相談が始まった。

初年度となる2022年は9月7日から19日に実施。9月の本番に向けて5月頃からZoomで企画会議を始めていろんな調整を行った。前出の3人(野尻、加藤、新崎)のトリオの皆さんに「いわ音」の2人の演奏家を合体させて事業を行った。

### (3) 特徴

Music Program IWATEの特徴の一つは「ゆるふわ連携」と言っており、無理に力を入れていない。厳格な協定を作って、例えば「各館アウトリーチは必ず3回ずつやりましょう」とか「必ず公演をやりましょう」となると、商圏が重なったり、予算規模の違いから問題が出てきてしまう。「それはやめよう」という共通認識で、やりたいところはやりたいように相談する「ゆるくてふわっとした連携」を目指している。そのため、連携協定は結ばずに、4地域それぞれでの経費案分をした上でアーティストと契約し、一連の日数を約束しているという状態だ。

もう一つの特徴は「現場協力」である。連携している4館の担当者が、企画制作やテクニカルなど、いろんな現場の体験をしてきたので、例えば、アーティストのホテルへの送迎、公演での舞台裏、表回りを支えるといった、現場に必要な役割をお互いにサポートしあうことで、人手不足を補い合っている。

### (4) 成果

Music Program IWATEの成果の一つとして、プログラムの一つで、ある中学校の吹奏楽部で実施したクリニックのエピソードを挙げることができる。その中学校では、顧問の音楽の教員は声楽が専門で、管楽器の奏法の基本を知らずに吹奏楽部を指導していた。打楽器奏者の野尻さんとトロンボーン奏者の加藤さんがクリニックをしたところ、顧問の教員がこれまで誤った指導をしてきたことに気づけたと言う。別の学校では、トランペットが吹けなくて悩んでいた中学生の技術的な悩みが改善されたこともあり、事業を担当した職員は成果の手応えを感じた。同時に、「精神論で鍛えられている吹奏楽部の生徒たちが多かったこと、一番大事な基礎を知らないまま3年間過ごす子たちがいるということにもショックを受けた」という意見もあった。

次に、Music Program IWATEに参加しているホール・劇場にとっての成果として、それぞれの組織の管理職や、指定管理の場合は行政の所管課から「他館との連携」に対して高い評価を受けているということが挙げられる。ある施設では、アウトリーチは「良いことをしてはいるが、コストに対して収入がない」として行政本体の理解を得ることが容易ではないという見方もあるという。その中で、連携によってコストの軽減につながっていることは、アウトリーチの意義を理解してもらうためにも重要となっている。

また他施設のスタッフ同士のネットワークの構築という面でも Music Program IWATE は成果をもたらした

---

ている。アウトリーチは、アーティストと企画段階から一緒につくっていく手法が培われていくため、アウトリーチの経験は鑑賞型事業の企画においても独自のアイデアを加えられるようなノウハウを磨くことができる。そのノウハウを Music Program IWATE では4つの施設でお互いに共有しあっている。加えて、このネットワークでは、組織を越えて事業の担当者がお互いに悩みを共有し合い、相談することができることも、この事業の重要なポイントとなっている。

## (5) 課題

2022年度に開始したばかりの Music Program IWATE だが、参加館の中には次年度以降の指定管理者の選定の結果次第で、連携事業の継続が不透明な状態となっているところがある。指定管理者制度の運用によっては、持続的、安定的な組織体制や事業運営が厳しくなることが課題の一つである。

来年度の Music Program IWATE では別の2館が連携に加わる可能性がある。ネットワークの仲間を増やすことで経費の圧縮に努めながら、アウトリーチを継続的に進めていくことが今後の課題となっている。



# II.

## いわき芸術文化交流館 アリオス キッズルーム・プログラム

いわき芸術文化交流館アリオス（以下「いわきアリオス」）では、開館当初から「あそび工房」と題し、市民と協働で子ども向けプログラムや子育て世代の支援に取り組んできた。2021年4月から市内の複数のNPO法人等と協働でキッズルーム・プログラムをスタートさせ、妊婦や0歳児のいる親子、生後1ヶ月～未就学児のいる親子などを対象とした活動に取り組んでいる。

### 1. インタビュー調査協力者

前澤由美（NPO いわき緊急サポートセンター）、大石紅美子（ママフィット with ベビー）、原野ふじ枝（親子ふれあいあそび、ママフィットアシスタント）、永瀬美和（NPO こみゅーん）、矢吹修一、早川まこと、鈴木董（いわきアリオス）

### 2. 事例調査から見てきたポイント

#### ◎ 子育て支援団体からの呼びかけで、新型コロナ禍での遊休スペースの活用がスタート

- 市内の子育て支援団体や個人からの働きかけにより、新型コロナウイルスの感染防止対策で使用が制限されていたいわきアリオスの1階のキッズルームを活用するプログラムとして開始。
- いわきアリオスの主催事業として「キッズルーム・プログラム」を立ち上げ、子育て支援団体ごとに曜日や時間を割り振って当日運営を団体に委ね、いわきアリオスは広報等の支援を行う。

#### ◎ 子育てに関わる参加者（保護者）同士の交流、地域のセーフティーネット

- 参加者した保護者たちは、プログラムに参加したあとも交流が続いており、地域での子育ての悩みを共有する場となっている。
- 子育て支援の現場の問題は年々大きくなっており、誰かの支えが必要だけれども「誰か」が分からないときに、キッズルーム・プログラムは地域のセーフティーネットとなるのではないかと。

#### ◎ 地域で子どもの成長と保護者を見守る、切れ目のない子育て環境

- 子どもの成長によって、子どもと保護者が参加するキッズルーム・プログラムのメニューは変わり、子育て支援団体も、別のメニューに参加している子どもの成長や推移を見守っている。
- いわきアリオスにとっては、同じキッズルームに通い続ける子どもや保護者を見守ることになり、切れ目のない子育て環境を提供することにもなっている。

#### ◎ 子育てに関わる団体が一堂に会し、必要な情報や伝えたい情報を集約

- 子育てに関わる様々な団体がキッズルームに一堂に集まることで、子育てに必要な情報や伝えたい情報が集約され、アクセスしやすくなっている。子育てに関わる専門性のある団体・個人が連携して、市民から必要とされる事業につながることを期待できる。



妊婦の体の負担を減らすストレッチ講座と、助産師による出産準備のための座学を組み合わせた「マタニティストレッチ」

### 3. 取り組みの概要と成果

いわきアリオスの1階のキッズルームで、市内の子育て支援団体や個人がさまざまなプログラム（リズム体操、マタニティストレッチ、親子ふれあいあそびなど）を提供している。保育士、助産師をはじめとした有資格者が見守り、安全管理をしながら、産前産後、子育てについての相談も行っている。

#### (1) 取り組みの主体

いわきアリオス キッズルーム・プログラムは、市内の複数の子育て支援団体がいわきアリオスと協働でスタートさせたものである。事業の企画主体はいわきアリオスで、各プログラムを運営するのが子育て支援団体や個人となっている。支援団体のうち、インタビュー調査の協力者の担当や活動の背景、いわきアリオスとの関係は以下のとおり。

- 「ママフィット with ベビー」というタイトルでキッズルーム・プログラムを担当している。職業は、スポーツクラブでインストラクターをしていて、「マタニティフィットネス協会」という団体の免許を持っている。
- 「親子ふれあいあそび」と「ママフィット」のアシスタントをしている。自分の仕事は保育士で、こけら落としの第九の合唱団に入ったことがきっかけで、その後、フロントスタッフやキッズルームの装飾をさせていただいた。
- 助産師の団体「こみゅーん助産院」で助産師をしている。女性を取り巻く人々、とくに妊婦の健康を重視して活動をしている。キッズルーム・プログラムでは、「子連れ de フラ」、「親子リズム体操」、「マタニティストレッチ」を担当している。
- 幼児保育が専門で、看護師をしながら、NPO いわき緊急サポートセンターの代表を務めている。子育て支援団体を始めたのは東日本大震災の1年前で、子育てに困難を感じている人の健康面を応援し、生活再建のために団体や市につなげる活動をしている。

#### (2) 経緯

いわきアリオスの1階にあるスペース、キッズルームでは、新型コロナ以前は絵本やおもちゃが置いてあり、子どもたちやその親が利用していた。新型コロナ禍に突入し、感染防止対策でキッズルームの使用が制限されて長らく使われなくなっていた。「この部屋が子どもでいっぱいになれば楽しかったのに」という思いを持つ子育て支援団体や個人からの働きかけで、このプログラムが動き出した。

子育て支援団体の一つ、NPO いわき緊急サポートセンターは、東日本大震災以降、大規模商業施設で活動を行ってきたが、新型コロナの感染拡大による商業施設の閉店に伴い、活動の場を失った。活動拠点を退去する際にアンケートを取ったところ、次の移転先の要望の1位がいわきアリオスで突出して多かった。そこでいわきアリオスに働きかけて、キッズルーム・プログラムが始まることにもつながった。



身の回りにあるものを活用し、家でも再現できるあそびを提供する「親子ふれあいあそび」

### (3) 特徴

「公の施設」であるいわきアリオスの施設を利用する以上、特定の個人や団体が占有できないため、いわきアリオスの主催事業として「キッズルーム・プログラム」としてまとめた企画を立案し、子育て支援に関連する活動団体から、プログラムの趣旨に見合った活動を公募した。団体ごとに曜日や時間を割り振って、いわきアリオスはプログラムの広報を行い、プログラムの当日運営は団体に委ねている。

キッズルーム・プログラムの運営者にとって、いわきアリオスが会場であることは、交通面でアクセスしやすく、施設の前が公園で環境的にも居心地が良いため、好評を得ている。また、プログラムを説明する小冊子、情報紙やウェブサイトへの掲載など、広報面でのサポートが充実していることも、信頼関係を高めている。

新型コロナの影響もあり、多くの親から様々な子育ての悩みを聞く場になっている。リピーターも多い。スペースの広さに限りがあり、定員をオーバーする申し込みもたびたびある。「オンラインでも参加したい、どうにかして参加できないか」という人もいて、活動内容によっては Zoom を併用して実施することもあった。

### (4) 成果

キッズルーム・プログラムの参加者（保護者）たちは、プログラム終了後も交流を続けるなど、保護者同士の交流が起きており、地域で子育ての悩みを共有し、孤独や孤立を免れる機会となっている。子育て支援の現場では、子どもに関する悩みや問題は年々大きくなっていると感じられており、子育てに前向きになれない保護者が誰かの支えを必要としても、その「誰か」が分からない場合に、キッズルーム・プログラムが地域のセーフティーネットになる可能性がある。

参加者は、子どもの成長に伴って参加するプログラムも変えていくことになる。子育て支援団体にとっては「今まで来てくれていたあの子が、今度はあのプログラムに通っている」という成長や推移を見届けており、いわきアリオスにとっては、キッズルームに通い続けている子どもや保護者を見守る、切れ目のない子育て環境を提供することにもなっている。

また、子育てに関わる様々な団体がキッズルームに一堂に集まることで、子育てに必要な情報や、子育てに悩んでいる人に伝えたい情報が集約され、容易にアクセスできるようになっている。子育てに関わる専門性のある団体・個人が連携して、市民から必要とされる事業につながることを期待できる。

### (5) 課題

課題として、プログラムを運営する子育て支援団体から、キッズルームのサイズが、活動内容にとってはやや狭いという意見が聞かれた。場所の問題だけでなく、プログラムの時間や参加費の設定など、個々の団体の活動やプログラムが持続可能な方法を、いわきアリオスとともに模索していくことが求められている。

# Ⅲ.

## りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館 視覚障がい者のための Noism からだワーク ショップ

りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館（以下「新潟りゅーとぴあ」）では、2019 年から専属舞踊団 Noism Company Niigata（以下「Noism」）による「視覚障がい者のためのからだワークショップ」を開始した。2018 年の「障害者文化芸術推進法」をきっかけに、障がい者による文化芸術活動の取り組みは徐々に広がりつつあるが、ホールの専属舞踊団としてプロフェッショナルな舞踊家がいることで実現できるユニークな取り組みである。

### 1. インタビュー調査協力者

栗川治（視覚障がい者のための Noism からだワークショップ参加者）、栗川洋子（栗川氏の夫人）、山田 勇気（Noism 地域活動部門 芸術監督）、浅海侑加（Noism2 リハーサル監督）

### 2. 調査から見てきた事業のポイント

#### ◎ 質の高い芸術作品を創作、発信する Noism が行う地域、他分野との更なる連携

- 2004年の設立以来、質の高い芸術作品を創作し、国内外に発信することを目標としていた専属舞踊団 Noism が、2019年、新潟市から地域や他分野との連携を求められるようになった。
- それがかきかけでアウトリーチやワークショップに積極的に取り組むようになり、中でも「視覚障がい者のためのからだワークショップ」は2019年以降、毎年継続している。

#### ◎ 視覚障がい者が Noism ダンサーと「いつの間にか一緒に踊っている」ワークショップ

- ワークショップは、視覚障がい者とダンサーがペアになって手と手を合わせることから始まり、お互いの力の入れ具合や動きを感じながら「いつの間にか一緒に踊っている」流れが組まれている。
- 2回目のワークショップで、Noism の上演作品の一場面を経験した全盲の参加者の一人は、Noism の公演を絶対に「観たい」と思い、最前列中央の座席を予約して「鑑賞した」と語った。

#### ◎ 視覚障害者とダンサー、それぞれの鋭敏な感覚を学び合う機会

- 視覚障がい者にとって、普段から同行する支援者の方の腕に触れて一緒に歩く際に使っている身体感覚は、ある意味ではダンスと同じような身体的なコミュニケーションをしていると言える。
- Noism の地域活動部門芸術監督は、ダンサーと視覚障がい者の身体感覚には共通項があると考えており、ワークショップはそれぞれの鋭敏な感覚を学び合う機会としても考えている。

#### ◎ 「視覚障がい者にはダンスを鑑賞するのは無理だ」という認識が変化

- ワークショップに参加した栗川さんは、「Noism がすごく身近になった」と言う。また、このワークショップに参加し、見に来た人から「視覚障がい者がダンスを鑑賞するなんて絶対に無理だ」と思っている人たちの認識の変化が起きることを期待している。



新潟りゅーとびあ：Noism 視覚障がい者向けワークショップ(2022年)



### 3 取り組みの概要と成果

#### (1) 取り組みの主体

「視覚障がい者のためのからだワークショップ」は2019年から開始した。Noismは、プロフェッショナル選抜メンバーによるNoism0(ノイズムゼロ)、プロフェッショナルカンパニーであるNoism1(ノイズムワン)と、その附属集団として2009年に設立されたプロをめざす若手の舞踊家が所属するNoism2(ノイズムツー)という3つの集団を擁している。

また、現在のNoismの体制は、芸術総監督に金森穰さん、国際活動部門芸術監督に井関佐和子さん、地域活動部門芸術監督に山田勇氣さん、Noism2リハーサル監督に浅海侑加さんが就任しており、本項で取り上げた「視覚障がい者のためのからだワークショップ」について、地域活動部門芸術監督の山田さん、リハーサル監督の浅海さんに話を伺った。

#### (2) 経緯

Noismのアウトリーチは、2015年度に新潟市の受託事業として新潟市内の中学校へのアウトリーチが始まっているが、当時は単発的に行うものだった。2004年にNoismが設立されて以来、その活動の目標は質の高い芸術作品を発信し、その公演を市民に観ていただくことに精一杯で、アウトリーチやワークショップといった活動には手が届いていなかったと山田さんは語る。

2019年、新潟市からNoismが取り組むべき活動として、地域や他分野との更なる連携が求められたことがきっかけで、「新潟市視覚障害者福祉協会」の協力により、視覚障がい者用のワークショップという企画が立ち上がった。山田さんがNoismで養った身体感覚と、武道及び日本武術の研究家であり、世界各国の著名な振付家とも交流のある日野晃さんに教わったテクニックを、視覚障がい者とのワークショップに応用した。それがNoismにとっても初めて経験となり、それ以降、毎年継続している。

#### (3) 特徴

「視覚障がい者のためのからだワークショップ」に参加した栗川さんによると、初回の2019年度のワークショップに参加した視覚障がい者は12名くらいで、視覚障がい者とNoismのダンサーが1人対1人か1人対2人の組になり、まず、手と手を合わせて、押されたら押される、押し返されたら押し返されるような動きから始まる。視覚障がい者がダンサーの体に触らせてもらって、足、腰、背中、肩、腕と触っているうちに、ダンサーが体を動かした時にずっと触り続けることになり、そこに音楽がかかると、視覚障がい者はダンサーの体に触りながら動きを追いかけ、結果的に一緒に踊っているような形になる。

2020年度の2回目のワークショップは、Noismが上演するストラヴィンスキー作曲の『春の祭典』の中の一場で、変拍子のリズムで足を踏むシーンがあり、それを視覚障がい者も一緒にやってみるプログラムだった。栗川さんはそのワークショップで『春の祭典』を経験したことから、Noismの公演を「絶対に観たい、体験したい」と思って、前売り券の予約開始と同時に最前列中央の座席を予約し、その公演を「鑑賞した」と語った。

---

栗川さんは「本番のステージでは、風の動きやら足音やら振動やら、いろんなものが目に見えなくても伝わってきた。金森さんはダンスとは物語や音楽を視覚化する営みだと言う。私が舞台を鑑賞することは、逆に可視化されたものを再不可視化したということになり、そこにダンスという身体表現の存在を実感した」のだと言う。

#### (4) 成果

視覚障がい者のワークショップで「触れることで理解したい」という熱量に驚いたと言う地域活動部門芸術監督の山田さんは、視覚障がい者は「自分たちがやっていることを根本から揺さ振るような存在」で、「彼らを感じている世界を僕たちも絶対知るべきだ」と語る。視覚障がい者とダンサーそれぞれの身体感覚を使う特殊な能力をどのように学び合えるかということテーマにワークショップを考えている。

ワークショップに参加した栗川さんも、視覚障がい者の身体能力として、例えば普段から同行する支援者の方の腕に触れて、一緒に歩く人の動きに合わせて左右の向きを変えるとといった体の動きを日常の歩行でやっているため、ある意味ではダンスもその延長線上のように身体を通じたコミュニケーションをしているのではないかと考える。

栗川さんは、このワークショップで「Noism がすごく身近になった」と言い、「障がいがある人がワークショップに参加し、それを見に来られた方の世界が、また一つ扉が開いたように感じてくださっていたらいい」、「視覚障がい者がダンスを鑑賞するなんて絶対に無理だ」と思われていたことが、「鑑賞もできると、そのことに関わった人が感じて、認識が変化することはあると思う」と語る。

#### (5) 課題

障がいのある人の文化・芸術活動に関して、栗川さんは「初めからこの人たちは無理だろうと思わず、誰も排除せずに機会を提供することが、とくに公立の文化施設の正しい税金の使い方だと思う」と言う。山田さんは、こうしたアウトリーチやワークショップは、プロのカンパニーで先鋭的に高いレベルで培われた身体性があるからこそ、アウトリーチに活かしていける部分もあるということ、どう伝えていけるかが課題だと考えている。

# IV.

## 上田市交流文化芸術センター サントミュージゼ 実験的演劇工房

上田市交流文化センター サントミュージゼ（以下「上田サントミュージゼ」）では、市内の高等学校演劇班を対象に「実験的演劇工房」という事業を実施している。日本を代表する劇作家・演出家をレジデンス・アーティストに迎えて、演出や監修、指導を依頼し、2週間程度の間ワークショップや作品制作に取り組み、最終日に成果を発表する。

### 1. インタビュー調査協力者

宮下弥優(上田高校 演劇班 3年)、中澤咲南(上田高校 演劇班 3年)、宮下歩実(演劇班 OB)、横尾慎二、田澤拓朗(上田サントミュージゼ)

### 2. 調査から見てきた事業のポイント

#### ◎ 高校生たちの自由な発想がプロの劇作家・演出家の指導の手で形になる

- 高校生が主演となる実験的演劇工房では、あらかじめ用意された台本はなく、ワークショップ形式で作品制作に取り組む。
- 市内の高校では、演劇経験のない教員たちが演劇班の顧問を務めていることから、教員としても指導の方法が分からないため、劇場でのこの取り組みを歓迎している。

#### ◎ 他校の生徒との交流と作品づくり、劇場の技術スタッフの仕事への興味

- 参加した高校生にとっては、初めて出会う他校の生徒と一緒に演劇づくりに取り組むことは、非常に貴重な経験となっている。
- 上田サントミュージゼの、舞台、照明、音響の技術スタッフが高校生たちの創作をサポート。演劇や劇場のスタッフの仕事に興味や関心を持つきっかけとなっている。

#### ◎ 高校卒業後の進路にも影響を与える貴重な経験

- 実験的演劇工房に参加した OB には地元の舞台技術会社に就職して劇場の技術スタッフとして働いている人もいる。
- 直近2カ年に参加した高校生も、高校の課題研究で地方のホールと市民の芸術活動の関係について調べたり、演劇を学ぶ大学への進学を希望するなど、参加者の進路にも影響を与えている。

#### ◎ 「近寄りやすい場所」から「気軽に来てもいい場所」への印象の変化

- 参加する前は「近寄りやすい場所」と感じていた上田サントミュージゼが、実験的演劇工房に参加したことで「地域の人が気軽に来てもいい場所」という認識に変化した。
- 地元のケーブルテレビがこの企画を毎年取材し、放送していることで、上田サントミュージゼに対する地域住民の認知度も高めている。



実験的演劇工房 3rd 「Q 学」  
作・演出・監修 田上豊 (2016  
年 12 月)

### 3 取り組みの概要と成果

実験的演劇工房は、上田市内の高校の演劇班（一般的な部活動としての演劇部）の生徒たちと、プロの演出家が限られた日数でひとつの舞台を作り上げる事業である。高校生の自由な発想により「悩み」「考え」「生み出す」過程を経験し、人とのつながりと出会いの場をつくりながら未来の芸術の担い手を育てる活動となっている。

#### (1) 取り組みの主体

上田サントミュージゼが市内のすべての高校の演劇班に協力を呼びかけ、参加者を募っている。高校生と一緒に舞台を作り上げる演出家には、岩崎正裕（劇団「太陽族」）、田上豊（劇団「田上パル」）、守田慎之介（劇団「演劇関係いすと校舎」）、多田淳之介（劇団「東京デスロック」主宰）など、国内外で活躍する若手の劇作家・演出家を劇場のレジデンス・アーティストに迎えて、演出、監修、指導を依頼している。

参加する高校生の数は年度によって変動するが、概ね 20 名前後が参加する。インタビューに協力してくれた参加者は、2020 年と 2021 年に参加した市内高校演劇班の所属の 2 名と、2014 年から 2016 年までの 3 年間参加し、現在は上田サントミュージゼの舞台技術のスタッフとして働く 1 名の 3 名である。

#### (2) 経緯

実験的演劇工房は、上田サントミュージゼの大スタジオのこけら落とし事業として 2014 年 12 月に実施した。上田サントミュージゼの前館長の津村卓さんと事業担当の横尾慎二さんの「演劇の楽しさを高校生に体験してほしい」という思いから企画がスタートした。

初年度、市内の高校の演劇班に呼びかけても参加人数は多くは望めないと考えていたところに、予想を上回る応募があった。演劇班の顧問は演劇経験のない教員が務めていることが多く、どのように指導したらいいのか、また子どもたちがどういう指導を求めているのかも分からないため、教員たちからも「やってほしい」という意見が寄せられた。

そうした経緯もあって、当初はこけら落とし事業の単年度企画で開始したが、参加した生徒からの継続を望む声や事業の成果を踏まえて、現在までの継続実施に至っている。

#### (3) 特徴

演出、監修、指導を依頼する劇作家・演出家は、ワークショップ形式で高校生の自由な発想を引き出しながら、ともに演劇作品を作り上げていく。そのため、あらかじめ台本が用意されるものではなく、ワークショップの中での何気ない日常的な会話や高校生の自発的な創作をベースにすることが多く、演劇的な技法を教えることを第一義としていない。

参加した高校生にとっては、自分が通う学校以外の他校の生徒と、この場で初めて出会って一緒に演劇づくりを経験することが非常に貴重な体験となっている。また、上田サントミュージゼの、舞台、照明、音響の技術スタッフも高校生たちの創作を暖かくサポートする。俳優以外の舞台芸術の仕事に触れたことのない高校



---

生たちが、演劇や劇場のスタッフの仕事にも興味や関心を抱くきっかけとなっている。

#### (4) 成果

インタビューの協力者の一人で、2014年から2016年まで3年間参加した宮下さんは、高校を卒業後、舞台技術の専門学校を経て、地元の舞台技術の会社に就職し、上田サントミュージゼで舞台機構の仕事を担当するようになった。また、2020年と2021年に参加した現役の参加者（高校3年生）は、東京の大学の演劇学科舞台美術コースや、役者を目指して演劇を学ぶ大学に進学する道を選択するなど、演劇的実験工房は高校卒業以降の進路に大きな影響を与えている。

参加した経験の成果や効果は、高校生の演劇活動に止まらない。例えば、ワークショップで即興的に演じる経験したことで、普段の学校生活での友人とのコミュニケーションでも「相手を信用し、委ねる」ということを学んだという意見が聞かれたり、劇場への関心が広がって高校での課題研究で「地方のホールが市民の芸術活動にどう影響を及ぼすか」をテーマとして取り上げた参加者もいる。

また、上田サントミュージゼという施設に対する印象が、以前は「少し近寄りづらい」「心構えしてから入らなければならない場所」と感じていたのが、演劇的実行工房に参加したことで、「地域の人が気軽に来てもいい場所」という認識が変わり、親近感を持つことにつながっている。さらには、この企画は毎年地元のケーブルテレビの取材が入ることで、地域の人々への認知度も高く、多くの市民から楽しみにもされている。

#### (5) 課題

高校生が主役の事業であるため、平日の夕方から夜の時間帯にかけてのワークショップや稽古が続く日程となっており、遠距離からの参加者の交通手段の確保や帰宅時間が遅くなってしまうことには、保護者の理解が必要である。

上田サントミュージゼとしては、実験的演劇工房に参加する高校生たちの中には劇場での演劇の公演に観客として来場してくれる人もいるものの、舞台を観ることよりも舞台上で演じることへの興味が上回っている傾向があり、そうした子どもたちに、舞台を見ることにも興味を持ってもらうことが今後の課題と考えている。



## 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT ワークショップファシリテーター養成講座

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT（以下「とよはし PLAT」）では、市内小・中学校に出向いて行うワークショップの進行役を務める人材の育成を目的に、2014 年から「ワークショップファシリテーター養成講座」を実施している。これまでに、劇場からアウトリーチのコーディネーターやアシスタントを委託されるようになった参加者がいる。

### 1. インタビュー調査協力者

市野ゆみ、柴田公代、本田信英、山田久子、山本友香（ワークショップファシリテーター養成講座の過去の受講生）、大橋玲、加賀茅捺、塩見直子、吉川剛史（とよはし PLAT）

### 2. 調査から見てきたこの事業のポイント

#### ◎ ワorkshopのファシリテーター（進行役）の役割や手法を学ぶ

- この事業は、全国で活躍する演劇ワークショップのファシリテーター、コーディネーターを講師に迎えて、ワークショップを活用して地域課題に向き合うためのファシリテーターの役割や手法を学ぶ。
- 参加者は演劇やダンスの経験の有無に関係なく、学生や様々な分野の職業、年齢の方々が参加している。ファシリテーターという役割の魅力や可能性に気づき、その技術を身に着けたい人々が参加している。

#### ◎ 前期はワークショップづくり、後期は演劇づくりと実践を中心とする濃密なプログラム

- プログラムは前期と後期に分かれており、夏休み時期に行われる前期では、演劇のワークショップを体験し、自ら子ども向けのワークショップのファシリテーターを経験してみる内容（全7回程度）。
- 秋以降の後期では、劇場の外に出てまちの人から話を聞いて演劇作品に仕上げていく。そのため、創造性を発揮することが求められる内容となっている（全8回程度）。

#### ◎ 劇場が行う小・中学校へのアウトリーチの「有償コーディネーター・アシスタント」として活動

- 講座の修了生たちがすぐに講師陣のようにファシリテーターを務められるわけではないが、中には劇場が行う小・中学校へのアウトリーチのコーディネーターやアシスタントを有償で務めている人もいる。
- 他の修了生で、豊橋市が行う別の事業でワークショップのファシリテーターを務めている人もおり、有償の仕事が生まれている。

#### ◎ 劇場が行う事業の地域の応援団、今後のアウトリーチの担い手の育成

- 修了生は講座で学んだ経験を、自分自身の生活や仕事に活かしており、とよはし PLAT としては、劇場事業の地域の応援団のような重要性を実感している。
- 今後、アウトリーチを市内の小・中学校に広げていくためにも、数多くの学校現場で修了生が活躍することが期待されており、その担い手を増やしていくことが課題となっている。

ワークショップファシリテーター養成講座  
2017 後期「まちに聞く、考える」発表会



### 3 取り組みの概要と成果

「ワークショップファシリテーター養成講座」は、ワークショップの進行役であるファシリテーターを養成する講座で2014年度より実施している。ワークショップを活用して地域の課題に向き合い、実践できるファシリテーター（進行役）となる人材を、長期的・継続的な視点で育成している。

#### (1) 取り組みの主体

とよはしPLATが、様々な分野でワークショップの手法を活用したいと考えている方、「ファシリテーター（進行役）」に興味があり将来そのような仕事をしてみたい方、演劇ワークショップの様々な形を体験してみたい方などを公募している。講師陣には、現役のファシリテーターとして全国で活躍している柏木陽さんや、すずきこーたさん、また、豊橋在住でコーディネーターとして全国で活躍する吉野さつきさんなどを招いている。

インタビュー調査に協力していただいた過去の受講者は、観光協会の事務職や国際交流協会のボランティアスタッフ、ダンスの講師、ピラティス、ヨガのインストラクターなどで、演劇やダンスの経験の有無に関係なく、ワークショップを進行する役割や手法に興味のある方々である。

#### (2) 経緯

講座は、毎年、前期（例年7月下旬から9月）と後期（例年12月～翌年1月）の2期に分けて実施している。2014年の前期は6回で参加者20名、後期は9回の講座で参加者21名。それ以降、講座の回数や参加者数に増減はあるが継続しており、複数年にわたって参加する受講生もいる。

事業を立ち上げる際に担当した吉川さんは、講座の名称を「演劇ファシリテーター養成講座」として「演劇」を付けるかどうか迷ったが、結果的に「演劇」をつけずに講座の対象を広げたことが正解だったと考えている。

#### (3) 特徴

前期の講座では、演劇の手法を用いたワークショップを知り、自分たちでも考えて、進行役を体験する。前期の終わりに、劇場全体を使った子ども向けのイベント「ワークショップ緑日」で、受講生たちのオリジナルのワークショップを実際に進行する。最後は必ず振り返る時間を設けている。

後期は、まちの人に取材した内容を元に、演劇作品をつくり上演するプログラムで、劇場の外に出かけてまちの人から話を聞き、他の参加者の聞き書きとすり合わせ、台本を書き、演劇作品にする。受講生にとっては創造性を存分に発揮する必要があり、ワークショップのファシリテーションの実践につながる要素が多分に含まれている。

また、年度末には「小・中学校・特別支援学校に出向いてのワークショップ&ワークショップファシリテーター養成講座 報告会」を開催し、教育・福祉関係者や行政に関わる方、将来アートに関わりたい学生など、様々な関心を持つ方々にも、この取り組みを紹介している。



ワークショップファシリテーター養成講座  
2018 前期「ワークショップ縁日」

#### (4) 成果

修了生たちは講師陣と同じレベルでファシリテーターやコーディネーターを務められるまでには至っていないものの、講座への参加を通して、演劇やアウトリーチ、ワークショップの可能性を発見している。例えば、異なる考え方の人が集まる場での合意形成の方法や、子どもたちとの接し方、コミュニケーションのあり方などで、演劇を通じた深い気づきが生まれている。

修了生の中には、講座で学んだ経験を活かして、劇場が行う小・中学校へのアウトリーチの現場で講師や事業担当者をサポートする「有償コーディネーター・アシスタント」を委託されるようになっている人もいる。また、別の修了生は、劇場が行う学校へのアウトリーチとは別に、豊橋市教育委員会の生涯学習課が放課後の小学校を学びの場とする「のびるん de スクール」という事業でダンスのワークショップで有償の仕事を受けている。

とよはし PLAT としても、講座の修了生が劇場の事業にとって地域の応援団のような存在となることの重要性を実感していると同時に、修了生の中から有償でアウトリーチのコーディネーターやアシスタントを任せられる人材を輩出することは、互いの信用と責任のある関係性を構築することでもであると捉えている。

#### (5) 課題

講座を受けた人たちにとっては、ファシリテーターとしての役割の魅力に気づき、自分もその技術を身につけたいという意識を持つようになっているが、ファシリテーターという言葉自体が一般の人たちにはまだ馴染みが薄く、もっと多くの市民に講座に興味を持って来てもらえるように努めることが、課題のひとつとなっている。

今後、市と協力してアウトリーチを豊橋市の小・中学校に広げて、豊橋で育った人たちはワークショップを受けた経験が共通言語となるようなビジョンを描く修了生もいる。その際には、数多くの学校現場で修了生が活躍することが期待される。修了生からも、ファシリテーターやコーディネーターの仕事の主たる業務として行うことは難しいものの、ダブルワークの一つとして収入のある中間層の担い手を増やしていくことが課題だという声が聞かれた。

# VI.

## 北九州芸術劇場

### ひとまち+アーツ協働事業「若者応援芸術プログラム」

北九州芸術劇場では、開館 10 周年の頃から地域のさまざまな団体や機関などとパートナーシップを組み、“人と人”“人とまち”をつなぐ「ひとまち+アーツ協働事業」を展開してきた。子ども・若者応援センターと協働して、若者たちとさまざまな「芸術体験」に取り組む「若者応援芸術プログラム」など、舞台芸術の持つ力を地域の課題解決や多様性のある社会の実現に活かそうとしている。

#### 1. インタビュー調査協力者

柳谷紗織、平山みゆき（北九州市子ども・若者応援センター「YELL」）、龍亜希、吉松寛子（北九州芸術劇場事業担当）

#### 2. 調査から見えてきた事業のポイント

##### ◎ 悩みや困難を抱える子どもや若者の総合相談窓口との芸術体験プログラム

- 社会生活を営む上で様々な悩みや困難を抱える子どもや若者と、その家族を支援する総合相談窓口となっている北九州市子ども・若者応援センター「YELL」が、北九州芸術劇場との協働・連携により、芸術体験を社会参加プログラムに位置付けて実施。
- 若者応援芸術プログラムでは、演劇やダンスのワークショップに取り組みながら、若者がプロのアーティストと触れ合うことで、創造性や表現力が向上すること目的としている。

##### ◎ 安心して自分の意見を言える「居場所」

- 相談窓口に来る若者には「自分が周囲とズレているのではないか」「自分の意見を言うことに自信がない」という人が多い。
- そうした若者に対してワークショップの講師は、参加者のどのような意見やアイデアも受け止めてくれる。そのため、ワークショップは安心して自分の意見やアイデアを言える「居場所」となっている。

##### ◎ 演劇という手法ならではの自己表現、若者の別の側面の発見

- 演劇ワークショップという手法では、自分ではない「役」を演じることで「自分」を出しやすくなるという効果がある。
- 相談窓口に来る若者の、個別面談やカウンセリングでは見られない一面が、演劇ワークショップで見えたり、その若者の周囲の受け止め方に変化が起きたりすることもある。

##### ◎ 困難を抱える若者と社会をつなげる役割を劇場が果たす

- 北九州芸術劇場にとって、この事業は、演劇を通じて困難を抱える若者と社会をつなげる役割を劇場が具体的に果たしているというだけでなく、若者応援芸術プログラムの参加者が演劇公演を観に来たり、一般のワークショップに参加する若者が増えたりするなど、劇場への興味や関心のきっかけにもなっている。

---

### 3 取り組みの概要と成果

北九州芸術劇場の「観る」「創る」「育つ」「支える」の4つの事業のコンセプトのうち、「育つ」では芸術やアーティストとの出会いを届けて、人やまちの未来を育む様々なプログラム「ひとまち+アーツ協働事業」を展開している。その中のひとつ「若者応援芸術プログラム」は、北九州市子ども・若者応援センター「YELL」（エール）（以下「YELL」）との連携によって、2013年から継続的に実施している若者の芸術体験プログラムである。

#### (1) 取り組みの主体

「YELL」は、社会生活を営む上で様々な悩みや困難を抱えている概ね15歳以上39歳以下の方と、その家族を支援する総合相談窓口である。北九州市が社会福祉法人北九州市福祉事業団に運営を委託しており、専門のカウンセラーや臨床心理士とマンツーマンで面談を重ねながら継続的な支援を行い、若者の社会参加プログラムを紹介している。

北九州芸術劇場と「YELL」による「若者応援芸術プログラム」では、演劇やダンスのワークショップに取り組んでおり、近年は講師として北九州を拠点に演劇活動を展開する二人、有門正太郎さん（俳優、演出家、劇作家、有門正太郎プレゼンツ主宰）や守田慎之介さん（劇作家、演出家、演劇関係いすと校舎主宰）を迎えている。

#### (2) 経緯

「若者応援芸術プログラム」は2013年に協働事業を開始。初年度は田上豊さん（劇作家・演出家、田上バル主宰）の演劇体験ワークショップ、セレノグラフィカ（隅地茉歩さん、阿比留修一さん）のダンスワークショップという、演劇とダンスの2つの方向性からアプローチした。

その後、2015年度には参加する若者と一緒に「エールダンス」を創作、2017年度には「YELL」の職員の方向けの演劇体験ワークショップを実施、2018年度には「YELL」での他の社会参加活動をアーティストとともに見学し、公開ワークショップという形で初めての発表会を開催した。参加者数（延べ人数）は、各年度の活動によって変動があり、少ない場合は約20名、多い場合は約110名を超える年度もある。

#### (3) 特徴

年度によってプログラムの内容が変化してきたが（資料編 p.78 参照）、単発ではなく継続的に行う活動であり、一人ではできないこと、様々な人たちの協力があって成立することを経験する場になることを目論んでいる。「YELL」のスタッフは、相談に来る若者との個別面談やカウンセリングの中で、様々な社会参加プログラムへの参加を促している。芸術体験プログラムに関しては、「アーティストと関わることで自分の殻を破ったり、表現力を養ったりする活動だけど、興味はある？」と尋ねて、そうした誘いに応じる若者が参加している。

「YELL」のスタッフが事業の特徴として捉えているのは、若者が演劇やダンスのプロのアーティストと触れ合うことで、創造性や表現力が向上する点である。とくに「YELL」に相談にくる若者には、「自分の意見が周囲とズレているのではないか」「自分の意見を言うのは自信がない」という人も多く、演劇ワークショップ



---

の講師の有門さんや守田さんが、参加者のどのような意見やアイデアも受け止めてくれるので、ワークショップは安心して自分の感じたことを発言できる場になっている。

#### (4) 成果

「YELL」との若者応援芸術プログラムでの成果は、参加者にとっての成果、「YELL」にとっての成果、北九州芸術劇場にとっての成果に分けることができる。

参加者にとっての成果では、当初は参加に消極的だった若者が、プログラムの回数を重ねるごとに自分の意見を伝え、自分を表現し、自分の得意なことを発揮することで、自分に自信がつくことが挙げられる。この活動が自分にとっての居場所だと感じられるだけでなく、他の社会参加プログラムへの参加率が上がったり、「とりあえずやってみよう」と思える若者が増えたりしている。「YELL」のスタッフによると、各年度でこのプログラムの参加者の7割は、進学や就労が決定するか、就職訓練や就職に進む準備に入っているとのことである。

次に、「YELL」にとっての成果は、相談に来る若者について、個別面談やカウンセリングでは見られない一面が、この活動で浮き上がって見えることである。演劇という手法で自分ではない「役」を演じて「自分」を出しやすくなることで、その若者に対するスタッフや周囲の受け止め方にも変化が起きる。また、「YELL」の事業の協働、連携の相手先にも広がりが生まれており、ワークショップの「成果発表会」を通じて、各支援機関や各事業所に「YELL」の活動や若者たちの成長の様子を知ってもらう機会となったり、このプログラムでの稽古場を提供した北九州芸術劇場以外の市内の施設とも、その後の様々な活動でつながっていると言う。

北九州芸術劇場にとって、この事業は、困難を抱える若者と社会をつなげる役割を劇場が具体的に果たしているというだけでなく、この事業の参加者が、劇場の他の公演に興味を持って演劇を観に行くようになったり、劇場で開催されている一般のワークショップに参加する若者が増えたりするなど、若者が劇場への興味や関心を持つきっかけとなっている。

#### (5) 課題

若者の自己表現の幅を広げる活動として、この若者応援芸術プログラムを継続させていくことが重要であり、「YELL」としても資金調達の努力をしてアーティストとの関係を構築している。北九州芸術劇場での発表会の際に劇場の稽古場を使ったが、劇場ならではの創作の現場を若者が経験したことが貴重で、よりワークショップのクオリティが上がり、参加者も楽しみにするようになった。「YELL」は今後も劇場の見学や創作現場の体験を継続できればと考えている。





資料編 調査協力館のアウトリーチ等の主な内容と  
補足資料



北上市文化交流センターさくらホール | 音楽アウトリーチ等

【施設概要】

開館：2003年  
 運営：(一財)北上市文化創造(指定管理)  
 施設構成：  
 大ホール(1,503席)、中ホール(471席)、小ホール(264席)、アートファクトリー21部屋(ミュージックルーム1・2、アクティブラーム、キッズルーム、大アトリエ、アンサンブルルーム1・2、トレーニングルーム、レッスンルーム1・2、オープンルーム、小アトリエ1・2など)



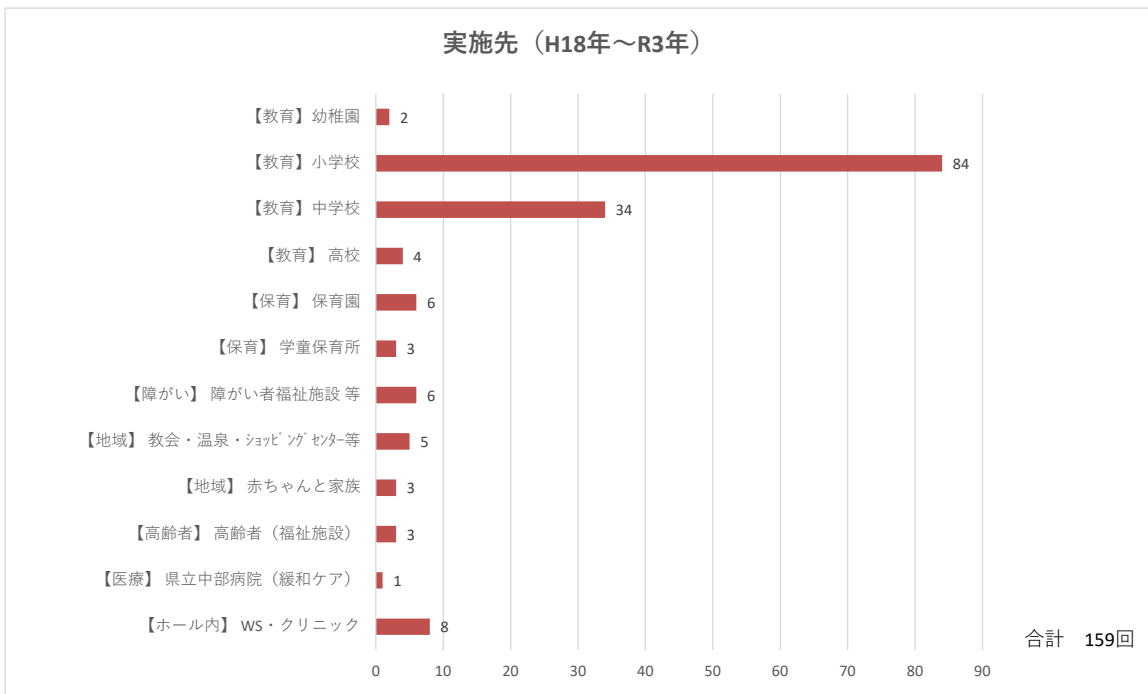
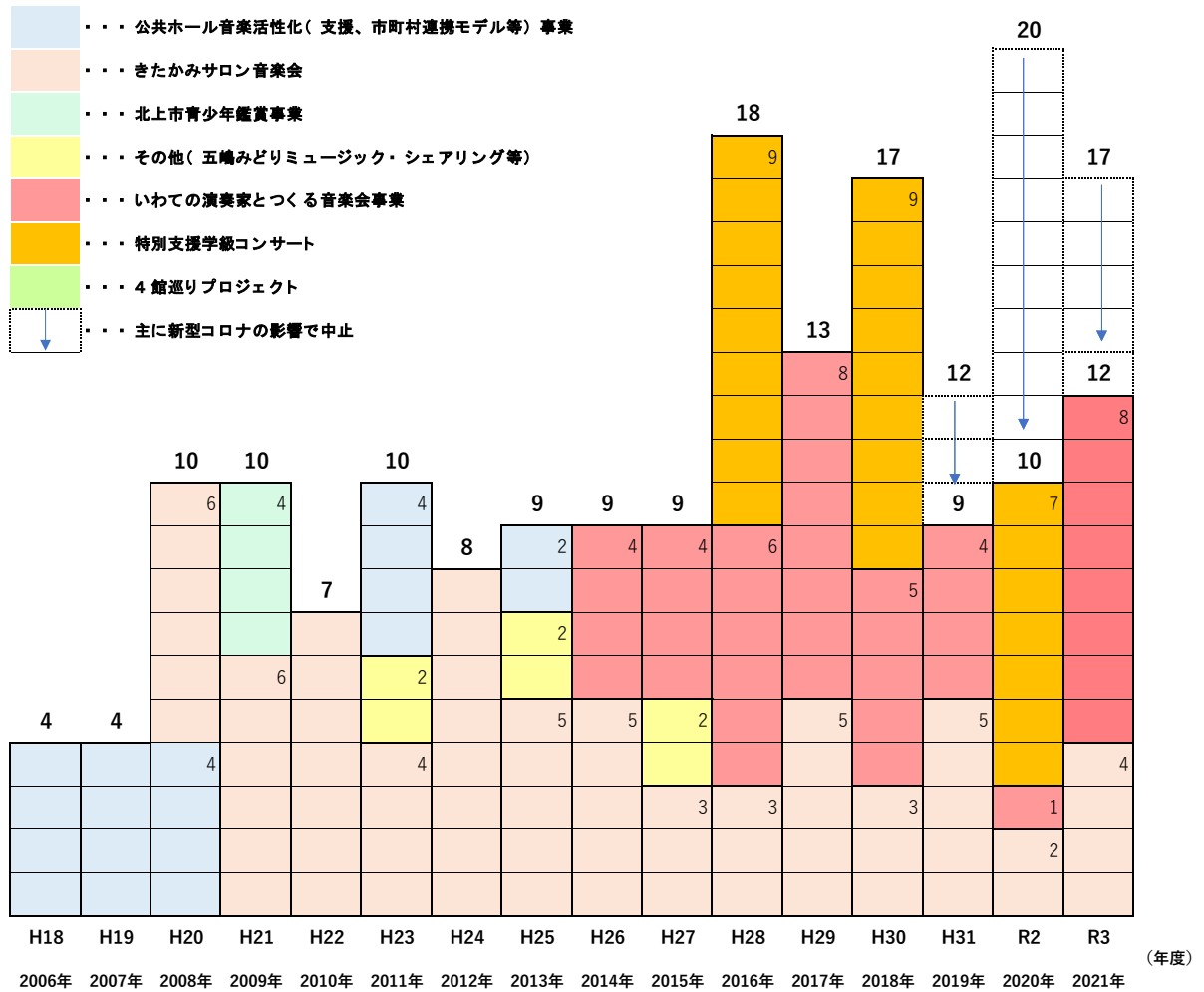
特別支援学級コンサート 金管五重奏団 Buzz Five (2020年11月)

<p>趣旨・目的</p>	<p>さくらホールでは、様々な理由でホールに足を運びづらい人や、そもそも文化芸術に興味がないと思っている人に演奏会やワークショップを届け、アーティストとの双方向の交流により文化芸術による感動をもたらすことを目的にアウトリーチ事業を実施している。</p>
<p>対象</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教育：幼稚園、小中高校（中学校は特別支援学級が中心）</li> <li>● 保育：保育園、学童保育所</li> <li>● 障がい：障がい者福祉施設等</li> <li>● 地域：教会・温泉・ショッピングセンター等、赤ちゃんと家族</li> <li>● 高齢者：高齢者福祉施設</li> <li>● 医療：県立中部病院（緩和ケア）</li> <li>● 企業</li> </ul>
<p>芸術分野</p>	<p>クラシック音楽、ダンス</p>
<p>アーティスト</p>	<p>当初は地域創造のおんかつアーティストが中心。2008年から音楽事務所からの招へいアーティスト、2014年から岩手県内の演奏家でもアウトリーチを実施。</p>
<p>募集方法</p>	<p>当該年度の5月に実施予定プログラムの募集案内を小学校等に配布して、希望を募り、調整して実施先を決定。中学校の特別支援学級は隔年で全校実施しているため、募集ではなく学級の有無を確認している。</p>
<p>実績</p>	<p>音楽事業のアウトリーチは2006年から継続、21年度までに159回、参加者4,785人。他に地域創造のダン活からはじまったワークショップやアウトリーチ(盆踊り活性化事業、子どもの舞台芸術体験事業「キツザート」など)も実施。</p>

<p>特徴的な取り組み</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● アウトリーチの対象として、教育、保育、障がい、地域、高齢者、医療、企業の7つの分野を設定して実施。中学校のアウトリーチ先はほとんどが特別支援学級、企業はダンスの取り組みを始めたところ。</li> <li>● 2008年から音楽事務所からの招へいアーティストに「きたかみサロン音楽会」への出演を依頼し、その前後の日程でアウトリーチを実施（年間3回の公演ごとに2回のアウトリーチ、年6回が基本）。2022年度で15回目。</li> <li>● 2014年からは「いわての演奏家とつくる音楽会（いわ音）」で岩手県内の演奏家（外部専門家によるオーディションで選定）にもアウトリーチを依頼。</li> </ul>
<p>いわての演奏家とつくる音楽会 ・ Music Program IWATE 4館巡りプロジェクト</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 2011年に地域創造の「おんかつ市町村連携モデル事業」を、北上、前沢（奥州市）、大船渡の3地域で実施。それをきっかけに、おんかつアーティストの野尻小矢佳さんが東日本大震災で被災した幼稚園や保育園への楽器プロジェクト、修理、演奏などを行って3地域の絆が深まり、2014年からその連携を活かして地域の演奏家を育てる「いわての演奏家とつくる音楽会（いわ音）」（前沢・大船渡・北上連携事業）を開始。</li> <li>● 2021年に釜石、大船渡で3名のおんかつアーティスト（野尻小矢佳、加藤直明、新崎誠実）によるトリオの演奏会とアウトリーチが開催され、翌年に4館連携事業の実施を企画。</li> <li>● 2022年9月に3名のおんかつアーティストに「いわ音」の2名のアーティストが加わり、「Music Program IWATE 4館巡りプロジェクト」を実施。県内4館の公立文化ホールと岩手県を愛するアーティストがタッグを組んで、コンサートやアウトリーチ、地域の演奏家との共演など、星巡りをするようにさまざまな方法で地域の人々と音楽を共有するプロジェクトである。</li> <li>● 厳格な協定を結ばない「ゆるふわ連携」、各館の経験を共有する「現場協力」を重視しており、さくらホールで力を入れてきたアウトリーチから、県内ホールの連携事業としてアウトリーチや演奏会に発展したユニークな取り組みは、公共ホールの連携事業として参考になる。</li> </ul> <div data-bbox="805 571 1404 1317" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="805 1332 1404 1400">4館巡りプロジェクト 釜石市民ホール TETTO ロビーコンサート（2022年9月）</p>

音楽アウトリーチ年度別実施回数の推移

資料提供：北上市文化交流センターさくらホール





## いわき芸術文化交流館アリオス | おでかけアリオス等

### 【施設概要】

開館：2008年  
 運営：いわき市直営（施設管理はPFIで設立した「いわき文化交流パートナーズ(株)」）  
 施設構成：  
 大ホール（1,705席）、中劇場（687席）、小劇場（233席）、音楽小ホール（200席）、大リハーサル室、中リハーサル室、中練習室、小練習室、スタジオなど



おでかけアリオス 三和プロジェクト 田村緑 ピアノ コンサート (2016年10月)

趣旨・目的	<p>「おでかけアリオス」は、未来を担う子どもたちや、地理的な事情やその他の理由で館に足を運ぶことが難しい方々を対象に、市内の小・中学校をはじめ、公民館や地域のコミュニティ施設などにおいて、コンサートやワークショップを開催するものである。</p> <p>小・中学校における「おでかけアリオス」は、生の芸術の迫力や魅力を伝えることはもちろん、子どもたちとアーティストが間近な距離でコミュニケーションを交わすことを通して、子どもたちのしなやかな感性や、未来に向けて力強く生きていく力を育んでいくことを目指して実施している。</p>
対象	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小・中学校生</li> <li>● 一般市民</li> </ul>
芸術分野	クラシック音楽、邦楽、演劇、身体表現（クラシック音楽と邦楽が約8割）、開始当初はワールドミュージックやポップスも実施。
アーティスト	市外から招へいするアーティストに加え、2010年に「おでかけアリオス研究会」をスタートさせ、いわき出身・在住のアーティストとオリジナルのプログラムづくりに取り組んでいる。現在まで4期（1期3年）、13名・13組のアーティストが活躍中（いわき市内在住は6組）。
募集方法	前年度末に翌年度実施予定のプログラムの案内を作成し、小・中学校に配布して、アンケートで希望を募り、協議・調整によって、実施校を決定。
実績	開館前年の2007年度から開始し、2021年度末までの実施回数は729回（うち小・中学校が約670回、公民館や福祉施設などが約130回）、参加者数は42,281名。2022年度は24組のアーティストが学校・地域あわせて85回を実施。

特徴的な取り組み

- 当初は小・中学校等の施設型とコミュニティ型の2本柱で実施していたが、2011年の東日本大震災の発生直後に、市内各地でリサーチを行い、以降は小・中学校を中心とした展開となっている。
- アリオスから遠い中山間地域を対象にしたプログラムも多い。
- 2016年度から3年間、ピアニストの田村緑さんを「アソシエイト・アーティスト」に迎え、三和地区の小学校や公民館などでコンサートやワークショップなど行う「おでかけアリオス三和プロジェクト」を実施。
- 新型コロナの時期はオンラインでダンスのワークショップなども実施。
- 2022年度は定期演奏会を行うN響メンバーがアンバサダーとなり、演奏会の前に2つの地域を回って仲間づくりや理解促進に取り組む事業を実施。

キッズルーム・プログラム



産後1ヶ月から1歳までの母子と一緒に体を動かしながら、心身の不調を整える「ママフィット with ベビー」

- いわきアリオスでは、開館当初から「あそび工房」と題し、市民と協働で子ども向けプログラムや子育て世代の支援に取り組んできた。2011年から館の広報誌「アリオスペーパー」のこども版として「キッズ☆アリペ」を発行し(2023年2月末に126号を発行)、「あそび工房」の開催案内や子ども向け、子育て世代に向けたイベントやお役立ち情報の提供を行っている。
- 新型コロナの影響でキッズルームが使えなくなっていたことから、市内の子育て支援の団体等の要望も踏まえ、2021年4月から市内の複数のNPO法人等と協働でキッズルーム・プログラムをスタートさせた。
- 妊婦や0歳児のいる親子、生後1ヶ月～未就学児のいる親子などを対象に、身体を動かしたり、絵本や折り紙を使って親子で楽しんだり、子育てに関する心配や困りごとの相談などに応じている。
- 従来のアウトリーチとは異なるが、子育て期の親子を対象にした文化的なプログラムの実施例としてユニークな取り組みと言える。

「おでかけアリオス（コミュニティ事業）」の変遷

資料提供：いわき芸術文化交流館アリオス

年度		戦略等	施設型	コミュニティ型	地元アーティスト
2007	H19		小中学校 ・ 支援学校 ・ 幼稚園 ・ 保育園 ・ 病院・福祉施設	NUUプレ開館企画 地域創造おんかつ（小野明子さん） ・ NUU（シンガーソングライター） ・ 渡辺亮（パーカッションWS） ・ ヴィルタス・クワルテット  （AIRとして年に数回市内各地に滞在して事業展開）	
2008	H20	開館			
2009	H21				
2010	H22			各地区のまちづくり系団体との関係を構築	
2011.3			東日本大震災 2011年4月～5月 市内各地でのリサーチ活動		
2011.6～	H23 6～	事業戦略①	小中学校を最優先に展開	各地域での「おでかけアリオス」を増やした1年	おでかけアリオス研究会Ⅰ期
2012	H24			タイムカプセル2012 被災地でのコミュニティ再生支援プロジェクト ・ 久之浜 ・ 勿来地区・双葉郡 ・ 小川町	
2013	H25	事業戦略②	おでかけアリオス地域交流落語会	AIR（江名地区） 2013～AIRを見直し	おでかけアリオス研究会Ⅱ期
2014	H26			2013～15年 地域との関係が希薄な時期	
2015	H27				
2016	H28	事業戦略③	支援学校への断続的展開	田村緑さんによる 地域の方と地元アーティストにより継続	おでかけアリオス研究会Ⅲ期
2017	H29		三和プロジェクト	地域と いわきアリオスの新しい関係を探るスキマチイワキ（FMいわきと共業） 全16回	
2018	H30		市内文化施設との連携アウトリーチ	劇団ごきげんよう（指導・演出：永山智行さん）	
2019	R1	事業戦略④	コロナ禍	市内全13地区でのおでかけアリオスを明言	おでかけアリオス研究会Ⅳ期
2020	R2			N響 いわきアンバサダー	
2021	R3			イオンモールとの連携	
2022	R4				



りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館 | 音楽アウトリーチ事業等

【施設概要】

開館：1998年  
 運営：(公財)新潟市  
 芸術文化振興財団(指  
 定管理)  
 施設構成：  
 コンサートホール  
 (1,884席)、劇場(868  
 席)、能楽堂(382席)、  
 スタジオA・B、練習  
 室1～6、ギャラリーな  
 ど



音楽アウトリーチ/田村亮太 (Sax)、小黒莉奈 (P) (2022年11月)

趣旨・目的	りゅーとぴあが持っている音楽・演劇・舞踊の専門性を生かし、舞台芸術の魅力を広く市民に伝えて、舞台芸術を生きる喜びとして感じる市民が増えていく。
対象	<ul style="list-style-type: none"> <li>小学生(4年生、5年生)、親子等</li> <li>市内病院、市外の図書館や文化会館でも実施</li> <li>視覚障がい者</li> </ul>
芸術分野	クラシック音楽、能楽、演劇、舞踊
アーティスト	東京交響楽団の楽団員、能楽師、劇作家・俳優 地元アーティスト りゅーとぴあ専属舞踊団 Noism のメンバー
募集方法	市教育委員会を通じて市内小・中学校に募集をかけ、学校側の希望と過去の開催実績を勘案して、できるだけ多くの学校に訪問できるよう調整して実施校を決定。
実績	東響楽団員によるアウトリーチは、市内小学校110校の内、60校を対象に実施(約4,300名が参加)。新型コロナで2020、21年度は実施できず、22年度に20校で再開。地元アーティストによる「音楽アウトリーチ事業」は、2017年度は31校で38回、参加者数は1,724名、18年度は18校、23回、1,118名、19年度は23校、28回、1,279名。22年度は20校で実施予定。
特徴的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>1999年から新潟市が実施していた「わくわくキッズコンサート」は、市内の小学5年生全員を東京交響楽団(以下、「東響」)のコンサートに招待していた。そのため、東響楽団員のアウトリーチは小学5年生を対象とした。※「わくわくキッズコンサート」は2017年で終了、現在は後継の子ども向け公演を実施中。</li> <li>東響のアウトリーチは演奏会に興味を持ってもらうことが目的のため、プログラムは定型で、楽団員、伴奏者、財団スタッフの3名が一組となって訪問する。</li> <li>2012年、地域創造の「公共ホール音楽活性化政令指定都市モデル事業」として地</li> </ul>

元の登録アーティストによる「りゅーとぴあ音楽アウトリーチ事業」をスタート。キーワードは「競争」「スタンダードの提示」「研修」。登録期間は1期2年、現在の第4期は2組が登録し、それぞれ年約10校の小学4年生を対象にアウトリーチを実施。

- 登録アーティストはプログラムづくりに時間をかけ、登録期間が終わる2年目の最後にはスタジオA（130席）で約2時間のリサイタルを行う。

視覚障がい者のための  
Noism からだワークショップ



「視覚障がい者のためのNoism からだワークショップ」  
井関佐和子（Noism）、参加者（2022年12月）

- 2019年から、Noism は「視覚障がい者のためのからだワークショップ」を開始。プロの舞踊家の身体に触れたり、音楽に合わせて一緒に動いたりすることで、視覚障がい者だけでなく、舞踊家自身も互いに新しい世界を感じ、楽しむことができる事業となっている。
- 1対1で「手と手」を合わせ、押したり押し返したりすることからスタート。その後、身体全体に触れながら、舞踊家が身体を動かしたときの変化を感じ取ろうとしているうちに、視覚障がい者も一緒に動いて踊っているようになる。参加者の一人はその体験を「動きが激しくなって、スタジオ中を動き回ったり、リフトをしたりして、舞踊家に身を任せて陶酔の中に一緒に入っていくみたいな感じ」と語る。
- その参加者は、2020年にNoism が翌年に公演予定だった『春の祭典』の一部をワークショップで実際に踊り、本番では最前列で鑑賞。「ワークショップを体験して自分の中に素晴らしいダンスのイメージが広がっており十分に鑑賞できたと思う。金森さんは『ダンスは物語や音楽を視覚化する営みだ』とおっしゃっているが、視覚障がいのある自分が鑑賞することは、可視化されたダンスを再び不可視化して何が残るかを感じ取ること」というのが彼の受け取り方である。
- Noism のメンバーは小学校のアウトリーチも実施しているが、ホールの専属舞踊団として、プロフェッショナルな舞踊家がいることで実現できる《りゅーとぴあならでは》の取り組みと言える。

視覚障がい者のための



# Noism からだワークショップ

あなたも Noism のメンバーと一緒に身体を動かしてみませんか？



昨年のワークショップの様子 photo: Ryu Endo

りゅーとぴあ専属舞踊団 Noism Company Niigata(ノイズム・カンパニー・ニイガタ)では、2018 年から視覚に障がいのある皆さんと共に「視覚障がい者のためのからだワークショップ」を開催しています。プロの舞踊家の身体に触れたり、音楽に合わせて一緒に動いたりすることで、視覚に障がいのある皆さんだけでなく、舞踊家自身もお互いに新しい世界を感じ、楽しむことができる貴重な機会になっています。ワークショップでは、視覚に障がいのある方と舞踊家が1対1で「手と手」を合わせるところから始まります。手の触れ合いから心が響き合い、あなたの触覚・聴覚・気配が全開…いつの間にか、誰かとともに音楽に合わせて踊っている自分に驚きます。初めての方も参加しやすいやり方で進めていきますので、どうぞお気軽にご参加ください。りゅーとぴあで皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。

日時 2022年12月17日(土)16:00~18:00 (振り返りの対話を含む)  
会場 りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館〈スタジオB〉新潟市中央区一番堀通町 3-2  
参加費 無料 \*動きやすい服装でおこしください。  
対象 視覚に障がいのある方と、その付添関係者 (15~20人程度)  
当事者以外の方の見学・取材も可能です。ご希望の方はりゅーとぴあまでご連絡ください。

申込・問合せ りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館 舞踊企画課  
電話:025-224-7000(平日 11:00-18:00) メール:info-noism@ryutopia.or.jp

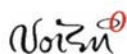
締切 2022年12月10日(土) 定員になり次第締め切ります

## Noism Company Niigata (ノイズム・カンパニー・ニイガタ)

日本初の公共劇場専属舞踊団として 2004年4月りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館で設立。プロフェッショナル選抜メンバーによる Noism0(ノイズムゼロ)、プロフェッショナルカンパニーNoism1(ノイズムワン)、研修生カンパニーNoism2(ノイズムツー)の3つの集団があり、国内・世界各地からオーディションで選ばれた舞踊家が新潟に移住し、年間を通して活動しています。

www.noism.jp / twitter: @NoismPR / Instagram: noism\_official / Facebook: Noism Company Niigata

主催 公益財団法人新潟市民芸術文化振興財団



Noism Company Niigata / RYUTOPIA Niigata City Performing Arts Center





上田交流文化芸術センター サントミュージゼ | 芸術家ふれあい事業等

【施設概要（劇場・ホール）】

開館：2014年

運営：上田市直営

施設構成：

大ホール（1,530席）、小ホール（320席）、大スタジオ、中スタジオ、スタジオ1～4、多目的ルーム、会議室、和室など

※市立美術館を併設



芸術家ふれあい事業「クラスコンサート」 ホルン：福川伸陽（2022年8月）

<p>趣旨・目的</p> <p>クラシック音楽分野のアウトリーチ</p>	<p>【クラスコンサート】</p> <p>音楽室など身近な空間でプロの演奏を聴くことにより、児童の感性や想像力を育む／夢を信じ、明確な目標を立てて努力することの大切さと魅力を知る／児童同士が互いの感じ方の違いを知ることや、普段身近に接する機会の少ない「芸術家」との交流を通じ、人間性やコミュニケーション能力を育む。</p> <p>【地域交流アクティビティ】</p> <p>身近な空間でプロの演奏家との交流を行うことにより、地域住民等が気軽にクラシック音楽に触れられる機会を提供する。</p> <p>【地域ふれあいコンサート】</p> <p>公民館など身近な空間でプロの演奏家との交流を行うことにより、地域住民が気軽にクラシック音楽に触れられる機会を提供する。</p>
<p>対象</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 市内小学校全25校（原則として5年生、1～2クラス単位）</li> <li>● 一般市民</li> </ul>
<p>芸術分野</p>	<p>クラシック音楽</p>
<p>アーティスト</p>	<p>「レジデント・アーティスト」として地域創造のおんかつ登録アーティストをはじめ、国内外の第一線で活躍するアーティストに依頼。</p>
<p>募集方法</p>	<p>「クラスコンサート」は市内全小学校の5年生が対象</p>
<p>実績</p>	<p>2014年の開館年からスタート。2022年度は市内全小学校5年生、51クラスを対象に46回を実施、1,460名が参加。これまでの総参加人数は13,335名。</p>
<p>特徴的な取り組み</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 演奏家には、クラスコンサートの他に高齢者施設など劇場以外の場所での「地域交流アクティビティ」や公民館等での「地域ふれあいコンサート（入場料500円、高校生以下は無料）」、楽曲や作曲家について出演者自身がお話しをする「アナリーゼワークショップ」なども実施してもらい、最終的なリサイタルまでを含め文字どおり「レジデント・アーティスト」として活動してもらおう。</li> </ul>

- クラスコンサートを軸とした地域交流プログラムがベースにあり、その先にホールにおけるリサイタルなどを設定することで、それらが循環する仕組みを生み出しているのが、サントミュージゼの音楽事業の基本的な構造となっている。
- 演劇、ダンス分野の芸術家ふれあい事業では「レジデンス・アーティストによる市民参加型公演、ワークショップ等（対象：一般市民）」や「実験的演劇工房」（対象：高校生、下段参照）」を実施。
- ダンス事業では、子どもたちがアーティストと一緒に体を動かし、体を使って表現することの楽しさ、他者との違いを認め合う「特別授業」も実施。

実験的演劇工房  
(2014年開始)



実験的演劇工房3rd「Q学」作・演出・監修 田上豊 (2016年12月)

- 市内の高等学校演劇班（現在4校）を対象に、2週間程度の間ワークショップ及び作品制作に取り組み、最終日に成果を発表。
- これまで岩崎正裕（劇団「太陽族」）、田上豊（劇団「田上パル」）、守田慎之介（劇団「演劇関係いすと校舎」）、多田淳之介（劇団「東京デスロック」主宰）などの劇作家・演出家をレジデンス・アーティストに迎えて、演出や監修、指導を依頼。これまでに178名が参加。
- 同世代の高校生が一堂に会して実験的な（自由な発想による）作品制作に取り組み、「悩み」「考え」「生み出す」過程を一緒に経験することによって、表現の可能性を考え、新たな創作回路を育成することを目指している。
- 劇場スタッフは高校生のサポートという立場で活動を支援し、実質的な運営は高校生自身が担っている。活動の過程で技術スタッフをはじめ、劇場を支える人たちの仕事を知り、経験することで、将来の文化芸術を支える人材の育成も視野に入れている。
- 実際、インタビューした実験的演劇工房の参加経験者3名は、卒業後地元の舞台技術の会社に就職しサントミュージゼで舞台機構の仕事を担当、東京の大学の演劇学科舞台美術コースへ進学、役者を目指して演劇を学ぶ大学に進学といった道を選択している。

演劇・ダンス事業の変遷と「実験的演劇工房」

資料提供: 上田市交流文化芸術センター サントミュージゼ

年度	項目	具体的な内容	特記事項
2013	H25	<p>【重点項目: プレ事業】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・リージョナルシアターモデル事業の実施(演劇)</li> <li>※小学校、中学校、高等学校、一般を対象に実施</li> <li>[公共ホール音楽活性化事業の実施(音楽)]</li> </ul>	実施と併せて、小学校及び中学校、高等学校へのヒアリング等を行い、アウトリーチに関する調査を行う。
開館			
2014	H26	<p>【重点項目: 演劇事業の構築】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>★レジデント・カンパニーによる演劇事業の開始(1年目)</li> <li>★レジデント・アーティストによる「<b>実験的演劇工房</b>」の開始(1年目)</li> <li>★劇場との連携・協力公演の開始</li> </ul>	レジデント事業の1年目は、市民参加公演及びWSなど、芸術家と市民とのふれあいを目的とした様々な事業を実施し、その成果を次年度以降に反映させていく。
2015	H27	<p>【重点項目: ダンス事業の構築】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>☆レジデント・カンパニーによるダンス事業の開始(1年目)</li> <li>★レジデント・カンパニーによる創造公演(2年目)</li> <li>★小学生を対象とした鑑賞事業の開始</li> <li>★招聘公演の開始</li> </ul>	レジデント事業の2年目は、劇場での公演制作を市民参画を意識し、上田独自の取組を考えていく。 また、今後の事業展開を視野に、教育委員会との連携を意識した調整を行う。
2016	H28	<p>【重点項目: 商店街・公演事業の強化】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>☆レジデント・カンパニーによる創造公演(2年目)</li> <li>☆小学校へのアウトリーチの本格実施の開始</li> <li>★商店街連携事業の開始</li> <li>・劇場との連携・協力公演、招聘公演及び共催公演の強化</li> </ul>	新たにオープンをした「犀の角」(民間劇場)を軸にした商店街との協力体制を考えていく。 また、平成27年度の教育委員会との連携を踏まえて、アウトリーチを展開していく。
2017	H29	<p>【重点項目: 姉妹都市・劇場発信】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>★豊岡市との姉妹都市交流事業の開始</li> <li>・上田から全国への発信事業(ツアー公演)の実施(演劇)</li> <li>・子ども(小学生)を対象とした事業の実施(演劇)</li> </ul>	姉妹都市である豊岡市との交流事業をはじめ、劇場で制作した公演を全国に紹介していく。
2018	H30	<p>【重点項目: 県・高等学校との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>☆レジデント・アーティストによるダンス事業開始</li> <li>・商店街等連携事業の強化</li> <li>・高等学校との連携強化</li> <li>※信州総文祭: 全国高等学校総合文化祭(演劇)の実施</li> </ul>	様々な団体との連携を強化し、2019年の日本劇作家大会の開催に向けて土台づくりを行う。
2019	R1	<p>【重点項目: 事業見直し】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本劇作家大会の開催(演劇)</li> <li>・演劇・ダンスに於けるレジデント事業の見直し</li> </ul>	H26～H30度までの5年間を一つの区切りとして、その集大成として「日本劇作家大会」を実施する。併せて今までの事業(主にレジデント事業)の見直しを行う。
2020	R2	<p>【重点項目: 共同制作】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>★長野県及び商店街との共同制作公演及び事業の開始</li> <li>★ながの演劇ネットワークへの協力開始</li> <li>☆新国立劇場との連携・協定の締結</li> <li>・レジデント(演劇)事業の再構築</li> </ul>	※新型コロナウイルス感染症対策による事業の縮小又は中止あり
2021	R3	<p>【重点項目: 新国立劇場との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新国立劇場との連携・協定事業の開始</li> <li>・レジデント(ダンス)事業の再構築</li> <li>・上田市立美術館との連携事業の強化(ダンス)</li> <li>・子どもに向けた事業の強化(演劇)</li> <li>・商店街との共同制作事業の強化(演劇)</li> </ul>	
2022	R4	<p>【重点項目: テレビ局との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テレビ局等との連携・共同主催事業の強化(演劇)</li> </ul>	

★は演劇 ☆はダンスの継続事業

※なお、音楽事業では2014年の開館年から「芸術家ふれあい事業」として、市内全ての小学校(25校)での「クラスコンサート」、市内9地域の公民館で開催する「地域ふれあいコンサート」等を継続実施している。



穂の国とよはし芸術劇場 PLAT | 芸術文化体験普及事業（「プラットが学校へ」）等

【施設概要】

開館：2013年  
 運営：（公財）豊橋文化  
 振興財団（指定管理）  
 施設構成：  
 主ホール（778席）、ア  
 ートスペース（266席）、  
 創造活動室 A～G、研修  
 室など



「プラットが学校へ」 進行役：柏木陽（2021年11月）

趣旨・目的	アーティストが学校に出向き、子どもたちと直接触れあう場を設けることで、創造性や子どもたち同士のコミュニケーション能力を育むとともに、豊かな情操を養う機会の拡大を目指す。学校と劇場が連携・協働することで、アートを活用した新しい学びの可能性を探る。
対象	● 小・中学生（特別支援学校・学級含む）
芸術分野	演劇、ダンス、音楽
アーティスト	演劇では柏木陽さんやすずきこーたさんなどの専門分野とファシリテーターの両方で活動するアーティストに依頼。ダンスでは城俊彦さんに依頼することが多く、音楽は棚川寛子さんや野村誠さんなど、作曲家を起用することが多い。
募集方法	前年度の11月に参加希望校調査（第1次）、2月に参加希望校調査（第2次）を行い（希望校調査は豊橋市教育委員会が実施）、4月に決定通知を送付。
実績	開館前の2011年からスタート。開館3年目の15年から市内の全小・中学校・特別支援学校に募集を行うようになり、実施回数や参加者数が急増（最多は17年の43校、108回、3,180名）。新型コロナ禍の20年、21年も継続し、21年は延べ23校で実施。
特徴的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ①新年度のクラスづくりワークショップ、②演劇・ダンス・音楽による表現体験ワークショップ、③授業の成果を演劇形式で学び直すワークショップ、④同一学年による継続的な表現ワークショップ、⑤学芸会・学習発表会に向けたワークショップ、⑥特別支援学校・学級の児童・生徒対象の表現体験ワークショップの6つが基本のプログラムで、1回のワークショップは2時限分（90分）がベースとなっている。</li> <li>● 当初は⑤学芸会・学習発表会に向けたワークショップへのニーズが高かったが、学年単位で参加人数が多くなるため、クラス単位で実施ができるワークシ</li> </ul>

ワークショップのプログラム重視に移行。

- ③授業の成果を演劇形式で学び直すワークショップは、農業体験校の場合「種まきから収穫までのシーンをつないで演劇作品を作ってみよう」などを実施。
- 継続的に実施することで見えてくること、できることが変わるため、④同一学年による継続的な表現ワークショップを追加し、年間3回まで実施が可能に。
- 音楽でも鑑賞型ではなく体験型で、子どもたちからもらったエッセンスをもとに作曲、演奏、アンサンブルをするということを重視している。
- 特別支援学校・学級はダンスが増えていて、それを経験した教師が通常級や体育にダンスを取り入れようというニーズが高まっている。

ワークショップ  
ファシリテーター  
養成講座



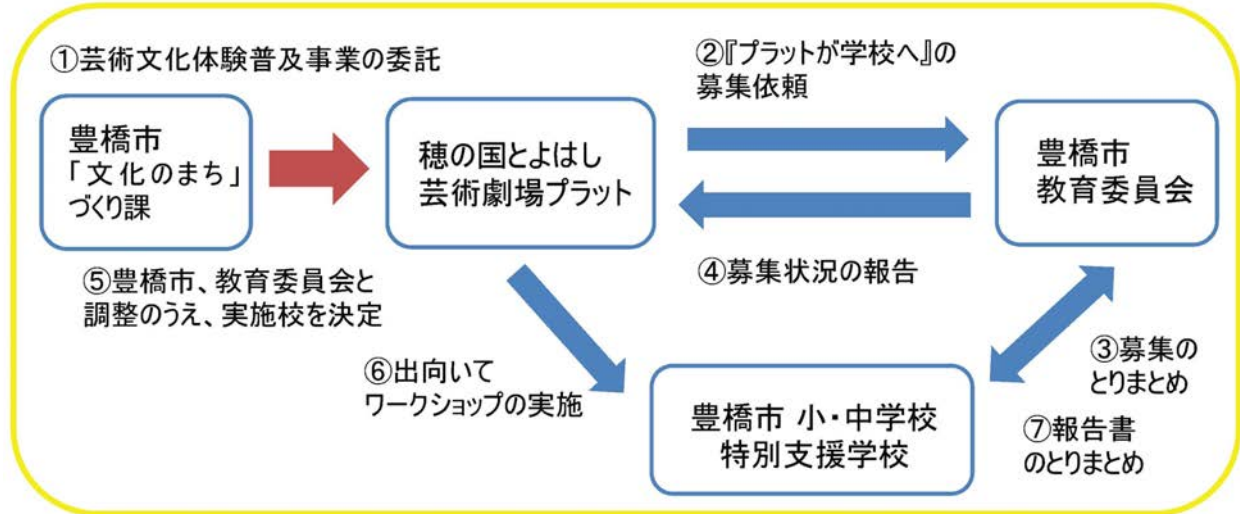
ワークショップファシリテーター養成講座2019 前期

- 市内小・中学校に出向いて行う演劇ワークショップの進行役（ファシリテーター）を務める人材の育成を目的に2014年度にスタート。前期（夏）、後期（秋）の2期に分けて実施、それぞれで参加者を募集する。参加者数は前期が20名前後、後期が10～15名程度。
- 前期は、子どもへの働きかけを学ぶことを目的に、7回程度の講座でワークショップの体験、ワークショップの進行プランの立案、子ども向けイベント「ワークショップ縁日」の進行などに取り組む。後期は10回程度の講座で、まち歩きや取材をとおして、グループで演劇づくりに取り組み、最後に発表会を行う。
- 講師は柏木陽、すずきこーた、吉野さつき、青山公美嘉など。
- これまでの受講者5名にインタビューしたところ、1名はアウトリーチの「有償コーディネーター」として、もう1名はアウトリーチやワークショップの「有償アシスタント」を劇場から委託されるようになった人もいる。
- 講師陣と同じレベルでファシリテーターを務められるまでには至っていないが、講座への参加を通して、演劇やアウトリーチ、ワークショップの可能性を発見したり、演劇は日常の中に存在していると感じ取ったりするなど、演劇や劇場の意味、役割を深く理解し、それを広めたい、という人材が生まれている。

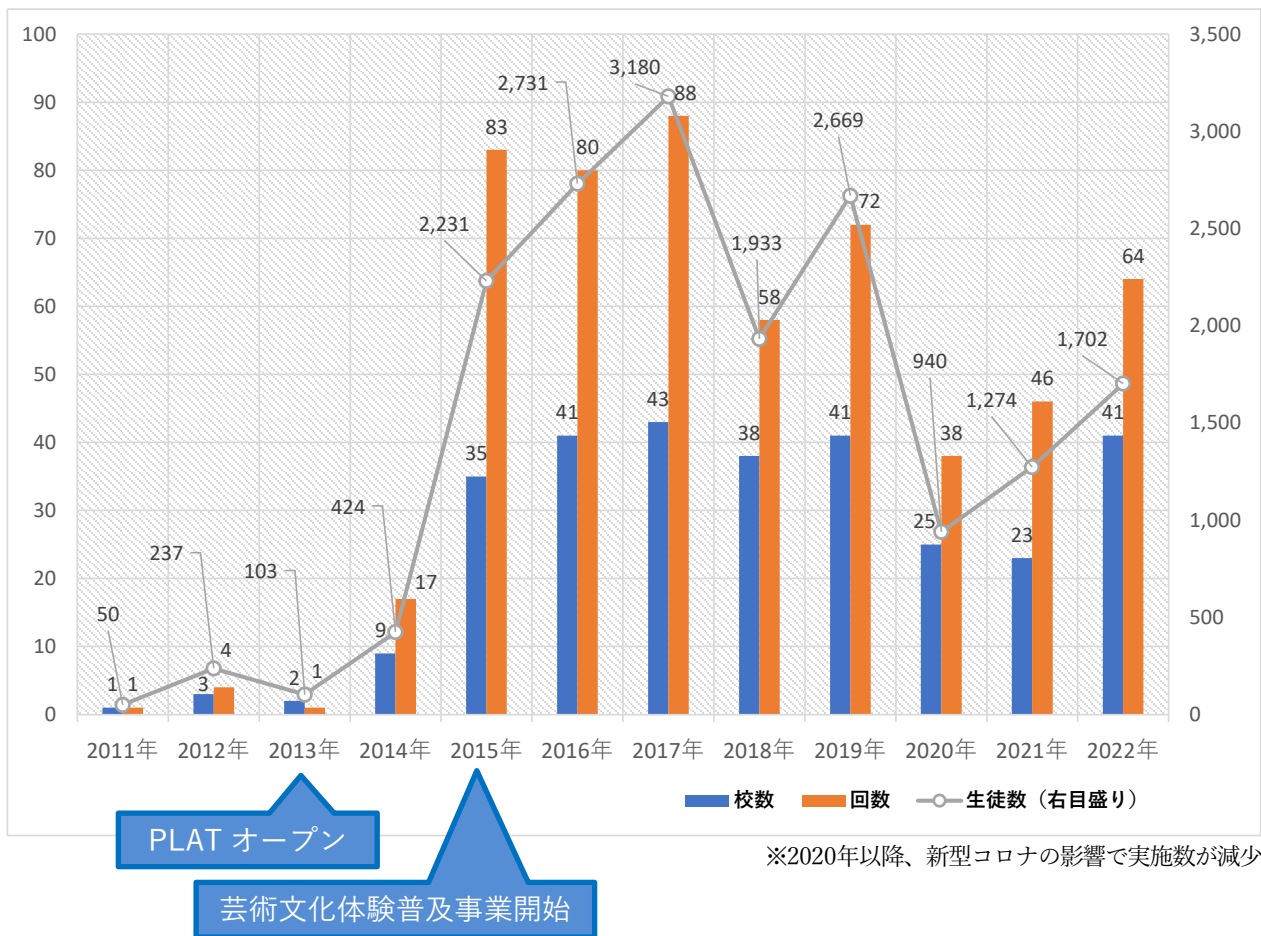


## 学校向けアウトリーチの実施の仕組み

芸術文化体験普及事業『プラットが学校へ』は、穂の国とよはし芸術劇場 PLAT が豊橋市から委託を受けて実施しており、教育委員会や学校との関係を含めた具体的な流れは下図に示したとおりである。



## 11年間の校数・回数・生徒数の推移



資料提供：穂の国とよはし芸術劇場 PLAT

北九州芸術劇場 | キタ Q アーティストふれあいプログラム等

【施設概要】

開館：2003年  
 運営：（公財）北九州市  
 芸術文化振興財団（指定  
 管理者）  
 施設構成：  
 大ホール（1,269席）、中  
 劇場（700席）、小劇場  
 （96-216席）、創造工房・  
 稽古場・セミナールーム、  
 チケット&アーツ  
 ペース Q-station、市民  
 ギャラリーなど



有門正太郎 演劇プログラム 飛幡中学校（2019年12月）

趣旨・目的	普段、劇場やホールに足を運ぶことの少ない子どもたちが、多様な価値観を持つアーティストや芸術との出会いを体験することで、子どもたちの想像力や表現力、他者と協働しながら新しい価値を創造する力を育み、創造性や個性を伸ばす手助けとなることを目的としている。
対象	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小学校3～6年生（演劇・ダンス）</li> <li>● 中学校1～3年生（演劇）</li> <li>● 特別支援学校（小学部・中学部）（ダンス）</li> </ul>
芸術分野	演劇、ダンス
アーティスト	国内外で活躍するアーティスト（中村蓉、セレノグラフィカ、地域創造事業の参加アーティストなど）、地域の演劇人（有門正太郎、守田慎之介など）
募集方法	年度初めに募集、5月中～下旬に調整、6月上旬に決定（応募多数の場合は抽選）。
実績	開館当初は教育普及事業として、学校演劇出前ワークショップを実施していたが、2011年度から現在の形に移行。小中特別支援を合わせて年間10～12校程度を対象に4コマ程度のワークショップを実施。2021年度の実績は10校、24クラス、829名。 <small>※新型コロナの影響により、予定していた12校中2校は中止</small>
特徴的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教員との打合せを丁寧に行うのが特徴。実施決定後に担当者が学校を訪問し最初の打合せ、その後アーティストと担当者が下見と打合せをしてから本番を迎える。教師の要望を踏まえ、1日ではなく2日間のプログラムを企画、実施し、1日目、2日目とも振り返りの時間を取っている。</li> <li>● 学校向けアウトリーチとしては「ギラダンス・学校ワークショップ」（対象：小中学生全学年、年間3校）も実施。劇場と地元のプロサッカー клуб「ギラヴァンツ北九州」（現在はJ3）との協働で生まれた応援ダンス「ギラダンス」のワークショップを行い、音楽に合わせて身体を動かす楽しさや表現する豊かさ、他者とのふれあいやコミュニケーション力を育てることが目的。</li> </ul>

- 劇場の4つの事業コンセプトのひとつ「育つ」に対応する「学芸事業」では、他に「夏休み！子どもの劇場体験」「高校生のための演劇塾」「大学演劇ラボ」「劇場文化サポーター事業」「地域のアートレパトリー創造事業」、留学生や大学生、未就学児親子、経験者向けのダンスワークショップなども実施している。

ひとまち+  
アーツ協働事業  
「レインボードロ  
ップス」  
「若者応援芸術プ  
ログラム」



北九州芸術劇場×北九州市子ども・若者応援センター「YELL」

2019年度 若者応援芸術プログラム「からっぽのクレヨン箱」成果発表

- 開館10周年頃から地域のさまざまな団体や機関などとパートナーシップを組み、芸術文化の力を活かして、“人與人”“人とまち”をつなぐ「ひとまち+アーツ協働事業」を展開し、舞台芸術の持つ力を活かして、地域の課題解決や多様性のある社会の実現に寄与することを目指している。
- 2013年から7年間、北九州市身体障害者福祉協会アートセンターと協働で、セラノグラフィカを迎えて、障がいの有無にかかわらずダンスを楽しむ「レインボードロップス」に取り組み、2020年に小劇場で『こんなにも、家族』を公演。
- 同じく2013年から北九州市子ども・若者応援センター「YELL」／エール：社会生活を営む上でさまざまな悩みや困難を抱えているおおむね15歳以上39歳以下の方とその家族をワンストップサービスで支援する「総合相談窓口」と協働で「若者応援芸術プログラム」を実施。
- 演劇やダンスのアーティストが、若者たちとともにさまざまな「芸術体験」を継続的、長期的に行うことで、若者の創造性を高めたり、さまざまな価値観に触れたり、自己表現力や自己肯定感を高めたりすることを目指している。
- 2022年度は守田慎之介（劇作家・演出家）と「YELL」の若者たちが3年ほど前につくりあげた脚本『からっぽのクレヨン箱』（いろんな色・個性が存在するクレヨンの国で太陽が突然なくなり真っ白になった世界で太陽や色を取り戻しに行く物語）の再演（人形劇 Ver.）に取り組んだ。
- 人形を使うことで、それぞれの得意分野を活かしながら若者達が参加できるようになった。彼らは、自分の意見が一般的なものと違って発言できない、自信を持っていないことが多いが、有門正太郎（俳優、劇作家・演出家）や守田のファシリテーションで、若者たちが自分から安心して発言できるようになるなど、活動の幅が広がった。



継続していく事業としてスタート。初年度は演劇とダンスの2つの方向性からアプローチしました。

## 2013

※WSはワークショップ

### ■演劇体験WS (全5回)

◎日程：2013年11月8日、11日、12日  
2014年1月20日、21日

◎会場：北九州市立ユースステーション

◎講師：田上豊 (田上パル) ◎アシスタント：門司智美

### ■ダンスWS (全1回)

◎日程：2013年12月13日

◎会場：北九州市立ユースステーション

◎講師：セレノグラフィカ (隅地茉歩、阿比留修一)

◎アシスタント：今村貴子

## 2014

### ■演劇体験WS (全2回)

◎日程：2015年2月21日、22日

◎会場：北九州市立ユースステーション

◎講師：田上豊 (田上パル)

◎アシスタント：門司智美

## 2015

3年目となる2015年度には、参加する若者と一緒に「エールダンス」をつくりました。

### ■オリジナルダンス

「エールダンス」を創ろう！ (全4回)

◎日程：2015年8月12日、19日、9月10日、11日

◎会場：北九州市立ユースステーション

◎講師：セレノグラフィカ (隅地茉歩、阿比留修一)

◎アシスタント：今村貴子

### ■演劇体験WS (全3回)

◎日程：2015年11月18日、12月2日、2016年3月3日

◎会場：北九州市立ユースステーション

◎講師：田上豊 (田上パル)、  
有門正太郎 (有門正太郎プレゼンツ)

◎アシスタント：門司智美

2016年度の一時的休止期間を経て、2017年度からは地元のアーティストとともに演劇体験WSを再開。まずは職員の方向けに、WSのねらいや意義を説明しながら体験してもらう「インリーチ」を行いました。

## 2017

### ■演劇体験WS (全3回)

◎日程：2017年8月23日、10月18日、25日

◎会場：YELL 事務所、北九州市立ユースステーション

◎講師：有門正太郎 (有門正太郎プレゼンツ)、  
守田慎之介 (演劇関係いすと校舎)

◎アシスタント：門司智美

繊細で感性豊かな若者達をもっと知りたいとの思いから、2018年度にはWS以外にも数回、アーティストとともにYELLの活動を見学させていただきました。

## 2018

### ■演劇体験WS (全10回/最終日は公開WS)

◎日程：2018年4月18日、10月10日、12月5日、12日

2019年1月9日、16日、2月6日、20日、3月20日、27日

◎会場：北九州市立ユースステーション、北九州芸術劇場、レインボープラザ

◎講師：有門正太郎 (有門正太郎プレゼンツ)、守田慎之介 (演劇関係いすと校舎)

◎アシスタント：門司智美

「公開WS」という形で初めての発表会をレインボープラザで開催。芸術活動への興味や関心が高まってきました。

## 2019

### ■演劇体験WS (全11回)

◎日程：2019年5月15日、9月15日、10月9日、11月13日、  
11月20日、11月22日、12月6日、12月11日

2020年1月8日、1月15日、1月22日

◎会場：北九州市立ユースステーション、北九州芸術劇場、自宅劇場「守田ん家。」

◎講師：有門正太郎 (有門正太郎プレゼンツ)、守田慎之介 (演劇関係いすと校舎)

◎アシスタント：門司智美 (有門正太郎プレゼンツ)

## 2020

### ■演劇体験WS (全9回)

◎日程：2020年6月19日、7月1日、7月22日、8月19日、10月23日、  
12月2日、12月9日、12月16日、12月18日

◎会場：北九州芸術劇場 創造工房 稽古場

◎講師：有門正太郎 (有門正太郎プレゼンツ)、守田慎之介 (演劇関係いすと校舎)

◎アシスタント：門司智美 (有門正太郎プレゼンツ)

## 2021

### ■演劇体験WS (全6回)

◎日程：2021年7月21日、11月17日、12月15日  
2022年1月14日、1月19日、1月21日

◎会場：北九州芸術劇場 創造工房 稽古場

◎講師：有門正太郎 (有門正太郎プレゼンツ)、守田慎之介 (演劇関係いすと校舎)

◎アシスタント：門司智美 (有門正太郎プレゼンツ)

地域文化施設におけるアウトリーチ・ワークショップの  
成果や効果に関する調査研究  
報告書

---

調査・発行 一般財団法人地域創造  
〒107-0052 東京都港区赤坂2-9-11  
オリックス赤坂2丁目ビル9F  
tel. 03-5573-4093 fax. 03-5573-4060

調査受託 株式会社ニッセイ基礎研究所  
芸術文化プロジェクト室  
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-7  
tel. 03-3512-1799 fax. 03-5211-1084

発行日 令和5年3月

